

第55回関東甲信越静地区造形教育研究大会

栃木大会

平成27年度栃木県造形教育研究大会

報 告

大会テーマ

「つなげよう 自分らしく生きる未来へ」

～あふれる思い・うみだす楽しさ・つたえあう喜び～



目 次

ページ	内容	ページ	内容
2	目次	8 6	8a 分科会
3	大会日程	8 8	8b 分科会
4	実行委員長あいさつ	8 9	9a 分科会
5	全体会	9 2	9b 分科会
7	大会宣言	9 5	10a 分科会
9	文部科学省指導講評	9 7	10b 分科会
1 2	小川三夫氏講演記録	9 9	11a 分科会
2 7	レセプション	1 0 1	11b 分科会
2 8	公開保育・授業一覧表	1 0 3	12a 分科会
2 9	幼稚園	1 0 5	12b 分科会
3 1	小学校 1 年	1 0 6	13 分科会
3 3	2 年	1 0 7	編集後記
3 6	3 年		
3 8	4 年		
4 1	5 年		
4 4	6 年		
4 7	中学校 1 年		
4 8	2 年		
5 0	3 年		
5 2	高等学校		
5 4	校種別分科会等一覧表		
5 6	1a 分科会		
5 9	1b 分科会		
6 2	2a 分科会		
6 6	2b 分科会		
6 8	3 分科会		
7 0	4a 分科会		
7 2	4b 分科会		
7 4	5a 分科会		
7 5	5b 分科会		
7 7	6a 分科会		
8 0	6b 分科会		
8 2	7a 分科会		
8 4	7b 分科会		

大会日程

第1日目

平成27年11月19日（木）全体会・記念講演 【宇都宮市立南図書館】

11:00 11:30 12:30 13:30 16:30 18:00

会議 受付	都県代表者 会議	全体会 受付	全体会			電車バス等で 移動	レセプション
			開会行事 基調提案	文部科学省 指導講評	記念講演		
栃木県立 宇都宮工業高等学校		宇都宮市立南図書館				移動	ホテル ニューイタヤ

■文部科学省指導講評者 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官 東良 雅人

■記念講演講師 寺社専門建設会社「鵜（いかるが）工舎」舎主 小川 三夫

第2日目

平成27年11月20日（金）公開授業・研究協議・分科会・ワークショップ

幼稚園 【宇都宮大学教育学部附属幼稚園】

9:00 9:30 10:00 11:20 12:30 13:20 15:20

受付	オリエン テーション	公開保育	研究協議	昼食 休憩	ワークショップ
----	---------------	------	------	----------	---------

（年少、年中、年長・3保育公開）

小学校 【宇都宮市立戸祭小学校】

9:00 10:00 10:45 11:10 12:00 13:20 14:10 14:20 15:10

受付	公開授業	休憩	研究協議	昼食 休憩	分科会1	休憩	分科会2
----	------	----	------	----------	------	----	------

（1.2.3.4.5.6年・6授業公開）

中学校 【栃木県立美術館・宇都宮大学教育学部附属中学校】

9:30 10:00 10:50 11:20 12:10 13:30 14:20 14:30 15:20

受付	公開授業	休憩	研究協議	移動	昼食 休憩	分科会 1	休憩	分科会 2
栃木県立美術館					宇都宮大学教育学部附属中学校			

（1,2,3年・3授業公開）

高等学校 【栃木県立さくら清修高等学校】

9:50 10:20 10:55 11:45 11:55 12:25 13:30 14:20 15:20

受付	オリエン テーション	公開授業	休憩	授業研究会	昼食 休憩	研究発表	講話
----	---------------	------	----	-------	----------	------	----

（3年生・1授業公開）



第55回関東甲信越静地区造形教育研究大会栃木大会を振り返って

関東甲信越静地区造形教育研究大会栃木大会
実行委員長 田中士計男

平成27年11月19日（木）・20（金）爽やかな晴天に恵まれ、文部科学省教育課程課教科調査官「東良雅人」様をはじめ、多くの御来賓の御臨席と各地より造形教育に関わる多くの方々の御参会をいただき、宇都宮市の各施設を主な会場として、充実した造形教育研究大会を開催できましたことに心より感謝いたします。

1日目は、栃木県立宇都宮工業高校会議室で「都県代表者会議」を実施し、宇都宮市立南図書館のサザンクロスホールにて「全体会」を開催しました。全体会では大会開催に向けた基調提案や大会宣言が示され、東良教科調査官からは造形教育の現状や関係者の果たすべき役割について、多くの助言をいただきました。講演では、本県出身の宮大工「小川三夫」氏による「不揃いの木を組む」を講演していただきました。様々な「ものづくり」の体験や実践から「人づくり」について御講話いただきました。全体会終了後は、「レセプション」会場にて多くの参会者が集い、様々な情報交換と交流を深めることができました。2日目は、幼稚園が宇都宮大学附属幼稚園、小学校が宇都宮市立戸祭小学校、中学校が栃木県立美術館と宇都宮大学附属中学校、高校が栃木県立さくら清修高校に分かれ、公開授業や授業研究会及び分科会等を実施し、提案や意見交換・助言等を通して中身の濃い研修を積むことができました。大会を通して、県外からの参加者も含め、それぞれに様々なお土産を持ち帰ることができたのではないのでしょうか。

栃木大会のテーマ「つなげよう 自分らしく生きる未来へ」～ あふれる思い うみだす楽しさ つたえあう喜び ～は、互いの立ち位置や発達段階に応じた「身に付けさせたい力」を育むための指導支援内容をよく理解し、それぞれの場での学びが深化し様々なものに発展していくとともに、「幼」から「高」までの活動や学びが関連性をもって広がり生かされていけるよう、そして造形教育が生涯学習の一端を担い形づくっていくような研究推進にしていこうという意図をもって設定しました。

当初、それぞれが大会開催の意図や栃木大会のテーマの意味をよく理解し、建設的な意見と活動で造形教育関係者全員にとって最大の研修の場になるようにとスタートしましたが、4校種のつながりのある研究推進は、一枚岩になるきっかけになるどころか実践することの難しさと厳しさを我々に痛感させる大きな壁として立ちはだかってきました。4校種が同一歩調で取り組もうと意見交換等を重ねますが、造形教育に対する考え方や大会への関わり方・指導者としてのスタンスに温度差があり、戸惑いさえ感じました。しかし、まさにそれらが発達段階に応じた「身に付けさせたい力」の違いや各校種の特性から生じるものであり、それらを理解し全てを含めて連携していくことが、つながりのある学びの共同体となり、生涯学習としての造形教育活動となり、テーマに迫るものでした。また、4校種が一緒になって関ブロ造形教育研究大会を開催する意味であり意図でもあるのです。



個々にとっても、なかなか見えてこない研究推進や大会運営の全体像であったかと思いますが、校内での研究推進とは大きく異なり、4校種の立場やこれからの造形教育が果たしていかなければならない役割を様々な情報交換や交流の場から学ぶこととなり、苦労以上に収穫の多い各種取り組みになりました。これからは担当都県にとって多くの課題を投げかけることになる関ブロ造形教育研究大会ですが、関わってこそ得られる学びがたくさんあり、これからの造形教育を関係者全員で真剣に考えることのできる素晴らしい場になるということを理解していただきたいと思います。

栃木大会が、提案色の濃いものや将来を見据えた先進的な研究を提示するどころか、たくさん

の課題を発信してしまったのではないかとという憂いがありますが、多くの関係者が集い様々な情報交換の場を提供できたことで、関ブロ造形教育研究推進の一端を担うことができたのではないだろうかと考えます。栃木大会を開催するにあたり、尽力いただいた関係者及び諸機関に心より感謝と御礼を申しあげるとともに、本大会で得た様々な学びや課題が決して一過性のものにならぬよう、各地区各学校内においてさらなる研究の推進と発信・共有を継続していく所存です。次回開催地の神奈川県成功を栃木の地から祈念いたします。

平成27年11月19日（木）

全体会

全体会次第

- | | | | |
|---|------------------------------|------------|----------|
| 1 | あいさつ | | 司会 齊藤加代子 |
| | 関東甲信越静地区造形教育研究大会栃木大会実行委員長 | | 田中士計男 |
| | 関東甲信越静地区造形教育連合理事長 | | 本間 基史 |
| 2 | 来賓祝辞 | | |
| | 栃木県教育委員会教育長 | | 古澤 利通 |
| | 宇都宮市教育委員会教育長 | | 水越 久夫 |
| 3 | 来賓紹介 | 栃木大会副実行委員長 | 阿久津雅尚 |
| 4 | 祝電披露 | 栃木大会副実行委員長 | 小口 誠 |
| 5 | 基調提案 | 栃木大会研究局長 | 土屋 一義 |
| 6 | 大会宣言 | | 高島利佳子 |
| 7 | 文部科学省指導講評 | | |
| | 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 | | |
| | 国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官 | | 東良 雅人 |
| 8 | 次期開催県あいさつ | | |
| | 第56回 関東甲信越静地区造形教育研究大会神奈川大会代表 | | 瀧澤 優子 |
| 9 | 記念講演 | | |
| | 「不揃いの木を組む」 | | |
| | 寺社専門建設会社「鵜（いかるが）工舎」舎主 | | 小川 三夫 |



全体会の様子



全体会の様子

大会宣言

今日の子どもたちを取り巻く社会は急激に変化しており、技術革新等の影響により、近い将来、職業のあり方も大きく変化する可能性があると言われています。将来を担う子どもたちには、急激ともいえる社会の変化を乗り越え、自立した人間として、他者と協働しながら主体的に未来を創造し切り拓いていく力が必要となります。

今、造形美術教育にかかわる私たちは、これからの未来を切り拓く子どもたちにとって造形美術教育がいかに必要であるかを再確認し、子どもたちにどのような資質や能力を培っていけばよいのかという問いに真剣に向き合っています。しかし、そんな私たちの思いに反して、造形美術教育の役割をしっかりと果たすための授業時数や専門とする教員の配置が十分でない等の現状があります。今こそ私たちは、造形美術教育を通して培われる「資質・能力」の素晴らしさを明らかにし、その大切さを外へ向かって強くアピールしていかなければなりません。

本大会では、「つなげよう 自分らしく生きる未来へ ～あふれる思い・うみだす楽しさ・つたえあう喜び～」をテーマに、「つながりを大切にしたい造形活動」を設定し、造形美術教育での学びが、子どもたちに自分らしく生きることのできる力を培うものであると考え研究を進めました。その中で「つながる」や「つなげる」をキーワードに、感動する思いや本物と出会い、直接人やものと触れ合い、自然とかかわり、五感を働かせて感じ取りながら、自分の思いを表現する学習活動を設定しました。また、「あふれる思い」「うみだす楽しさ」「つたえあう喜び」の3つのテーマをそれぞれに深める指導の在り方とこれらのテーマが相互につながるような授業をデザインし、次の事項の実現を目指します。

1 「自分を取り巻く世界とのつながりを感じる造形活動」を通して

造形活動の中で、子ども同士、子どもと教師、材料や用具、自然や環境、地域や社会など様々な人やものとの豊かな関係をつくるのが大切です。子どもは様々なつながりの中に存在する自分自身を実感します。また、五感を精一杯働かせて感じ取り、思いを深め自分の世界観を広げていきます。そして、子どもたちは自らの力で新たなつながりを見出していくのです。そのような造形活動での様々な人やものとの出会いや感動を通して、社会の変化に柔軟に対応しながら、自分のよさを実感し自分らしく生きる力を培います。

2 「あふれる思い・うみだす楽しさ・つたえあう喜びの3つのテーマを深めつないでいく造形活動」を通して

子どもたち一人ひとりが自分の表現に自信や喜びを見出し、夢中になって取り組めるような授業づくりを目指します。題材や材料との出会わせ方やかわらせ方、教師の子どもへの働きかけを工夫することであふれる思いをよりいっそう引き出します。その思いを試行錯誤しながら形や色で表現し、うみだす楽しさを味わうことのできる環境や指導の在り方を工夫します。そして、鑑賞活動を通して互いの表現のよさや感じ方を認め、尊重し合

いながら、つたえあう喜びを実感させていきます。これらの経験を積み重ねていくことで、思いを表現する力、自ら考えつくり出す力、他とコミュニケーションする力を高めます。

- 3 「幼稚園・小学校・中学校・高等学校から未来へと学びがつながる造形活動」を通して造形活動での学びの連続性や系統性、発展性を幼・小・中・高のつながりの中で再確認します。造形美術教育での学びが子どもの成長の中でどのように位置付けられ、その成長にどのように作用しているのかを幼・小・中・高で共有することが大切です。子どもたちに発達の段階に応じた造形活動の楽しさや素晴らしさを深く感じさせたり、一つひとつの造形活動がつながっていることに気付かせたりすることを通して、**学びをつなげ学んだことを未来に生かしていく力を**培います。

最後に、幼稚園・保育園・認定こども園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・大学・美術館などで造形美術教育に携わる者たちは、子どもたちが心豊かに、そして創造的に、さらに自分らしく生きることができるように、造形美術教育での学びを保障しなければなりません。

栃木大会を通して、造形美術教育における学びがこれからの社会に必要であるということをはっきりと発信し続けるとともに、未来をたくましく自らの手で切り拓くことができる子どもたちの育成を目指し、指導力向上や授業改善に向けて全力で取り組むことをここに宣言します。

平成 27 年 11 月 19 日

第 55 回関東甲信越静地区造形教育研究大会 栃木大会

平成 27 年度栃木県造形教育研究大会



文部科学省指導講評記録

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官

東良 雅人 先生



(1)「自分を取り巻く世界とのつながりを感じる造形活動」

- ① 子どもたちの経験・学んだこと・生活（とりわけ学校）・地域社会・自然環境・文化など、子どもたちの生き方と関わる教育を実践するのが造形美術教育である。
- ② 幼児教育～高等教育までその本質は変わらないが、その発達において関わりの深さが変化する。
- ③ 造形美術教育とは自分との関わりを通した「学び」である。
※単なる鑑賞・制作に留まることなく、発達段階におけるコミュニケーションを通して人やモノや物事への関心を深めることが造形美術教育の本質である。完成した作品の出来栄を評価するのではなく、その先にある「気づき」が目的である。
- ④ 授業に求められるのは、子どもたちに「やってみたい」という主体性を持たせ、今後の生き方に関わる内容にすること。

☆ 上記を実践するための大前提は【全ての子どもたちは豊かな存在である】ということ。



(2)「あふれる思い・うみだす楽しさ・つたえあう喜びの3つのテーマを深めつないでいく造形活動」

- ① 中教審における諮問をうけ論点整理し、冒頭に「新しい時代と社会に開かれた教育課程」と記し、教育が社会に対して積極的に関わり求めることとし、よって造形教育においても積極的に社会とつながりを求めていく。
- ② 現行の指導要領の一方で、感性や想像力をはたらかせ思考判断し、表現・鑑賞する能力を相互に関連させて育成することができているかどうかについては課題が残っている。
- ③ 一般的には教師が子どもに題材を示し、子どもたちがそれに基づき活動する。しかし、活動するということが本来の目的ではなく、その中で子どもたちの意欲を高めることこそ学習の中核である。その中核を発揮させ、獲得させていくことが教科としての構造である。
- ④ 前述の題材というものは教師に任されているが、子どもたちの生き方と関わるという視点から、子どもたちを一番よく知っている教師が授業づくりをしなければならない。教師だからこそできる指導が、反面、非常に基礎的な能力が曖昧な授業を生み出すという危険も併せ持ち、その曖昧な授業は子どもの学習における目標達成を阻害する。造形美術教育の恐ろしい点は活動だけは残るという点である。つまり、作品は残るが子どもたちには何の力も備わっていないということになりかねない。「活動があつて学びがない授業」に陥ってはならない。
- ⑤ 関連づいてはたらくとは、基礎的な能力が「関心・意欲・態度」に支えられながら、相互に関連しあいながらはたらくようにしていくことが重要である。発想・鑑賞・技能を単体で捉えるのではなく、関連してはたらかせる目的が教師のなかに無ければ子どもたちはその能力を獲得できない。これが現在の造形美術教育の改善すべき課題である。
- ⑥ 現在、教育課程企画特別部会においては、個別の知識技能と思考力・判断力・表現力と併せどのようにその知識を使うか、主体性・共同性・多様性・学びに向かう力、いわゆる主体的に学ぶ意欲（今までは学習に対しての意欲という側面が強かったが、）について、どのように子どもたちが社会（世界）と関わりより良い人生を送るか、こういったものに向かう態度を育成すべく、その視点がアクティブラーニングであり、学習評価とカリキュラムマネジメントであるとの議論がなされている。
- ⑦ アクティブラーニングの定義は、課題の発見と解決に向けた主体的・共同的な学びである。注意すべき点は、子どもたちの個性を生かすということは子どもたちに好き勝手やらせるということではなく、学習のねらいが示されそのなかで子どもたちが個性を発揮するという点である。また、教師が答えを示しそこに誘導する授業を無意識にってしまうという点にも注意が必要である。
- ⑧ 造形美術教育とは子どもが学習のねらいに基きながら、思考判断・創意工夫するなかで、子ども自身が答えを見つけるという学習を目指すべきである。従って、子どもの答えはいろいろなのであり、ひいてはその答えを基にした言語活動が共同的な学習につながることになる。それは多様性への気づきであり、学び方への気づきである。まさにこれはグローバル化が進むなかで求められる力である。
- ⑨ 造形美術教育のもう一つの重要な点は、自分の導き出した答えすらも一つではないということ

ころである。所謂、広がりのある学びが大切である。子どもたちが如何に自己決定を積み重ね自己実現を果たしていくのかが重要であり、教師が決定したことを子どもたちが完遂したとしても創造活動の技能や創りだす喜びを得ることはない。作品の価値というものとは自己決定のプロセスのなかにこそ存在し、子ども自身がその価値を一番よく理解している。課題の発見と解決に向けた主体的・共同的な学びという課題は教師が与えるものではなく、子どもが自ら発見するものである。造形美術教育が課題解決学習である所以はそこにあり、子どもが課題を発見しそれを乗り越えるプロセスに学びがあり、汎用的能力も獲得していく。この点を注意しながら教師は授業づくりをしていかなければならない。



(3)「幼稚園・小学校・中学校・高等学校から未来へと学びがつながる造形活動」

- ① 子どもの力で学ぶことができることがある。
 - ② 教えることで学ぶことができることがある。
 - ③ 上記 i) ii) のためには子どもたちのことをしっかりと捉えることが肝要である。
 - ④ 発達の段階に応じた学習があり、年齢ごとに学びを積み重ねていくことが重要。
 - ⑤ 教師は子どもの学びを実現するとともに、子どもの学びを視る力を備えなければならない、また、後進の教師にその力を備えさせなければならない。
- ☆「子どもたちに自分らしく生きることのできる未来につながるちから」がこの大会のテーマであり、【全ての子どもたちは豊かな存在である】と【全ての子どもたちは常に学ぶ存在である】ということをしかりと認識すべきである。その学びとは遊びや登下校、家庭、友人との関わりのなかにも存在する。それぞれの学びを結びつけるのが教育の役割である。造形美術教育を、つなげる教育・世界観を持つことのできる教育、新しい自分と出逢うことができる教育にするためには、常に子どもたちの学びと成長に寄り添う授業づくりをしなければならない。



みなさん、こんにちは。

私は、常々その「無駄口をたたくな。黙ってろ。」と、言われながら育った人間ですから、こういった場で話すこと自体が恥ずかしいのですが、今やっている仕事の話とか弟子の話も交えてしてみます。

自分は昭和39年の9月に高校2年の修学旅行で、初めて法隆寺の五重塔を見ました。そこで、法隆寺の五重塔を見た時、案内してくれた人が「この塔は、1300年前に建ったものですよ。」と言われました。1300年前に、どうやって、これだけのこの大きな材料を運んできたのか。そして、塔の上にある九輪をどうやってあげたのか。」思っているうちに、この仕事をしたらいいのではないかと思い始めたのです。ちょうどその頃は、ロケットが月に飛ぶというような時代でした。ロケットを月に飛ばすということは、たくさんのデータをそろえてから事に当たるのだと思うのです。しかし、法隆寺の五重塔はそうでなく、作ろうと思う信念で作りあげたような気がしたんですよね。ですから、作った人の、大工さんの汗、意思、それを学んだ方が、大学なんかに行くよりずっといいのではないかと思って、私は、それを目指しました。で、帰ってきて親父に「俺、こういう仕事をしたい。」と言うと、親父は、サラリーマンなので、「ま、お前の考えは分かるけれども、それは、川をさかのぼるようなもんだ。苦しいだけで周りの景色は変わらん。」と言われました。「そうでなく、船にでも乗って、下ることは考えられないのか。」と言われましたが、この仕事をやってみたいと思って、勘当のように家を出たことがあります。

昭和41年の2月に大工志願したのですが、私は栃木県の生まれなので、法隆寺に大工さんがいるのかも分かりませんでした。ですから、奈良の県庁に行って、「こういう仕事がしたいのでよろしくお願いします。」と言ったところ、「西岡樫光という棟梁がいるからそこを訪ねなさい。」と言われました。法隆寺に行くと、大工さんが二人仕事をしていたんですね。そこで、「西岡さんどなたでしょう。」と尋ねたところ、「西岡誰だ？」と言われまして。舞い上がってしまって、名前を忘れてしまったんですね。「名前忘れまして。」と言ったところ、「西岡は俺だ」と言って、話を聞いてくれたのは、西岡常一棟梁だったんですね。ですから、もし、そこで、名前を覚えて、西岡樫光さんと言えば、仕事場はあっちということになり、ちょうどその時には、樫光さんと言うのはお父さん、そして、長男の常一、そして次男の樫二郎、3人が各現場の修理をしていたん

ですね。ですから、自分は、名前を忘れてたからこの仕事に就けたんであって、名前を覚えていたら、もう、ここの仕事には就けていなかったでしょうなあ。ですから、頭がいいとか、記憶力がいいとか、運命と言うのは、ちょっと違う気がしましたね。そこで、「こういう仕事をやりたいんです。」と言ったら、18で行ったんですけど、もう年齢が高すぎる。それと、もう一つ、仕事がない。

「この仕事をしても嫁さんの貰い手がないぞ。どうしてもやりたいなら・・・」と文部省の建造物課に紹介されました。

文部省に行きましたけれども、「ここは、大工を養成する機関ではない。たとえ、1年でもいいから鑿（のみ）、鉋（かん）を使えるように、道具を使えるようになってこい。」と言われ、行くところがなくて、長野県の飯山という所に仏壇を作っているところがあるのですが、仏壇を作れば、少しでも宮大工には近いんじゃないかと思って、住み込み修行に行きました。今思うと、学校というところは、お金を払って教えてもらうんでしょう。しかし、弟子に入ると言うことは、食べさせてもらって、仕事も教えてもらう。ですから、そのお返しとかというか家事労働するのは当たり前なんです。しかし、家事労働してまで、その仕事を学ぶという人は、もう昭和41、2年の頃は、そんなにいなかったですね。ですから、その周りとの環境の違いがあんまりありすぎて、自分自身が、もうひがんだり、ゆがんだりした覚えがあります。

そこで仕事が終わって、1年ぐらいたったら、また、法隆寺に行ったんですね。そして、法隆寺に行ったら、文化財の監督さんがちょうど来られていて、「島根県の日御碕（ひのみさき）という所に図面描きの仕事があるから、それをするか。」と言うことで、しかし自分は、氏家高校ですから普通高で図面を描いたこともない。弟子の方であれば、だいたい三ヶ月ぐらいで描ける図面だと思いますが、自分は見よう見まねで描くわけです。誰も教えてはくれません。ですから1年半ぐらいかかってしまった。本当に1年半位を、3ヶ月ぐらいの給料でいるんですから、それこそ金のない生活をした覚えがあります。でもそんな時でもですね、仕事をやっていると、中学生が来るんですね。「にいちゃん。灯台に行こう」と。灯台に行くと、灯台には、たくさんの女の人が上に乗っているんですね。10円払ってのぼるんです。そうすると、なんとなく、上の人が降りる。自分たちは上がる。スカートの中が覗けるような感じで行くわけなんですけど、灯台は、真っ暗なんですよね。中は。螺旋階段ですから、そんなのはないんですけども、食う米がなくてもそういう時の10円は、工面するものだと思います。3回ほど行きましたが、まあまあ楽しい思い出となりました。



1年半経って、まあ、43年の11月頃に兵庫県の豊岡という所で酒垂（さかたれ）神社という神社があって、そこを解体修理した時に、3ヶ月位した時に、西岡棟梁から手紙が来ました。これから、奈良の法輪寺というところで、三重塔の新築の現場があるので、お前一人位なら来てもよろしいという手紙でした。それは、嬉しかったですね。丸3年経った4年目の春に、手紙が来たんですから。しかし、もう3年経ってますから、自分も職人の厳しさというのは、ちょっとは分かっていたね。ですから、道具をもうこれ以上刃物を研げないという位、一生懸命、研いで持っていたんですね。それなのに、法輪寺に着いて、西岡棟梁に道具箱を見せたらポイと投げられましたね。

こんなんでは使い物にならんということでしょうね。しかし、次に、「部屋の掃除をせえ。」と言われました。で、納屋にのぼってみると、そこには、これから建てる三重塔の引きかけの図面があります。そして、夜なべ仕事におづちという小さなものを作っていました。そこには、西岡棟梁の大工道具が置いてあるわけです。それを見てもよろしいということですね。「納屋の掃除をせい」ということは。これで自分は、弟子入りが認められたんだなと思いました。西岡棟梁という人は、お前は弟子だとか弟子にするとかいう言葉は、ほとんど使いません。納屋の掃除をせい、それで感じ取れという、そういう粹な教えですね。次に言われたのは、「これから1年間、新聞、テレビ、ラジオ、仕事の本、そういうものに一切目をくれてはいけない。刃物研ぎだけをしなさい。」と言う言葉でしたね。ですから、朝、弁当もらって、法輪寺に行きます。仕事します。仕事して、未熟ですから手を切る。でも、怒られると思って黙っていたら、「手、切ったか。」「はい。」「なぜ言わねえ。」と怒られる。2回目に手を切ったときは言わなくちゃ、怒られると思って、「手、切りました。」と正直に言ったけど「ぼけっとしてっからだ。」と怒られる。結局怒られるわけです。

そんなことして帰ってきて、食事の用意をちょっと手伝います。食事に入ります。西岡棟梁は、前、自分、長男、次男。席順は、一番いい所で食事はするんですけども、大変なんですね。ご飯、汁、野菜、ご飯、汁、野菜とびたっと合わなくちゃいけないんで、1ヶ月ぐらい食ったような覚えはありません。それで、食事が終わると、納屋に戻って、刃物研ぎの練習。寝る時は、榊光おじいさんが寝ている離れの2階で、自分、寝ましたから。その頃のおじいさんは、日本一のすごい人ですからねえ。その人がそこにいるんですから、物音一つ立てないで生活するようなものです。布団を静かに畳の上に置いて、それを伸ばして、そして、そこへ潜り込んで、朝まで待つような寝方ですねえ。ですから、自分もある程度経って、嫁さんもらった時に、嫁さんの寝相がちょっと悪いような気がしたんで、嫁さんに「緊張して寝てくれ。」って言いました。「私はできない。」と言って怒られましたけども、そういう生活なんですね。徒弟の生活ってのは。本当に全く自分の自由になる時間はありません。しかし、そこまで追いやられると、なんとなく、自分の癖と言うのが分かるような気がします。ですから、師と弟子という全く周りの環境と違う、師匠と自分、その自分は何にも分かんないんですから師匠に大きく左右されてしまうんですね。ですから、よい師匠につけたということが本当に幸せなことなんですね。

次に、弟子の話をちょっとしてみますかね。

こういう仕事ですから、弟子を育てられないと仕事になりません。平成13年にですね。ちょう

ど、NHKで、「ようこそ先輩」という番組があったんですね。その番組、知恵と工夫で建てる心の柱という番組で、小学6年生にやったわけですが、その時ちょっと思ったのは、「自分の思いを小学生に伝えると言うのは、すごいエネルギーがいるな。」ということです。その授業を受けた一人が、高校卒業してから、うちに弟子入りに来ました。5、6年になるけど、今、頑張ってると思います。

私は昭和52年の5月に鰯（いかるが）工舎というのを作ったんですけども、入ってきた子は何にもできないですよ。まあ、できるとすれば、飯炊きと掃除ぐらいなんですよ。ですから、大体、飯を作らせると街から来た子、田舎から来た子、すぐに分かりますね。街から来た子は、大体、冷蔵庫のふた、パタンパタンして、冷凍食品かそんなので、料理を作ります。田舎から来た子は、漬物と味噌汁位で始まるわけですね。

その中に、和歌山から来た松本ゲンクロウというのがいたんですけども、その子がうちに来て、オムライスを作れるようになったのは、10ヵ月目ですよ。先輩に連れられてどこか遊びに行ったんでしょう。そして、食堂に入ってオムライスを食べた。美味しかったと見えてオムライスばかり1週間ぐらい作っていました。作るのはいいんですが、食べる方は大変なんですけれども。まあ、いろんなことがありますよ。そりゃあ、今まで食べたことがないものを作れと言っても作れないですよ。食べたから作れるようになったのです。それから、「ご飯の用意ができましたあ。」と言って、行ってみたら、こんにゃく一切れという子もいましたよ。おかずが、こんにゃく一切れ。それはもう義理で作っているんでしょうな。まあ、義理というか義務と言うか。

しかし、なぜ、その飯なんかを作らせるのかと言うと、飯を作らせるとその子の仕事の段取りのよさ、思いやりっていうのが分かるんですよ。思いやりがなかったらおかず、作りませんからねえ。

掃除をさせると、その子の仕事に向かう姿勢、性格が分かります。それを1年間ぐらいやって、この子は、どういう子か、どういうふうになるかを一旦、見るわけです。職人と言うのは、動き、走り続けながら次のことを考えるわけでしょう。机に座ってものを考えることなんか、誰だってできるんです。ですから、掃除をさせるのが一番いいんです。学校なんか行くと、整理整頓という言葉がよく書いてありますね。整理整頓、あれはですねえ、目に見えているものを整理整頓するわけではなくて、頭の中を整理整頓させなきゃいけないんですよ。ですから、うちは、食事の用意は30分間しかやりませんよ。今日も、栃木県塩谷町というところから来たんですけども、10人ぐらいいました。10人の飯を作るのが30分というのは、大変ですよ。食事の用意、30分で作るの。ですから、その、夕方5時半から作ります。で、6時にみんなして食べます。そして、そこから片付けして、料理当番は、買い物に行きます。大体スーパーで4袋ぐらい買ってきますね。帰ってきて、次の日の昼と夜の下ごしらえをするわけですよ。ですから、その下ごしらえが大体、10時、11時に終われば、そこから刃ものときの練習ができるわけですね。

3年ぐらい前でしたかなあ。朝方2時半ぐらいいましたよ。食堂の方で、ちょっと、音がするんで、降りてったんです。そしたら、一生懸命、キャベツ切ってるんです。「お前早いなあ。もう料理作りはじめたんかあ。」と聞くと、違うんです。昨日からやってるんです。まだ、終わらないんです。

その子は段取りができない。かわいそうだけど、段取りができない、そう考えていたら、朝逃

げしました。夜は、逃げられない。みんな仕事していますからねえ。朝、みんな起きる、5時半、4時頃に帰るところはないんですけれども。

30分しかやらないというのがいいんです。美味しいものを作れ、いくら時間かかってもいいからというのは、そういうものは修行にならない。30分で作る料理という、もう決まっていますねえ。焼き魚なんてのは食ったことございません。時間がないですから。たまにコロッケなんか作るんですが揚げる時間がないから、生のときもあります。でも、誰も怒りません。自分たちがやってきた道ですから。すぐに、生だと思ったら、電子レンジでチンして、みんな食べてます。そんなもんです。

ですから、もう本当、飯作り、掃除をさせると、その子がどういう道を歩んでいくのかなんかすぐに分かりますね。ですから、その4月に若い子が入ってきます。それまで、1回も作ったことがないのに、初めて作りますから、食べられるようなものが何もないんですよ。1年間経ってやっと、美味しいものが作れるようになったと思ったら、また交代です。自分たちは、美味しいものを食ったことがないっていうのがこの仕事です。

うちに、入社希望ってのが、だいたい、今から、5、6年前は、年間300人ぐらい来ましたね。その中に一人か二人しか入れないんですけども。今は全然少ないですね。30人来るか来ないかですね。なんでか分からないんですけど、少なくなりましたね。母親がうちの子、手先が器用だからこういう仕事に向いていると思うのと、こういうような母親がいるんですけども。職人の技の器用とってっていうのと素人の器用というのは、まったく違うんですね。訓練なく手先の器用という人は、頭の中が器用なだけなんです。ですから、頭の中の器用というのは、それほど褒めたことではないんです。器用な子ってのは、うちの子見てたら、30センチの直角三角定規で10メートル先の直角を見ますわな。こう伸ばして。間違いでないんですわ。不器用な子はどうするかっていうと、10メートルの直角定規を作る気になるんですわな。学校の先生から言われたら、「このドジ。」と思うんでしょうけど、みなさんが家を作る時に、30センチの三角定規で直角を作作り出した家と、10メートルの定規で当ててくれた家と、そりゃあ、10メートルの定規を当ててもらいたいでしょ。

ですから器用な子っていうのは、何をさせても一通りできるが、ずば抜けてはいない。一心固まらないせいか、傑出するには足りない。そして、器用に溺れますね。

不器用の一心。そういうのを持った子が、上達に見込みがあるような気がしますね。しかし、10年、20年の修行をするには、器用不器用はないんです。本人の意識の差で成長が大きく変わるというだけですね。

数年前にその、中学生と大学の卒業するっていうのが来たことがあるんですが二人、面接しましょうということで、大学生の子はまあ、お断りしますと「なぜですか。」と、言うから、「22で来ても、まだ心が定まってないようですから、帰ってください」と。「中学生の子は、採用します。」ということになって。

これは、表向きの話なんです。なぜその大学生を採用しなかったというのは、自分のとこで採用しなくても他で生きていく能力があるわけですよ。その他で生きていける能力がある子を育てる、まあ採用するとですね、本当に苦しくなってしまう時に他を見てしまうんですね、どうしても。友達もいるでしょうから。ここで我慢してというのはかわいそうですよ。中学生はそう

じゃないですよ。ここしかないですから。だから、中学生を採用したんです。



こういう話があります。斧を研げと言った。斧を研げって言ってから、もういいと言わなかったんで、針になってしまった。そのぐらいのあほさ加減がいい。今の子は、そういう子は一人も、誰もいないですからね。斧を研げと言ったら、「これでいいですか。」「これでいいですか。」と何回も持ってくる。研げと言ったら、一番賽(さい)になるまで研げばいいんです。ところが、(そういう子は) いないんです。

そりゃあ、教育を受けたらそういう風になってしまうのです。ですから、どっぷりと仕事に浸れるような子を探るんです。いろんな知識があるとなかなかどっぷりと浸れないものです。ですから、そういう子を探ったとしてもうちは、絶対教えません。

教わるということは、甘えにつながってしまいますからねえ。ですから、教えないでほっておく。本人が学ぶ気持ちが湧くまで待つということが大切なんです。そうすると、飯を作ってきた、弁当を作ってきた。現場に来た。現場に来たら、掃除をしている。それを、半年ぐらいやるんです。そしたら、その傍で、先輩がきれいにかなを持って、柱なんかを削っています。スー。スー。と。そしたら、「あんな風に、早く削りたい、削りたい、削りたい」と思わせるんです。そう思った時に、鉋を貸してやるんです。「削ってみい。」と。そしたら、柱が板になっちゃうぐらい削れますから、きれいに削れますから。「スー、スー、スー。」と。削ってますよ。その時大切なのは、自分の持っている一番いい鉋を貸してやるということですね。しかし、削った瞬間を覚えたら、その夜の刃物を研ぐ時から、人間が変わったようになりますから。

それが、学校の教育のように、「こうやって、こうやって、こうやれば、鉋は削れるんですよ。」とはやらない。絶対、鉋は、そんな削れるもんじゃない。苦痛でしかないんです。ですから、そういうことをしないで、削りたいと思うまでほっておく。

人の道はたくさんあります。近道する子、正しい道に来る子、遠く回り道してしまう子。

遠く回り道した子は、ただ、こっちで待っていてあげればいいんです。普通の今の企業なんかは、即戦力を求めますから、どんどん教えていきますよね。10年ぐらい経って、この辺のレベルにと。でも、うちは教えないですよ。しかし、5、6年経った時に、「こういうやり方もあると違うんかあ。」というぐらいの一言がパーンと、1のことが、10にも100にもひらくんですな。そこから勢いで上がります。そこから先が違います。10年はだいたい一緒です。そこから先が違いますわ。

ですから、たくさんの無駄をさせて。そして、無駄に気づかせる。そして無駄をなくすと言う

ことを考えるわけです。普通は無駄を教えない。だったら、無駄に気づきませんかねえ。ですから、先走って、教えないっていいんですね。先走って教えない。教えてやることは、親切なようで身につかないんですよ。事を急いだらだめですね。しかし、教えないと言っても、本当に教えない方がいいかというと、教えないとどこに行っちゃうか分かんないですから、そこには、学ぼうという雰囲気があれば駄目ですね。学ぼうとする雰囲気があった、その中にいれば、教えなくても、ほっといても、捨て育ちでも、人は仕事なんか学んでいきます。できるようになっていきます。

しかし、学ぼうという雰囲気がないところでは、教えなくちゃ駄目なんですね。

自分は今から5年くらい前に、若い子に全部、鰯工舎を譲りましたが、鰯工舎の学ぶ雰囲気は、自分で作っておいたんだなと思いました。しかし、今考えるとそうでなかったですね。その雰囲気は、弟子たちが作っておりますな。そうでなければ、うそですわなあ。人に作られた中で、いるのでは何も思いません。弟子たちが作った。ですから、弟子たちをちょっと見ると、こういう仕事を学んでいく上で、一番大切なのは、素直な心でしょうな。なぜ、素直がいいかというと、これは、お互いが疲れないということですな。教える方も教わるほうも疲れない。素直に聞かれると、素直に答えも出ますからねえ。これが、ちょっとした知識を持ってくると、素直に入ることができないんで、素直に感じるができない。あと、頭の中で物を考える人は、どうしても自分の今までの経験や考えで、物事を捉えてしまうから、素直に物事に入っていけない。

法隆寺なんかについて修学旅行生を見てみますと、「この仏さんは、笑っているのが特徴だとか、腰をちょっとひねっているのがいいんだ。」とか、言いながら見えています。そして、境内に入れば、「この柱がエンタシスだ。」とか屁理屈唱えて、みんな、ただ通って見ていきます。

そうでないでしょう。境内に入ったら、「この塔、この柱が、1300年これを支えているんだ。」その力を感じて抱きつく位の子がほしいんですけども、そういう子は、ほとんど、いないんですわな。そりゃあ、いないわけですね。来る前に、先生が、その見方を教えてくるわけですから。「ああ、先生が言ってることと同じだあ。」と、ばあって通ってるだけで、ほとんど確認しているだけでしょ、要するに。そうでなくてと思うんですけど、なかなかいない。

しかしですね、一回、東大寺の大仏殿の屋根替えをしている時に、ちょうど南大門に自分がいたんです。そしたら、下から、誰か歩ってくるんです。金髪のあんちゃんですよ。両脇に、ボディガードの先生を二人つけて。元気なのが来たなと思ったら、南大門に入った瞬間に、その柱に、抱きつきましたからね、ぱっと。おおっと、他の人は仁王さんに向けて屁理屈言って、通って行きました。

もし、抱きついた金髪のあんちゃんが、鰯工舎に入りたいと言ったら、無条件で入れるんですけども、来なかったですね。まあ、そんな風な子がたくさん来て、生活をするんですけども、鰯工舎というのは、大部屋の生活なんですね。でも今の子は、だいたい個室で育ってきますから、大部屋の生活に慣れない。ですから、それに慣れないで、「アパートから通ってもいいですか」と言う子もいますよ。そうしたら、そういう子には、「遠慮してください。帰ってください。」と言います。それは、自分の部屋、自分の居場所があれば、自分の殻にこもりますよね。いろんな考えごともしますよ。しかし、一番血気盛んな一番いい時に、殻にこもって自分の考え事をしているようでは、もったいないですよ。ですから、うちは、みんなして生活をする。大部屋の生活

をするんです。ですから、辛抱とか忍耐なんていうのは、自然に身についてきますよ。そして、いろんな人と触れ合ってるからいろんなことが分かるんでしょう。ですから、みんなして生活をする。自分たちがやっている仕事は、長い長い時間がかかるわけですよ。大きい建物を造りますからね。3年4年とね、そういう風にしてかかるんです。

材木も、ものすごく、大きいんですよ。それを刻んで、そして組み上げていく。その時間の長さに打ちひしがれそうになっていくことが度々ありますよ。しかし、みんなして同じ空気を吸って、同じ飯を食べて、同じ所で寝て、そして同じ目的を持ってみんなして生きているわけです。修行して弟子たちは、言葉に頼ることは少なくなってきます。言葉に頼らなくても意思の疎通はできるようになりますね。知らず知らずに、相手を理解し、労わる優しさが沸いてくるように見えます。物を持つにしても、力がある方が、重い方をすーっと持ちますから。ですから、優しさと思いやりがなければ、長い時間、一緒に生活できないということに気づいてくるんです。



うちの現場棟梁を務めたのが何人かいるんですけども、秩父の子で、大野っていうのがいたんですけれども、その子が、口が重く、あだ名がゴリラです。何をたずねても、「うー」と「あー」しか言わないんです。その子が入社して5年目くらいに、香川県の小豆島で小さな仕事があったんですね。「それ、お前行ってこい。一人で行って、うち造ってこい。」と。送り出して1年かかって、その小さな建物を造ってきた。立派にできたんで、「お前を現場棟梁にする。」と言った。現場棟梁になれば、若い子が何人か下につかなければならない。ですから、「若い子に「うー」と「あー」ではだめだぞ。ちゃんと説明しないと分からないんだぞ。」と言ったんです。そしたら、それでも、「俺言わねえ。」と言うんです。しかし、「その若い子がここで失敗するということは分かる、そのところだけは、先に言う。あとは任せる。」と言ったんです。それは、徒弟の本当のふれあいをしてるから、それだけ自信がある言葉を言えるんです。

それから、こういう話があるんですけども、枝打ちの名人の話なんですけど。木というのは、ただ、そのまま、まっすぐ立つわけではないんです。どうしても、南の方に枝が出るから、したら、重心が変わってくるんです。重さで、ちょっと。それをちょっと3本、「ぽん、ぽん。」とはらってやると、それが、重心が変わるから、また、独り立ち、まっすぐ、さーっと、立つことができるようになるんですね。その枝をはらってやるって言ったって、なかなか分かりませんよ、そういうこと。弟子たちと同じく空気を吸って、同じ飯を食べていなければ、ちょっと、分からないような気がしますね。ですから、お互いが大変なんです。この共同生活をするっていうことは、一緒に生活ってことは。それこそ弟子も親方の方も我慢比べですよ。我慢比べをしてなくちゃいけないんです。「人というものは、人が育てる。」という人がいますけどね、「人が育てる。」

って言うのは、嘘ですよ。そしたら、「育てる人」と「育つ人」がいたら、それは、間違いでしょ。人なんていうものは、だいたいその環境さえ、ぴたっと合えば自然に育つもんなだと思います。

西岡棟梁はですね、「今日のカラスは白いな。」と言ったら、白く見えなくちゃいけないんです。白く見えると幸せなんです。それが、「いや、カラスは黒ですよ。」なんて言うようでは、修行になってない。苦しいだけ。修行中に自分自身を持つ、ということは、苦しいものですよ。ですから、親方にくっつき、なりきることです。

修行しているのですから、親方を外から見のではなく、うちに入り込むことができれば、修行は楽しいことです。しかし、こういうことは、なかなかできないんですよ。ただ、外から見て批判的な目で見ると、なかなか本当の修行はできない。修行を終えてからですよ、独り立ちしてから、今度は、「自分をもつ」ということです。自分の工場に、西岡棟梁が、書いてくれた額があるんですけども、その額には、「鵜工舎の若者に告ぐ。親方に授けられるべからず。一意専心、親方を乗り越す工夫を切磋琢磨すべし。これ唱導文化の真髓なり。心して諭すべし。」と、こう書いてあるんですね。ですから、弟子があがってから、親方を越す工夫をしなくちゃならない。それが修行中の話です。



では、次に、仕事の話をしてします。

自分たちは、宮大工さんと言われます。普通の家を造る人は、家（や）大工さん、大工さん。もう同じです。難しさなんてのは、それこそ同じです。しかし、違うのは、自分たちは、大きな木を使うということです。大きな木には、大きな木の癖が出る。ですから、木を組まなければいけない。その木の癖を組まなければいけない。小さな木、ふつうの家を作っているような木であれば、木の癖は、押さえ込むことができるんです。もう一つは、普通の家を造っている人であれば、住む人の意に添って建物を造りますが、自分たちは、住む人は、神、仏ですから、何も言わないですけど、仕事はしやすいんですけども、人々が頼り安心する心のよりどころをつくらなければいけない。物をつくるんですけど今から500年ぐらい前、室町時代にですね大工道具ってのが、大きく、発展してきたんですね。それまでは、本当の鉄の塊みたいな道具しかないんです。それが、室町時代に、たてにひくのこぎりができた。そうすると、それから、ものすごく、いろんな道具ができはじめてきた。工具の発達とともに、構造の美から、手先の今度は装飾の美へと移っていったんです。たとえば、法隆寺の五重塔は、相撲取り、裸の力士がどんと構えている姿

であれば、日光東照宮は京都の舞妓さんのようにいろんなものを差し込んで、あの形を整えるということなんです。ですから、道具というのは、人間がものづくりをするための手、指の延長です。手でたたいて、指でたたいて、木に穴が彫れるのであれば、のみという道具を持たなくていい。つめでかいて、木を削れるのであれば、かんなを持たなくていいわけでしょ。しかし、それができないから、その手の力を用いて、手の技術で使いこなす手道具を持たなくてはいけない。しかし、今のように手の力ではなく、電気の力で使う道具がたくさんありますけど、それがあると、手の力を失った技術からは昔の職人氣質はなかなか生まれにくいというわけですね。

それに、自分たちはこういう仕事をしていますから、「よい作品づくりをお願いします。よいものをつくってください。」とよく言われますよね。しかし、それはですね、よい作品作りをするよりも先にですね、やることは、自分にあった、切れる、そして使いやすい道具を持つということが大切なんですね。使いやすい、切れる道具を持てば、その道具に恥じるような仕事はしなくなるんですよ。そういう道具を持たないから、今の建築は、いろんなボルトで引っぱったりなんかして、ごまかしちゃうんですよ。そうでなく、自分に合った道具を一日も早く持たせるということ、持つということ。ですから、建物と言うのは、しっかりとした 接手縮地というのをやる、

木を組みますから、丈夫な建物になるんですよ。それを、きちっとした物をつくる、どういふふうな縮地をするかは、そういうのをつくるのは、切れる刃物とやる工人の思いでこのきちっとした刃物、接手をつくるわけなんです。ですから、それを持たせれば、いいものづくりじゃなくて、これ以上できないぐらい、道具を使いたくなる、使って仕事をしなくなるわけですね。ですから、今も昔もですね、物をつくるということは、執念のものづくりをしなくちゃいけないんですね。工作技術で物をつくってはだめなんです。工作技術でものをつくったら、できあがれば、それでよしとするわけですよ。執念のものづくりをすればですね、出来上がったものに、何かしらの不満が残る。その不満がもっとやる気をおこすわけでしょ。もっとこうしておけばよかったとかこうしたいという。ですから、工作技術でものをつくる子ではなく、執念のものづくりをする子を育てなければいけないんですけども、執念のものづくりなんかは、教えることはできないです。その子、その子自身が考えること、感じ取ることなんですから。でも、40何年やってきて、思えることは、執念のものづくりをするような子を育てるなら、日常生活がつらく、つらく、厳しく、厳しくあればあるほど、執念のものづくりってものに気がつきますね。

ゆっくりとした甘い生活をしているようであれば、執念のものづくりには気がつきません。でも、それだけやっても昔のようにですね、職人技を楽しむ、一心道楽というような人がたくさんおった。そういう人によく怒られました。励みにもなったけど、今はほとんどいなくなった。いい道具を持たなければいい建物はできにくい時代ですね。今の世の中は急ぎすぎていますね。目と耳で学んだ知識というのは少しぐらい急いでも対応できるんですけど、手、体というのは対応するまで長い長い時間がかかるということですね。簡単にはできない時間をかけて手や体に記憶させなければならないのです。

古代建築を作り守ってきた技は文字や数字ではないのです。手や体の記憶なのです。法隆寺の建物が文字や数字で受け継がれてきたのなら1300年の間に違う形になってしまったでしょう。古代個人の考え、魂を重んじれば姿を変えることはできない。同じ立場だからしないということなんです。

ものをつくるということは形として現し残すことです。今できることを精一杯やるということです。下手は下手なりに精一杯やるということです。なぜ精一杯やらなければならないかという次の世代のためにうそ偽りのないものとして残しておくと自分に言い聞かせて仕事をしていれば300年位して解体修理したときに平成の大工さんは、こういう思い、こういう考えでつくったのだと読み取ってくれる人が現れると思います。そのときのためにきちっとしたものをつくっておかなければならない。

それは、法隆寺の大修理のときに西岡棟梁をはじめ現場の人達が1300年前の工人と対話することができたから飛鳥の建築を昭和に再建することができたのです。解体修理したときにちゃんと分かったわけです。本物を作ってさえおけば技術というものが蘇るわけです。本物とはいつの世でも心を打つものです。西岡棟梁が自分に仕事を教えてくれたのは弟子と棟梁の間の伝統の引継ぎだという人がいるが、伝統でも引き継ぎでも何でも無い。下手は下手なりに一生懸命やったものであればいいということ。その弟子たちは時間があれば誰に言われるでもなく刃物研ぎしています。自分も西岡棟梁のところで刃物を研いでいました。そのとき棟梁が納屋に上ってきてくれてかなを引いてくれたのです。かな屑というのはこういうものだ。それこそ真綿を広げたみたいで、向こうが透けて見えるような。そのかな屑をもらって窓ガラスに貼って、こういうかな屑が出るまで研いで削り研いで削り、練習をするわけです。20何年棟梁といましたけども、そのかな屑が1枚でした。手本を示してくれたのは。あとは何にも教えてくれなかった。しかし、一緒に生活していたからいろんなことが身についたということはある。

最近になって刃物を研ぐことが大切だということがわかりました。切れる刃物はうそをつかないということです。西岡棟梁は平成8年に亡くなってしまったのですが、法隆寺に鬼がいると言われる位怖い怖い人だった。けれども自分はひとつも怖いと思っていなかった。西岡棟梁は自分に厳しく生きた人。本当の優しさをもった人でした。ですから厳しさのない優しさは甘えにつながってしまいますね。

西岡棟梁の次男のけんちゃんが浄瑠璃寺へ遊びに連れて行ってくれたんですね。帰ってきたら西岡棟梁が畑の草刈りをしていたんです。腹煮えくり返ったような顔で草を刈っているのです。おまえはなぜ浄瑠璃寺に行ったと。見る目がないのにと。それだけの時間があるなら刃物を研げと。

それから20年どこも行かなかったです。

「煎じて煎じて煎じ詰めれば最後は勘」と言った方があります。勘とかコツとかは言葉で伝えることはできません。技を得ようとする人は自ら練習、努力で自分のものにしていかなければならない。

そしてその技は長い鍛錬のあとに身体に形成される。そうやってものすごい仕事をやったとしてもちょっとした違いに気づくぐらいです。上達したなという感じはないです。あいつより俺の方がちょっと切れ味がいいだろう。ちょっと美しい形だろうというぐらい。ほんの少しを気づくためにものすごい努力をしなければいけない。

たとえば、縦30センチくらいの柱を寸法どおりまっ平らに削りなさいと言われて、やっとならして、立てたとする。しかし、真ん中ぼこんとへこんで平らに見えませぬ。

次に覚えるのは目で見てまっ平らに削るということ。

平らということにも寸法どおりに平らというのと目で見てまっ平らという二つがあることに気付かなきゃだめです。古代建築というのは錯覚を矯正するから美しいのです。まっ平らというのを腹の中にたたき込んでいないと錯覚を矯正することなんかできない。

1300年の木造建築がなぜ建っているかという話をします。鵜工舎口伝というのがありますので、交えながら話します。

まず一番先にどこに建てるかというのを考えます。

「伽藍造営には四神相応の地を選べ。」という口伝。

東西南北に守り神がいる地形を選びなさいということです。東に青竜、南に朱雀、西に白虎、北に玄武。

どういう地形かというと東に清い流れがあり、南に自分が立っているところより低くなって沼・沢がある、西に大きな道、北に小高い山を背負っている地形を選べということ。法隆寺はぴったりその形になっています。

次に木工事が始まります。

「伽藍造営の用材は木を買わず山を買え。」という口伝。

木一本一本を見て買うよりも山全体を見て買いなさいということ。木というのは山の環境によって癖が生まれます。ヒノキというのは、不思議な木で、伐採してから200年位かけて強くなる。それから千年くらいかけてゆっくりと弱くなってくる。もしケヤキや松で法隆寺をつくっていたら700年。杉で900年。ヒノキだから1300年以上塔を支えている。1300年前にヒノキの強さを知っている工人がいたと思えます。

次に柱を立てます。

自然石の上に柱をぽーんと立てるだけなんです。

法輪寺やったとき、大工がこれでいいかと言ってきたときに

「はしごもってこい」と。はしごを柱にかけて上に立てば合格ですね。下手したら一瞬で倒れます。命がけです。

石の上に立っているだけですから地震がきたら動きます。

次に「木組みは寸法で組まず、木の癖を組め。」という口伝。

これはどういうことかということと五重塔をつくる時芯柱を囲う木を組むんですが、木の収縮が違います。瓦の重さで押されて低くなるので、芯柱を寸法どおりにつくってしまうと屋根を突き上げてしまうので、切り縮めておかなければならない。木の癖を見抜いて組むのです。そうすると300年くらい経ったら落ち着く。それまではぐらぐらです。瓦をふくときに瓦一枚ずつそっちに置いたら、次はこっちと置いていかなければなりません。

では、スライドを見ましょう。

(スライドを見ながら)

法隆寺の五重塔を西岡棟梁は、「安定していて動きがあるだろう」と言いました。安定というのは出るのです。上にいくに従って小さくなっている。それに木一つ一つ太いので安定はあるが、動きがあるだろうというのはわからなかった。何カ月かして「松の枝を見てみい」と。松は一の枝

がはって、二の枝が下がる。そして三の枝と。端を見てみてください。ちょっと入る。次はちょっと出る。次はちょっと入るとなっていますね。

これは薬師寺の伽藍です。

まず尺を求めます。今の1尺は303ミリですが薬師寺は天平尺です。

天平1尺というのは、すべて図って296ミリです。その前の法隆寺はこま尺なので、355ミリ。時代によって寸法の長さが違うのです。

296ミリで計算してつくったのが、この薬師寺の東搭。ほんの少しですが5センチほど胴が絞られています。

もこしの柱もまっすぐ立っていない。まっすぐでない。ほんの少しですが内側に21ミリずつこけているのです。

昔の棟梁、大工さんの物凄い感覚でつくったのです。

また、口伝の中に「木は生育の方位のままに使え」というのがありますが、山に生えているのと同じように使いなさいということです。奈良時代の東大寺の西の門、国宝の門です。

これは真西から見たところで、これは真南から見たところですが、節だらけです。木は南に枝がたくさん出ますからね。そのように使ってある。反対の北の柱には節一つないきれいなものを使っている。

たくさんの道具ができた室町時代辺りから見栄えを考えて だんだんこっちを表にするようになった。

こっちを表にしたら北で日を浴びていなかった木ですから急激に弱ってくる。500年位で大修理しなくてはならなくなってくる。

しかし、南に節だらけの木をつかっていたら1300年も長持ちする。今まで一度も日が当たっていない木に建物になって日が当てられたらたまらんですわね。

木はただ石の上に立っているだけ。木の使い方と礎石の上に立っていることが長持ちの秘訣。古代建築が強いのはそれだけのことです。

口伝をもう少し。「木の癖組みは工人の心組みなり。」「百工あれば百念あり。」「百論を一つに統ぶる者こそ匠長の器量なり。」「百論を一つに統ぶる器量なきは慎みて匠長の座を去るべし」で口伝は終わっています。

塔の中に上るとき、薬師寺の三重塔、法隆寺の五重塔の中に入ると木と格闘した跡がありありと分かります。鋸がありませんので、木を割って製材しますから木は同じものはない。みんなばらばらなんです。その不揃いの木を適材適所に使うことは本当に大変なことです。今のように規格化され寸法通りに製材された木を組み上げるのはそれほど大変ではない。しかし組み上げられる棟梁がいたから古代の塔はできた。

それよりも山から木を切りだして現場まで運んでくる、それだけの知恵や苦労があれば平地でそれを組み上げることはそれほど難しいことではない。技術や技能だけでは、それ以上のものはいつくりえない。しかし昔の人は技術以上のものを作った。奈良時代、東大寺の大仏殿高さ48メートル位あります。中国にもどこにもあれだけ大きな建物はない。材木がそろるか技術的に可能かわからないけどつくってしまった。昔は図面もない、ろくな道具もないのに、奈良の都をつくっ

た。ものすごい奈良の都を60年位でつくりあげたのですからね。ものすごい力があつた。古代の塔は不ぞろいの木一本一本が支え合つて立っているのと同じなんです。

さて、今日はその当時使われていた道具を持ってきました。槍鉋（やりがんな）と言います。

今使っている鉋は、台鉋（だいがんな）ですが、昔に台鉋があつたとしても木がでこぼこばらですから使い物にならない。普通の建築は使わないけど鎌倉時代前の建物は削り肌が昔のものでないといけないから使うのです。法輪寺や薬師寺をやったときには、槍鉋で仕上げたわけですよ。



（削る実演）

こういう風にして木を平らにすると、笹の葉のようなもので削ったから肌が波打つて、朝日や夕日が当たるとさざ波みたいにふわーっと波打つ・・・やわらかい感じですね。

こういう仕上げなので古代建築には味が出るのです。

あとは質問を受けますけど。

質問

栃木の田中です。

先生のお話から人づくりやものづくりの奥深さを学んだような気がします。ありがとうございました。

質問です。太い柱や長いはりを使う神社仏閣の再建や新たな建立をされていると思いますが、木材を集めるのにご苦労がおりかと思ひます。その苦労話や現代の木材事情などをお聞きできればと思ひます。

答え

材木なんですけど昔のように大きな木は日本にはありません。

たとえば、法隆寺の中門の柱は65センチ位の太さがあります。太さがあつても芯がない。大きな木を四つ割にした一つがあれだけの木なのです。今はそういう木が日本中探しても1本もない。でも今後修理があります。

法隆寺だって400年先になればまた大修理をしなければならない。そのときに修理する箇所は柱の根のところですよ。風雨にさらされているからそこが一番弱る。でも柱1本換えなくとも途中で切つて根接ぎするわけですよ。でも根接ぎする材料すら今はないですよ。じゃあ外来の木で接ぐか。国宝に外来の木で根接ぎするのは木の文化でない。今から木を育てておかなければ間に合いません。技術は復元できるが材料がなかったらできない。今から育てなければいけない。誰がや

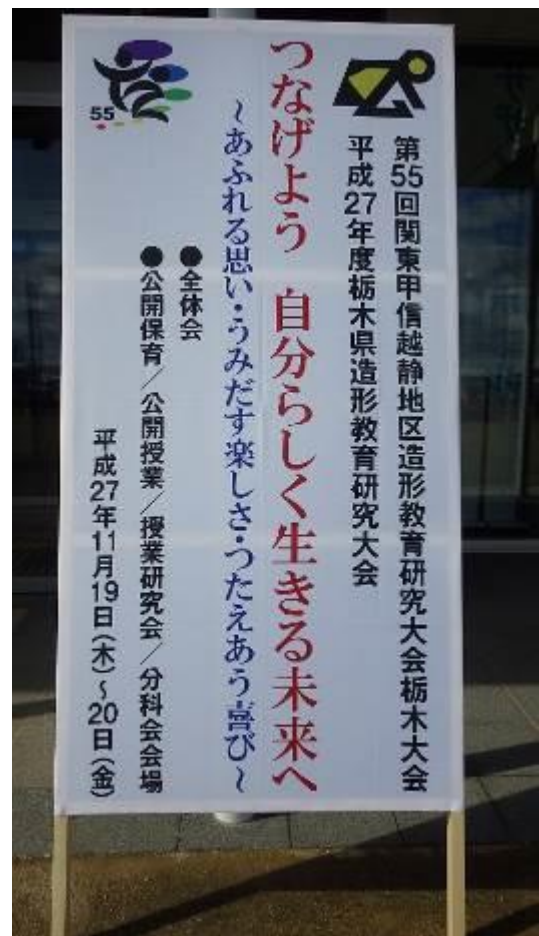
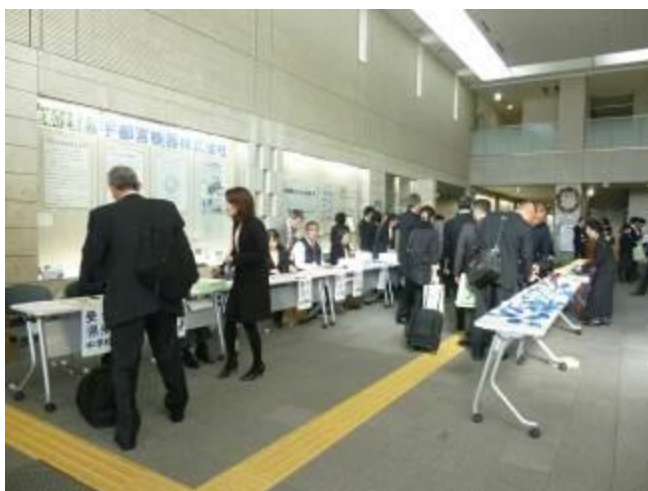
るか。

国宝を持っているお寺がやらないといけない。たとえば伊勢神宮は20年に1度建て替えを行っていますが、木を使うから一生懸命育てています。でも、法隆寺の方は大工の技術が素晴らしく千年もつからと木を育てていません。

どっちがいいかわかりませんが、木というのはそういうものです。大きな木がないと文化財の修理はこれからできません。よろしいでしょうか。これで、話を終わりにします。

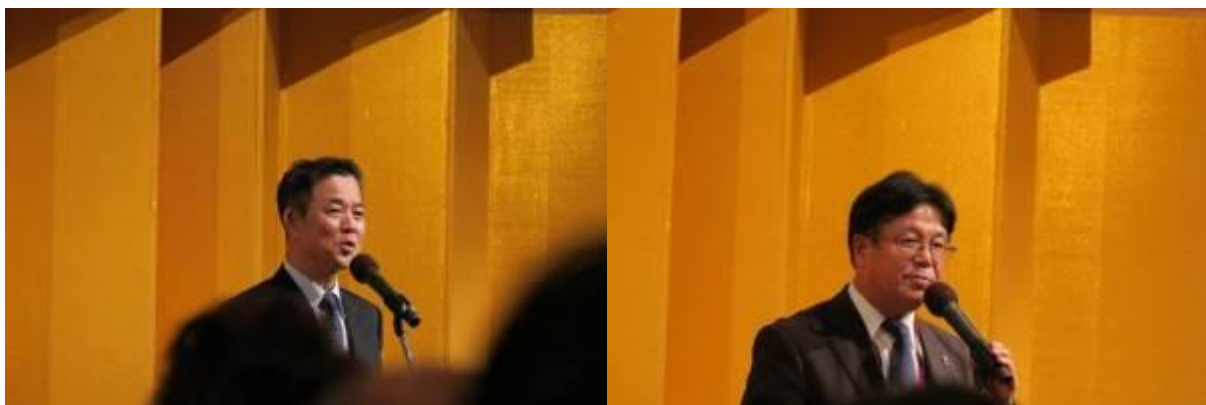
(拍手)

全体会場の様子



レセプション

(ホテル・ニューイタヤ18:00～)



大会2日目・授業公開・分科会等

公開保育・公開授業一覧

校種	会場	学年	活動内容・題材名	授業者	研究会指導助言者	研究会司会者
幼稚園	宇都宮大学 教育学部 附属幼稚園	全学年	つくって あそぼう！ みたてて あそぼう！	(3歳児) 北野 友紀 (4歳児) 坂本 修子・富川 千明 (5歳児) 高根沢伸友・前川 美帆 宇都宮大学教育学部附属幼稚園	高木 恵美 前原 由紀 黒川 貴広 栃木県総合教育センター	各授業者
小学校	宇都宮市立 戸祭小学校	1年生	ならべて つんで ひろげて	田崎 英子 宇都宮市立戸祭小学校	川津 正己 鹿沼市立粕尾小学校	中里 祐子 宇都宮市立田原小学校
		2年生	ふしぎな生きもの 大しゅうごう！	戸島 聡美 宇都宮市立戸祭小学校	小松崎 正訓 芳賀地区広域行政事務組合 教育委員会	秋山 由紀子 宇都宮市立瑞穂台小学校
		3年生	つくろう ぼくらの ゆかいななかま	日比野 こす江 宇都宮市立戸祭小学校	宇賀神 俊彦 宇都宮市教育委員会	関 志津子 宇都宮市立中央小学校
		4年生	みんなでつなごう キッズ アート ガーデン	齊藤 正文 宇都宮市立戸祭小学校	谷仲 俊彦 栃木県総合教育センター	日高 康子 宇都宮市立雀宮中央小学校
		5年生	とまつりウォッチ！ ～その顔いいね～	大関 直子 宇都宮市立戸祭小学校	大貫 敏 上都賀教育事務所	福田 礼子 宇都宮市立妻川第一小学校
		6年生	伝えよう 広重ワールド	大島 陽平 宇都宮市立戸祭小学校	森屋 一郎 日光市立轟小学校	前田 忍 作新学院小学部
中学校	栃木県立 美術館	1年生	サプライズ&ハピネス ーびっくり箱に込めた 思いー	鹿目 走 さくら市立氏家中学校	田中 茂 鹿沼市立南押原中学校	田中 和美 塩谷町立塩谷中学校
		2年生	心の目でつながる世界 ー美術館と連携した 鑑賞活動ー	五月女 奈津美 小山市立小山第三中学校	島 一嘉 鹿沼市立上南摩小学校	安藤 宏 小山市立桑中学校
		3年生	身近なモノがカタル物語 ー思いをこめた アニメーションー	五月女 正明 宇都宮市立横川中学校	青木 孝浩 栃木県教育委員会	北 正信 宇都宮市立宮の原中学校
高等学校	栃木県立 さくら清修 高等学校	3年生	映像インスタレーション	吉澤 順一 栃木県立さくら清修高等学校	林 香君 文星芸術大学	島田 幹男 栃木県立石橋高等学校

公開授業・公開保育・研究会の記録

幼稚園公開保育記録

会場 宇都宮大学教育学部附属幼稚園

公開保育 3・4・5歳児

つくってあそぼう！みたててあそぼう！

- 保育者 (3歳児) 北野 友紀 宇都宮大学教育学部附属幼稚園
(4歳児) 坂本 修子 富川 千明 宇都宮大学教育学部附属幼稚園
(5歳児) 高根沢伸友 前川 美帆 宇都宮大学教育学部附属幼稚園

1 題材のねらい

- (3歳児) 自分なりに身に付けたりなりきったりして遊ぶことを楽しむ
- (4歳児) 素材に触れ操作しながら見立てたりイメージをわけたりして遊ぶことを楽しむ
- (5歳児) ほしつきランドの実現に向けて、友達と一緒に活動する楽しさを感じる

2 授業の様子から

- (3歳児) それぞれどの場所でも身に付けたりなりきったりしていて、素材に触れることでいろいろとイメージがわいて作ったものを使って遊んでいた。
- (4歳児) 素材に触れ感触を味わったり、道具を使って素材にかかわったりしながら、イメージをわけ、自分たちで「こうしたい」という思いをもって遊びを楽しんでいた。
- (5歳児) クラスの枠を超えて遊びがつながり、共通の目的にむかって素材や用具を自分たちで選び、友達に自分の思いを伝えながら遊びを工夫して進めていた。

3 研究協議より

- ・ いろいろな素材に触れてのびのびと活動していた。年長児は、ほしつきランドに向けてどうしたらもっと楽しくなるかと活発に会話しながら自分たちの遊びを作っていた。
- ・ 砂粘土も小麦粉粘土も、感触を楽しみながら自由に発想して楽しんでいた。乾いたものを削る行為や磨く行為は心の安定にも繋がるものである。
- ・ 砂粘土は感触がいい。また、作る過程も楽しめるし、作ったものでも多様に遊ぶことができるといった。
- ・ 素材の素晴らしさを感じた。どの教材も自由に自分たちでかかわっていた。また作りながら会話し、はりきっている姿があった。一人一人が考え思いをもってかかわっている。
- ・ 3歳児の遊びを見て、環境の大切さを感じた。大きな木を環境として作っておくことで、安心してカブトムシになりきって遊んでいた。
- ・ 自園では、年長児が小麦粉粘土にどんぐりをのせ、オーブントースターで焼いてからすのパン屋さんになって遊んでいる。また今日の保育で、遊んでいる中で、個人で自分のものを作っているのだけれど、みんなのお菓子屋さんのイメージでつながっている場面に出会った。

4 指導助言

- (3歳児) 感じる 心行くまで自分を出して作ったものを味わい、表現する喜びを感じられる

ように。

(4歳児) **広げる** 幼児教育は環境を通した教育。自らどれだけかかわれるか、どれだけ心が動くか。多様な素材に出会うことでイメージ・行為をどんどん広げていけるように。また、友達の表現に触れることも大切なこと。

(5歳児) **深める** 遊びそのものが自分の思いを表現する造形である。
個の中で自己実現のために選択し「ああしたい」「こうしたい」と具体的なイメージをもって遊びを作っていく。集団の中では、協同して遊ぶ経験をしていて、共通の目的に向かって遊びを作っていく。一人一人が自分の居場所を楽しんでいた。

子どもたちの表現に対する評価は、上手などのできばえとかではなくて、その過程を大切に！
このことが、自分のやっていることや自分の表現に自信をもてる子になっていく。



宇都宮市立戸祭小学校公開授業

公開授業 1年

ならべてつんでひろげて

■ 授業者 田崎 英子 宇都宮市立戸祭小学校

1 題材のねらい

本学級の児童(男子20名, 女子15名)に, 図画工作に関するアンケート調査を行ったところ, 図画工作が「好き」と回答した児童は34名, 「あまり好きではない」と回答した児童は1名であり, 多くの児童が図画工作の時間を楽しみにしていることが分かった。水曜の朝の活動の「アートタイム」にも意欲的に活動している。

7月に実施した造形遊び「しぜんとなかよし」の学習では, 自然の材料(石, 葉, 砂, 枝など)の色や形, 質感などの面白さや美しさに関心をもち, 材料を並べたり, 組み合わせたり, 積んだりしながら, 自然材料との関わりを深めることができた。また, 活動を通して, 友達の活動のよさや楽しさを感じとったり, 友達のよいところを自分の活動に取り入れて楽しんだりしている児童も見られた。その一方で, イメージが思い浮かばず, どうしたらよいか困惑する児童も見られた。これらの実態から, 造形遊びを通して, 材料の特徴を生かした発想や構想の力を伸ばしていきたいと考え, 本題材を設定した。

2 題材について

本題材は, 色画用紙や身のまわりにあるプラスチックコップ, ペットボトルキャップ, 紙皿などの扱いやすい材料を使うことにより, 誰もが広い空間を生かして, 並べる, 重ねる, 組み合わせるなどの表現方法を工夫しながら構成できるようにした。

指導に当たっては, 材料の組み合わせや並び方を考える「ポイント」を示すことで, 児童が試行錯誤しながら材料を選んだり, 気に入った表現方法を選んで実践したりしていけるように支援したい。また, 個人の活動が友達と交流することによって広がり, 互いのよさに気付いたり, 豊かな表現が生まれたりすることができるような言葉かけや場の設定を工夫した。

本単元の学習は, 本研究が目指す「つながりを大切にした造形活動」の「あふれる思い」に関連している。素材や人・物との出会いの場を大切に, 一人一人が自分の思いを広げながら鑑賞し合い, 楽しく活動できるように支援していきたい。

3 授業の様子から

導入の場面では, 児童がこれまでの経験や活動を振り返ることにより, 材料を「いい感じ」に並べていこうとする思いをもてるようにしていた。また, 色や形, 大きさに変化が見られたり, 並べ方に規則性があったりすることが「いい感じ」につながることを確認することで, 自



分にもできそうだという見通しがもてるようにしていた。友達作品から表現のよさを見つける「みてみてタイム」では会場である体育館のステージ上から作品を見ることにより、ひろがりやつながりのよさや工夫に気付くようにしていた。ステージに上がった子どもたちは広がる作品を見た途端に「街みたい!!」「遊園地だ!!」と歓声をあげた。その後、その言葉をヒントに、街に広がる道や遊園地の乗り物をイメージしながら材料を置く姿が見られた。



4 研究協議より

- ・広い空間で、児童がのびのびと活動できていたことが良かった。体育館の半分を使用していた活動であったが、場所と関わるためにステージや階段を使って活動する子がいてもよい。
- ・子どもたちが場所・友達と関わって、ものを並べる姿から、今までのアートタイムの成果を感じた。活動を進めるうちに、友達と共に作り始めることにより、ネットワークが広がる。自然発生的に個人でやる子もいれば、友達とつなげるなど関わりをもつ子がいてもよいと感じた。

Q：グループを作り、それぞれの場所に配置した意図とは。

A：グループにこだわったわけではなく、児童が活動を始めるスタート地点を定めたかったので、カラーコーンを置いて示した。活動するうちに友達と一緒に作るのはよいと考えている。

Q：材料を選んだ基準とは。

A：発色の良い紙コップは子どもたちの興味をひく。色画用紙を三角と四角にしたのは、組み合わせによって様々な形ができるから。紙皿はある程度の大きさがあり、円形のものも材料に加えたかったため。

- ・並べ方のポイントをしっかり示した上で、説明時間を短くまとめられていたため、活動時間が十分にとれていた。ステージ上から作品を眺めることで、下では見えない全体を見渡し、自分・友達の作品の良さを確認することができていた。また、子どもたちから自然と意欲につながる言葉が出たのも素晴らしかった。

Q：並べ方のポイントとして提示した「方向」「高さ」「広がり」という言葉の捉え方を子どもにどう指導してきたか。

A：アートタイムの時間に子どもたちが作った作品をモニターに映し、実物を見せながらそれぞれの言葉の意味を捉えさせた。



・先生が一人一人のことを丁寧に見ており、褒め、質問し言葉かけしたことが、子どもたちへの大きな支援に繋がっていた。

子どもたちは、自分の中にモヤモヤとした形への欲求をもっており、それを「並べる・積む・広げる」という形で出していたのが非常に良いと感じた。もし、キャラクターなどの何らかの形に影響されたものを作ったとしたら、それは目標と違うということになる。あくまでも今回の活動は、造形遊びであり、自分の内面からこ

ぼれ出てくるものを、材料を使って実際の形にしてみることが重要だった。以前のプレ授業では、縦に積む、横に並べる、など子どもによってやることが明確に分かれていたが、今回はそれが複合的に出ていたのが面白かった。抽象的な形をイメージした子もいれば、街や遊園地などの形をイメージした子もいた。形というものは自身の経験によってだんだん蓄積していく。児童はそれを意識しないで行っていることが注目すべき点。自分の感覚的なものを記憶し、それを思い出すことができるようにすることが、次のステップにつなげるために大切になってくる。

宇都宮市立戸祭小学校公開授業

公開授業 2年

ふしぎな生きもの大しゅうごう！

■ 授業者 戸島 聡美 宇都宮市立戸祭小学校

1 題材のねらい

テーマである「つなげよう 自分らしく生きる未来へ ～あふれる思い・うみだす楽しさ・つたえあう喜び～」を受けて、児童の「あふれる思い」を膨らませる授業を設定した。本学級のほとんどの児童は図工が好きと答えた反面、成績を気にして苦手と思う児童も出てきている。そこで、児童の苦手意識を取るため、ダイナミックに児童の思いを膨らませ、楽しく活動することを第一に授業展開を考えた。本題材では、「粘土はイメージに合うように形をつくり変えることができる」という粘土のよさを児童に実感させ、積極的に粘土に触れ、体全体を使って生き生きと児童のあふれる思いをあらわす造形活動に迫っていきたいと考えた。

2 題材について

本題材は、ふしぎな島に架空の卵を作り、そこから自分のオリジナルの生きものをつくる題材である。手だけでなく体全体で操作させていくことで、粘土の感触を十分に味わい、粘土で作る楽しさを感じさせたいと考え、油粘土ではなく土粘土を使用した。また、生きものが誕生するま

でのストーリーとして、ふしぎの島のようにせいかから手紙が届く設定や、卵が生まれる様々な音を聞かせることを導入に取り入れたことにより、児童の興味・関心を高めると同時にイメージを膨らませる手立てとした。



3 授業の様子から

前時の卵づくりを丁寧に行うことで、生きもののづくりのイメージが湧いていた。その際、教師のつくったブツブツした卵を提示したことで、丸くてツルツとした卵のイメージを覆すことができた。また、卵の親になったつもりで丁寧に大切に扱うことを重視したことで、自分のつくった卵への愛情も強くなった。その反面、丁寧に細かく卵をつくった児童は、卵の時点で完成しており、卵をどう変化させていけばよいか迷ってしまい、卵から生きものに変化させるのが困難であった児童もいた。

また、卵に付け加えて進化させるのが意図だったが、卵の部品を取り外し進化させている児童もいた。粘土の魔法という言葉を使い、形を変化させる技法に多く触れさせることができた。本授業では、児童の制作時間を多く確保するため、児童同士の鑑賞の時間は取らなかった。その代わりに、教師が見取り、全体に紹介する予定だったが、児童が集中して取り組んでいたため紹介することができなかった。本時の後半に「生きものに命を吹き込む」という設定でつけさせることで自分の生きものへの愛着や、次時に向けての児童のやる気がさらに高めることができた。

4 研究協議より

- ・粘土の魔法の確認を、子どもたちがよく見ていて、粘土の魔法を声に出しながら作品づくりに生かしていた。
- ・色々なタイプの卵が進化していて、見ている方も楽しかった。
- ・子どもたちが体全体を使って活動しており、明るく元気でやる気のエネルギーをととても感じた。ビー玉で命を吹き込む時の子どもの顔が生き生きしていた。
- ・教師の作品を提示すると、子どもがその作品に引きつけられてしまうのではと心配になってしまう。
- ・ストーリーのある物語や卵が生まれる音を取り入れていたので、子どものイメージを膨らませる手立てがよかった。その反面、生まれてくる時の音を聞いて、子どもたちは卵ではなく生まれた生きものを想像していた。
- ・ビー玉を授業の後半で加えていたが、前もってビー玉を加えることを子どもに伝えておかないと、子どもがつくりたかったイメージが崩れてしまうのではないか。
- ・卵を完全につくってしまった子どもにとって、その卵に付け加えて生きものに進化させることは、完成した作品を壊してしまうのと同じではないか。前時でつくった卵は残して、別の粘土で生きものをつくらせてあげるとよいのではないか。
- ・授業の作品づくりの過程をきちんと評価することが大切。指導案の展開の部分で教師の支援が多く書かれているが、実際の授業ではルールを作り厳しくしているわけではなかった。支援の部分を減らして、この段階でこう評価をするという部分をいろいろな段階で準備しておけば、作品づくりの過程を見取り評価することができる。
- ・広い教室にビニールシートを敷くことで、子どもたちがダイナミックに活動できる場の確保ができていた。

Q:土粘土の扱い方、保管方法はどうしているのか。

A:ポリバケツに入れ、濡れタオルを数枚かぶせ、ビニールをかけ、水分が飛ばないように保

管し、子どもが1つずつ使えるよう、練機で練った後に1 k g ごとに切り分けた。

Q:粘土を使うにあたって一番大切にすることは。

A:油粘土ではできない、体全体を使ったダイナミックな活動をさせたかった。

Q:ビー玉を2つにこだわった理由はあったのか。

A:低学年ということもあり、数に限度がないと歯止めが利かなくなってしまうため。また、土粘土を扱う上で、粘土を練機で練る時にビー玉を取り忘れ粘土の中で割れてしまうことを防ぐため。

Q:発想の浮かばない子への声掛けの工夫はあったか。

A:卵をつくる時点で止まってしまった子どもには、卵の生まれた場所の写真を再度提示したり、「とにかく丸めてみよう」「とにかく伸ばしてみよう」と声掛けをしたり、粘土と触れ合う中で子どもの発想を広げていった。

[指導助言]

栃木県の益子町で有名な益子焼きに使われているのも土粘土。土粘土は大地から掘り出したものなので、自然の土から生きものが生まれるという、今回の授業は正しく自然と一体化した活動である。子どもたちは土粘土が好きで、粘土を見ると指で押して感触を楽しむ。とてもわくわくする教材である。その中でも、粘土の大きさや、硬さが重要であり、水分調節・管理が難しい。今回はとてもうまく管理されており、子どもたちの触感を刺激していた。

学習指導要領との関連として、学年の目標である「豊かな発想をし、体全体の感覚や技能などを働かせる」ことがおさえられていた。低学年の子どもは土や粘土と関わり楽しんだり、身近にある材料を並べたり、積んだり、何かに見立てたりして遊ぶ。進んで材料に働きかけ、見つけたり感じたりしたことを基に試行錯誤して自分の思いを表現する。この段階で、思考力、判断力、表現力の3つが育成されていく。本授業の前に砂場で造形遊びをしたことは、本時の授業へのつながりとして重要な活動だった。野外の大地を直に感じたから、自然の土や砂、水を使った経験が屋外から屋内への活動へ自然に移行することができた。外で活動した時と同じ感覚で活動することができた。粘土は違う形に作りかえることができるため、失敗を恐れずに大胆に活動することができる。作りながら思いを変えていける。五感の中の視覚と触覚を使いながら制作していく。

本時の目標と授業の観点について、導入でふしぎ島の物語のDVDを見せたり、卵の生まれる音を聞かせたり、視覚や聴覚を刺激し、子どもたちのやってみたいという思いやイメージを膨らませるのに有効であった。場の設定としてブルーシートを敷いて、子どもたちが大胆に体全体を使った活動できる場を準備することは重要であると感じた。さらにこの物語の世界観を子どもたちにイメージさせる、会場に入った瞬間に子どもたちがわくわくする工夫として、ブルーシートを海に見立て、真ん中に島を想定した空間にするという方法もある。その空間の中で子どもたちが活動するというのも1つの方法としてあげられる。

自分の卵を基に、生きものを考えたという点について、前時で卵を丁寧につくったことで、卵を大切に扱うという気持ちが非常に高まっていた。この授業では、自分の思いをいかに作品に込めるかが大切になる。ビー玉を最後に付け加えたことで、子どもたちの作品に「命を吹き込む」「命がやどった」という生命尊重のできる子どもを育てるのも大切だと感じた。また、卵を進化させるという点で、進化するという言葉がわかりづらい子どもにとってもわかるよう、進化の定義を伝えていく必要がある。教師の見本作品を見せる際も、完成形を見せるのではなく、進化の途中である過程を見せてあげる。進化の流れをコマで見せていくなども方法の1つである。子どもの作品の評価をするのにあたって、作り上げていく過程を写真に残すことで、子どもの変容



を見取ることができる。

図画工作には唯一の正解はない。全ての子どもが材料や用具、友人との関わりの中で様々な行為を試して、自分なりの答えを見つけ、形にしていく。これからの社会では、答えのない問題に課題を見出していく課題探求能力が大切になってくる。図画工作はその点で重要な教科となる。本授業でもねらいに向けて、様々な技法を使って自分なりの答えを子ども一人一人が作品として表現していた。今後も子ども一人一人が自分らしさを大切に取り組んでいてもらいたい。

宇都宮市立戸祭小学校公開授業

公開授業 3年

つくろう ぼくらのゆかいななかま

■ 授業者 日比野 こず江 宇都宮市立戸祭小学校

1 題材のねらい

クラスのよさや目指す姿をもとに、豊かに発想を膨らませ、材料の特徴を考えて選んだりつくったりする姿を期待した。また、グループで友達と思いを伝え合いながらつくる活動を通して、自分や友達のよさに気付くことができると考えた。イメージをアイデアスケッチにまとめたり、思いに合わせて材料を選んでつくったりする活動などを通して、思い考える楽しさ、選ぶ楽しさ、つくる楽しさ、工夫する楽しさを味わわせ、大会テーマである「うみだす楽しさ」につなげていこうと考えた。

2 題材について

本題材は、段ボールをもとにいろいろな材料を組み合わせ、「ぼくらのゆかいななかま」（イメージキャラクター）をグループで協力して立体につくり上げていく題材である。

クラスのよいところや目標を話し合い、次に、「ゆかいななかま」のイメージをアイデアスケッチにまとめた。このスケッチには、言葉や絵でつくりたいものの特徴を書き込み、具体的に形や色、材料を考えさせた。そして、思いに合わせて材料を選んだり、つくったりする場面では、児童が自ら材料を選択し、試すことができるように材料コーナーを設置した。また、各グループでつくったものを互いに見合う場面を大切にする事で、材料の選び方や組み合わせ方、接着の仕方などを児童同士が学び合えるようにした。



3 授業の様子から

前時に段ボールなどで作った土台に、思いに合った材料を付け足してキャラクターをすてきにつくり上げていく活動であった。

各グループに分かれると子どもたちは、すぐに作業に取りかかった。今日はどの部分をつくっていくかというめあてをもっていたので、チョークで綿に色を付ける、段ボールに色とりどりのガムテープを貼る、紙皿に顔の絵を描く、模造紙を切るなど、全員が意欲的に作業に取り組んでいた。教室中央には材料コーナーがありいろいろな材料を自由に使えるようになっていたので、子どもたちは自分の思いに合う材料を探し、うまくいかないときには別の材料に取り換えることもできた。どのパーツは誰が中心となってつくるのか、グループの計画カードに担当者の名前が書いてあったが、その子だけがつくるというのではなく、みんなで協力し合ってつくり上げていた。また、キャラクターのイメージ図も掲示してあったので、次に何をしたらいいのかなど迷ったときには、イメージ図を見て考えたりグループ内の友達同士で相談したりしながら進めていた。

頭に触覚を付けた子がいたが、段ボールカッターで×（バツ印）に切りそこに差し込む方法を行っていた。また、模造紙を切るときにはさみをペーパーナイフのように使っていた子や、折り目を付けて手で切っている子もいた。今までに習得してきた技能が、作業の中で発揮されていた。

授業の最後には、「こんなことをしたよということを教えてほしい。」という教師の言葉に対してたくさんの挙手があり、子どもたちの紹介したいという強い思いが感じられた。



4 研究協議より

Q：全員が思いをもってやっていた。グループの活動なので、一人でも自分の思いが通らないと
しらけてしまうと思うが、一人一人の子どもたちの思いがどう今日につながっているのか？

A：まず一人一人設計図をかきそれをグループに持ち寄ったが、自分の思いが強くまとまらなかった。教師がコーディネートに入り、それぞれの良いところを認めながらつないでいったのでグループの設計図にはある程度自分の思いが入っていた。誰の思いも入るように配慮した。

Q：先生から「形・色・手ざわり・組み合わせ」などめあての提示があったが、材料のよさを子どもたちが感じ取って自分の言葉で伝えられる時間があるとよかったのではないかな。

A：キーワードとなる「形・色・手ざわり・組み合わせ」を今日は教師が紹介したが、本時まで
に子どもたちから出てきた言葉をまとめて提示しただけ。

Q：グループにした理由は？また、個人からグループに折り合いを付けるための軸は何か？

A：相手の気持ちを考える，協力して何かをするという経験が少なかった。個人の能力が高い子もいるがグループでやることで全体の底上げをしたかった。グループは思いが同じ子同士で作った。自分の思いももちながら，客観的に見られるような声かけをしてきた。

Q：「共同」をどうとらえるか。本時には「決められた部分を受けもつ」というところがあったのではないか。同じテーマをもつ子たちで同じエリアに集まって個で作業をする中で，材料や組み立て方などの相談にのってもらおうという「共同」という形もよいのではないか。

A：今回は誰がどの部分を中心になってつくるのかを決めたが，その子がその部分だけやればいいということではなく，その子のところに集まって話し合う基点にするという考え方で進めてきた。同じエリアの中での「共同」作業という発想はなかった。個人の技能については，アートタイムで指導してきた。

指導助言より

・題材の特徴①「共同製作」について

一つのものをつくりあげる共同製作と，一人一人がつくったものが合わさって共同となる共同製作がある。今求められているのは，個がきちんと保障される共同製作である。どの教科でもグループ学習をしていこうとしている中学年では，先生の介入・指導が必要。

・題材の特徴②「等身大の立体づくり」

時間もかかるし難しい。しかし，行っていた作業は低学年で学んだ技能を活用させて再定着を図るものだった。だから，等身大でもできた。低学年との技能面でのつながりがあった。

・題材の特徴③「アイデアスケッチ」

付箋紙を貼ったり分類したり様々な教科の学びを活用していた。計画的に造形活動を行っていく中学年の子たちにとって，発想・構想面で高学年とのつながりを意識した題材であった。

・題材の特徴④「材料」

材料にたくさん触れさせる方向もある。触れないと学べないから。ただ逆に，学んだのであれば材料を集約して少ない材料の中でどうやって工夫させるかというのも一つの方向性。年間とか低学年というかたまりの中でバランスを考えるとよい。

・子どもの多様な表現を求めるあまり手広くしてしまい，対応しきれなくなることがある。指導者はねらいを明確にもたなくてははいけない。題材にあった一貫した指導の方向性が必要である。

宇都宮市立戸祭小学校公開授業

公開授業 4年

みんなでつなごう キッズアートガーデン

■ 授業者 齊藤 正文 宇都宮市立戸祭小学校

1 題材のねらい

活動全体を通してのテーマを「つなぐ」とし，「思いをつなぐ」「場所と材料をつなぐ」「材料と

材料をつなぐ」「友達をつなぐ」「ガーデンをつなぐ」など様々な「つなぐ」を意識させたい。児童が選んだ場所のイメージをもとに、自分で集めた材料やスズランテープや不織布などの色とりどりの材料、季節を感じる自然物などを自由に組み合わせ、切ったりつないだりして試行錯誤していく。その活動の中で、児童の「さらにこう見える」「こうしたい」などの発想の広がりを大切にしたい。また、つくったものを新たに变化させていく楽しさを感じさせることで、思いを表現することのよさに気づかせたい。これらの活動から本研究が目指す「つながりを意識した造形活動」の「うみだす楽しさ」につながるものとする。

2 題材について

本学級（男子20名，女子20名）に「造形遊びは好きか」という質問をしたところ7割の児童が「好き」と答えており，自由に自分の思いを表現する活動を楽しむことができる。しかし，3割の児童が新しい形を発想したり，自由な表現方法を思いついたりすることに対し，苦手意識をもっていることがわかる。日常生活において自然の中で遊んだり，ものをつくりだしたりする体験が少ないことが原因と考えられる。

そこで本題材では，中庭で自分のお気に入りの場所を見つけ，樹木や観察池を変身させることで，日常を非日常に変化させるおもしろさを感じながら，造形活動を行っていく。児童は選んだ場所や材料との出会いの中で，アートガーデンのイメージをふくらませ，自分のイメージを友達のイメージとつなぎ合わせながら中庭全体を「4の2キッズアートガーデン」に変化させていく。

3 授業の様子から

導入の場面では，前時までのイメージマップを見返し確認するとともに，教師の参考作品をもとに場所や材料の特徴を生かしたつなぎ方の確認を行った。これにより児童は，アートガーデンの「つながり」を大切にしたイメージをふくらませることができた様子。また，前時までの児童の作品を参考として写真で提示し，さらにイメージが広がったようで，児童は早く作品づくりをしたくて待ちきれないようだった。安全面の指導も，走らないこと・はさみの使い方・持ち方の確認がしっかりとされていた。また，自然に配慮し，自然に優しい作品づくりの指導もあった。

展開の場面では，児童は思い思いに生き生きと活動する場面が多く見られた。材料コーナーには，児童の発想の手助けとなるよう，周辺に教師の助言となるふきだしが書かれており，それを見てさらに発想が広まった児童もいた様子。豊富な材料の中には自然のものである，まつぼっくりや木の枝などから，人工のものである，スズランテープや紙テープ・モール・洗濯バサミなどまであり，児童のイメージを表現するために非常に役立っていた。イメージのふくらませ方も，最初からイメージがふくらみ，目的をもって作業する児童もいれば，気になる材料を手に取り，作業する中でイメージがふくらんでいく児童もいて，豊富な材料は児童の生き生きとした活動の手助けになると感じた。自分の作品づくりに没頭していた児童が，満足いく作品に仕上がっていくと，今度は周囲の友達の作品を見て，めあてである「つなぐ」を意識し始める。つなぐ表現も児童によって様々で，四季でつなぐイメージで固めた4人の児童はそれぞれつくっていた自分の作品を季節に合わせた木にし，春夏秋冬の4本の木としてつなげた。また，紅葉の木とクリスマスツリーをそれぞれにつくっていた2人の児童は，紅葉の秋の木とクリスマスの冬の木ではうま

くつなぐことが難しいからと、どちらの季節にも合いそうなオレンジのスズランテープで2本の木をつなげていた。どの児童にも教師はイメージマップを参考に児童の発想と工夫を賞賛しており、児童の自信につながるように声をかけていたのが印象的だった。授業の終末では、できあがった児童の作品を全体に周知し、思いを言葉で表現する活動をした。工夫を教師がうまく賞賛することで、全体にも伝わりアットホームな雰囲気となった。「まだまだやりたい」という児童からの声がたくさんあがり、素晴らしい授業であった。



4 研究協議より

教師の思いが伝わるアットホームな授業で、児童が生き生きと活動に取り組んでいた。材料集め等大変だったと思うが、是非参考にしたいという意見が多く出た。また、戸祭小ならではの中庭をうまく利用し、場の設定もとてもよかった。材料は人工のものも使っていたが、自然のもののみでも、自然の美しさを感じ取ることができるのでよいのではという意見も出た。

イメージマップは、児童の思考の変化が見てわかるのでよいという意見が多かった。だが一方で、イメージを言葉にすることで、確固たるものにしてしまうのもどうなのかという意見もあった。理由としては、活動や遊びの中からイメージをふくらませていくことや、言葉にできないイメージや気持ちをうみだすのも大事だと考えるからとのこと。また、イメージを言葉にするのが困難な児童には、どんな支援をしたのかという質問に対して、文章でなく単語でも、書き方にはこだわらないことと教師と一緒に考えることでイメージマップをつくっていったとのこと。イメージをもてなかったり、うまく形にするのが困難だったりする児童に対する支援として、ヒントコーナーのような場を設定するのも有効であるとの意見もあった。

指導助言者の谷仲俊彦先生は、児童が夢中になって活動する様子からこの授業は大成功だったと話した。材料についても自然のものから人工のものまで豊富にそろっていてよい。人工のものに関しては様々な色があったり、質感が違ったりするもの等、児童の表現を形にする有効な手段であったとのこと。また場所についても、人と人がつながるのに適した空間で、2階からも中庭が見えることから様々な景色を見られるのでよい。戸祭小の児童にとって中庭は、一部の授業で

しか入れない特別な場所で、その中庭中でもさらに自分のお気に入りの場所を自由に決めてのびのびと活動できたことが、児童のイメージをふくらませる手助けになった。何より、授業が終わってもまだ作業を続けている児童や、友達と一緒に写真を撮っている児童がいて、「うみだす楽しさ」につながった素晴らしい授業であった。



宇都宮市立戸祭小学校公開授業

公開授業 5年

とまつりウォッチ！～その顔いいね～

■ 授業者 大関 直子 宇都宮市立戸祭小学校

1 題材のねらい

本学級の児童は、図工の時間が好きで、授業を楽しみにしている児童が多い。しかし、既習の工作の単元では、一度組み立てた形に満足し、発想が膨らまない児童の様子も見られた。そこで、デジタルカメラで自分の作品を画像に残し、新たに試行錯誤できるようにしたところ、思いをめぐらしながらより生き生きと活動することができた。児童にとってデジタルカメラは身近なものであり、比較的自在に扱えるツールである。表現方法の一つとしてデジタルカメラを活用することにより、児童が興味・関心をもち、生み出す楽しさを味わうことができるのではないかと考え、本題材を設定した。

2 題材について

本題材はデジタルカメラを使い、学校の中に隠れた「顔」を探す活動からスタートした。見つけた「顔」の面白さや見つけた場所の特徴からキャラクターを生み出し、それを動かして撮影し、ストーリー性をもたせた3コマ画像の作品に仕上げる予定である。「顔」探しでは、小グ

ループでの活動を取り入れ、友達と見方や感じ方を共有しながら関心を高めさせた。また、撮影するときの向きや角度の違いによる見え方の面白さを感じ取らせることで、キャラクター誕生への思いを深めさせた。本時では、コマ撮り動画でキャラクターの作り方を説明し、作成の流れを短時間で分かりやすく紹介した。また、ウェビングを行い、キャラクターの性格や特徴などを考えさせ、次時のストーリー作りに生かせるようにした。さらに、ヒントパーツを用意し、形や色を参考にして試行錯誤しながら発想を広げる助けとした。次時では、作成したキャラクターの性格や特徴を生かして、ストーリー性のある3コマ画像作品作成を行う。本時で行ったウェビングを元に発想を広げ、「うみだす楽しさ」を味わわせたいと考えている。

3 授業の様子から

導入の場面ではキャラクターの作り方を理解させるために「レスキュー君誕生」のコマ撮り動画を見せた。手足の付け方や動きの作り方など、作成の流れを短時間で分かりやすく紹介したことで、児童は見通しをもって活動に取り組んでいた。また、教師が作成したキャラクターを2つずつ紹介したことで、同じ顔やパーツを使っても、組み合わせ方や向きで表情が変わることを実感させた。細かい部分にも注意を向けさせ、キャラクターの性格や好きなことなどを表現するヒントを与えていた。ウェビングの作業では、なかなか発想が広がらず取り組むのに時間がかかった児童もいたが、教師が「あとでつけたしてもいいから、どんどんやってみよう」と声をかけたことで、まずは手を動かしてみ、ひらめいたことを記入できるようになってきた。児童はキャラクターを作りながら考えが固まり、具体的に思いを広げることができていた。キャラクター作りでは、ヒントパーツがとても有効だった。児童はヒントパーツを使い、色や形を重ねたり向きを変えたり、試行錯誤しながら考えることができていた。途中で数名のキャラクターを紹介し、パーツを重ねたりペンを使ったりしているなどの良い点を紹介した。このことにより、他の児童も「いいところをまねしよう」という気持ちが高まり、さらによい作品へと仕上がった。



4 研究協議より

【協議】

Q：3年間の図工の研究で、児童にどんな変化があったか。

A：事前に教材を十分に研究し、参考作品を提示するなどしたことで、児童は見通しをもち、

いきいきと取り組むことができるようになった。また、アートタイムの継続により、基本的な技能を身に付け高めることで、自分の思いをさらに具体的に表現できるようになり、児童の意欲につながってきている。

Q：図工の授業の準備はどうしているのか。

A：基本的に、教科書をベースにした題材を扱っている。学年4クラスで同じ週に同じ内容の授業を行うように調整し、参考作品やヒントパーツなどはほかのクラスで使ったものを使い回すなどして、学年の教員で協力して準備をしている。

Q：ウェビングは時間がかかっただけで、必要なかった児童もいたのではないか。

A：なかなかウェビングに取り組めない児童もいたが、手を動かしながらアイデアが出てきてそれをつけ足している児童が多かった。ウェビングシートを見ながら作業することで、途中でコンセプトがずれたりすることなく活動でき、次の作業でストーリーを考えるときに自分の振り返りとしても活用できるので、時間はかかったが意味のある活動だったと考えている。

【指導講評】 上都賀教育事務所 大貫 敏 先生

本時は、授業の観点でも挙げられていた「コマ撮り」「ウェビング」「ヒントパーツ」の3点が効果的に作用した、とてもいい授業だった。特にヒントパーツは、ヒントパーツをそのまま使ったりまねしたりするだけでなく、児童が自分で生み出した色、形も加わり、図工が苦手な子も満足感、達成感を味わえたのではないかと感じた。

題材の設定においては、キャラクターに興味・関心が高い児童の実態をよく理解しており、「妖怪ウォッチ」にかけた題材名がとてもよかった。本題材では造形活動でデジタルカメラを使ったが、カメラを通して見ることで日ごろの目線とは異なる表現をしたり、画像を友だちと見せ合うことで楽しさを味わったりすることができたのではないか。高学年になると、自分のイメージ通りに表現できないことから図工に苦手意識をもつ児童が増えてくるが、コラージュ的なキャラクターを作り、完成作品も写真ということで、どの児童も臆することなく生き生きと取り組んでいた。

小学校の造形活動は、中学校のベースとなる。小学校で造形遊びを十分に体験していると、発想力が豊かになるし、工作の技能は技術科の能力へつながる。本時のデジカメを使った活動は、グラフィックソフトを利用した学習や、ビデオやアニメーションを使った作品作りへと生かされるだろう。中学校へつながる、とても意味のある題材だった。



宇都宮市立戸祭小学校公開授業
公開授業 6年

伝えよう 広重ワールド

～伝え合おう！ 東海道五十三次～

■ 授業者 大島 陽平 宇都宮市立戸祭小学校

1 題材のねらい

鑑賞の目を育てるために、市の美術館に行ったり出前授業で浮世絵について学ぶ機会を設けたりする。次に手掛かりとなるポイントを決めて皆で浮世絵を見る機会を持つ。そして自分たちが選んだ浮世絵を鑑賞するという段階を踏むこととした。その中で浮世絵から感じ取ったことを交流させる学び合いの場を設定し、自他の見方の違いや良さに気づき、認め合う喜びを実感させることで、本研究が目指す「伝え合う喜び」に迫りたいと考えた。

2 題材について

鑑賞の授業について、ここ数年研究をしてきた。「伝え合う喜び」ということで、まずは子供たちが喜んで、楽しんで鑑賞をすることができるようにと取り組んできた。

本題材は、那珂川町に美術館がある歌川広重の「東海道五十三次」を鑑賞する。浮世絵に焦点を当てることは、浮世絵に対する理解を深めるとともに、我が国の美術作品に触れ、良さや美しさを感じ取るよい機会である。また、社会科で江戸時代の文化や風土を学ぶことによって、この時代に描かれた浮世絵の作品に興味を持って鑑賞することができる考える。日本の浮世絵の素晴らしさに触れることで、伝統文化を大切にしようとする態度を育成したい。



3 授業の様子から

「東海道五十三次」の浮世絵の中から児童に気に入った浮世絵を選ばせたことで、自分が旅人になったつもりで作品を鑑賞していた。鑑賞を進めていく際の手掛かりになるポイントを3つの観点で示しそれをもとに付箋紙に自由に書かせることで、多様な角度からの意見がありイメージの広がりを感じた。観点が明確になっているので、手を休める児童はいなかった。またポイントを書いたヒントカードを一つ一つ確認し、細かいところまで視点を広げ、イメージを膨らませていた。こうして、たくさん書いた付箋を基に絵の題名を自分なりに付けた。題名を書き、誇らしげな顔を見せた児童が印象的だった。絵の題名や付箋に書いたことをグループで話し合うことで考えが深まり、鑑賞の幅が広がっていた。そして、全員が付箋紙に書き、題名を付けることができた。児童の感想の中には、「友達と見方が違って面白かった。」「自分が想像もしなかったことを友達が言っていて勉強になった。」という意見が多くあった。友達の意見を共感的に受け止めていたことがうかがえる。どの児童も、「東海道五十三次」の世界を堪能していた。



4 研究協議より

(質 問) 第1時で、「学芸員の話聞く」とあったが、学芸員はどんな話をしたのか。

(授業者) 最初、子供たちは「浮世絵」を「絵」とあるので水彩画とか油絵だと思っていて、版画だと思っていなかった。そこで、学芸員に実際に版木を持ってきてもらった。さらに多色刷りの実際の工程も見せてもらった。また、パワーポイントやワークシートを使っ

て、「これは、浮世絵でしょうか。」というクイズを行い興味を持たせた。

次の段階として、「浮世絵という言葉はどのような風に生まれたのか。誰が浮世絵を購入したのか。版画ということで、たくさん刷られ値段が安くなり一般市民に広がった。」などの浮世絵に関する簡単な知識や面白さを学芸員に教えてもらった。

「東海道五十三次」に関しては、あまり細かく教えすぎてしまうと絵に対する先入観ができてしまい鑑賞が難しくなるので、さらっと流して欲しいとお願いした。

(質 問) グループで意見を交換していくと良い面もあるが、話し合うことで意見が1つに集約されていってしまう場面もあった。それはどうなのか。

(授業者) 私は、多数決で決めるのが目的ではないと思っている。児童には、前時まで正解はないと指導してきた。あそこで、私が「その意見でもいいんだよ。」と促せば良かった。この授業では答えは必要としていないが、最終的にはそこまで行き着くことも必要なのではないかと感じている。

(司会者) この班の話し合いに興味を持って聞いた子が、調べて答えが分かったとき、より深く入っていけるのではないかなと思う。

(質 問) 一度考えた題名を変えた児童がいたが、評価はどうするのか。

(授業者) 題名は、変わらなくても良い・変えても良い。変えたなら、変えたなりの理由・根拠がしっかりしていれば良い。

(質 問) 3つの観点は、どういう経緯で生まれてきたのか。

(授業者) 観点は、教員の方で子どもの反応を予想して絞り込んでいった。ヒントカードは、視点を文章化したものである。絵によって、ヒントカードの中身を変えることも必要だったのかもしれない。



さくら市立氏家中学校公開授業 1 年

サプライズ&ハピネス

ーびっくり箱に込めた思いー

■ 授業者 鹿目 走 さくら市立氏家中学校

1 題材のねらい

本大会の大きなテーマである「つながり」を、人と素材とのつながりと小学校での学習のつながりの2つの点に重点をおいて授業を計画しました。また、本題材では研究を進める前段階の先行研究として、和菓子づくりやお菓子のパッケージ、グリーティングボックスカードづくりに取り組んできました。本大会の「あふれる思い」が研究課題となったことから、より課題に迫るために、相手を幸せにするびっくり箱を研究テーマにしました。

本題材では、素材体験からカッターの使い方、3人一組で制作するグループ活動、ワークシートを用いての学習計画づくり、“だれ”に贈るのかその対象のリサーチ、アイディアスケッチ、素材の確認、これらの段階を経て本時の「効果的に伝わるように表現する」という学習活動につなげてきました。本時の学習を振り返った後、最終的にそれぞれの相手に作品を贈ります。実際に贈ることを前提に、受け手の気持ちを考えながらデザインする学習を通して、人や素材との関わりからあふれ出た様々な「思い」を「びっくり箱」に詰め込み、形として生み出すことで、「つながる」喜びを体験させたいと考えました。

2 題材について

本題材は、学習指導要領美術編第1学年A表現(2)(3)及び、B鑑賞(1)アの内容に基づいて授業を設計しました。生徒たちに工夫して取り組む楽しさとともに、贈る相手への思いやりを作品に込め表現する機会にしたいと考えました。本地区では素材や箱の形状について検討を重ねました。生徒たちは学校生活や私生活の中で、誰か幸せな気持ちにさせたい人を思い浮かべ、「びっくり箱」を制作します。箱の形は教科書にも掲載されている「グリーティング・カード」というペーパークラフトを基本にしています。題材名「サプライズ&ハピネス」は、小山薫堂氏が提唱する「サービス精神」をもとに、日常生活にちょっとした一工夫を取り入れることで、「誰かを幸せな気分させるサプライズ」から設定しました。

3 授業の様子から

誰に贈るかを明確にすることで、生徒は贈る相手のことを考えながら楽しそうに創作していた。前段階までの指導が生かされ、本時の目標に向けた学習活動が展開されていた。また、グループ活動では、お互いの良さを発見できるよう指導されていて、その活動が子どもの学び合いにつながっていた。制作の時間短縮と、一人では思いつかないことも話し合う



ことにより表現できるという長所が見られた。そこには、人間関係が醸成されていることが土台になっているともいえる。また、生徒たちの創りたいという思いを発想から広げる指導がなされていて好ましかった。

表現での基礎・基本を押さえ、小学校での造形体験を聞くなど、指導にきめ細かさが見られた。ペーパークラフトはやり直すことができ、生徒に試行錯誤する学習の機会を保障して目標に迫る授業が展開されていた。

4 研究協議より

授業者から“つながり”を意識した視点から題材の深まりを研究することができたが、多様な表現方法からねらいが散漫になることもあり、その焦点化が今後の課題という感想をいただきました。

授業の準備に早めに取りかかっている生徒の姿から、生徒が主体的に伸び伸びと取り組んでいたと感じました。生徒たちも落ち着いていて雰囲気が良い。小学校との連携やグループ活動、発想についてなど指導者の様々な思いが授業に込められていることが伝わり、指導者の授業を創っていく姿勢が素晴らしいという意見をいただきました。



生徒の学習については、“贈りたい”という思いが生徒の心を揺さぶり表現への動機につながるということが重要であり、そのワクワク感を形として伝えることが大切。今回の授業では、「箱」で伝えるという制限をかけることが、生徒に安心感を与えていました。生徒の実態や個人差に応じて発想にどう“制限”をかけるか、実際には制限がなくても、生徒への投げかけ方で工夫していく。また、抽象形を用いることから、分からない形から発想を広げる手法も考えられる。

今後の課題としては、色彩や形をもとにしてその思いを相手にどう伝えるか、ヒントを与えながら指導していく。生徒一人一人に試行錯誤する勇気を与え、グループ活動などの言語活動を充実させて、お互いの話を“聞ける”子を育てていくこと。それを中学校の美術の学習としてどう位置付けるか、などの助言をいただきました。

小山市立小山第三中学校公開授業 2年

心の目でつながる世界

—美術館と連携した鑑賞活動—

■ 授業者 五月女 奈津美 小山市立小山第三中学校

1 題材のねらい

「作品の見方を深めよう」

- (1) 美術作品に興味・関心を持ち、そのよさや美しさを味わおうとする。
- (2) 美術作品の造形的なよさや美しさ、表現の工夫などを感じ取り、それを友達と共有し自分の考えと友達の考えを比較し合うことによって、作品の見方や感じ方を深めることが

できる。

2 題材について

本校の生徒は、こだわりなく他者を受け入れる度量のある生徒が多い。諸活動において、意欲的に取り組み、美術への関心も高い。真面目である反面、自分から何かを発信して表現しようという意欲にやや欠ける。多くの「本物」を鑑賞できるよさを活用し、「つたえあう喜び」を味わうと共に「思いを表現する力」を引き出したいと考えた。

- ・思いを共有しやすくするために、少人数のグループ編成とした。
- ・キーワードを示したレーダーチャート式のワークシートを工夫し活用した。

3 授業の様子から（授業者の提案内容）

- ・各テーマ（県、校種別、分科会）との関連。
- ・対話しながらの授業に手応えを感じていた。
全員が参加し深く鑑賞できているのか。
「自分の思い」を何人が考えているだろう。
- ・主体的な鑑賞態度→深く味わう力。
- ・「本物」との出会い。見る視点。
- ・「あーとネット栃木」の協力。
- ・美術館との連携。アートクルーズの活用（バス送迎）。展示内容の情報・資料提供。
- ・多角形レーダーチャート→作品をどういう視点で見るとかきっかけづくりのため。
- ・プレ授業ではキーワードサイコロ連想も使用した。
- ・話し合いの人数を少数にした。→言いやすい。聞き取りやすい。
- ・課題→一つ一つの作品に関わる時間が少なくなる。

レーダーチャートは見方を限定してしまう。

美術館の展示がシーズンで変わる。

- ・反省→「見方を広める」だけでなく「高める」「深める」という解釈が甘かった。

戦争の展示でデリケートな一面もある。もう少し作品について紹介できればよかった。

普段おとなしい外国籍の生徒が多く発言したことに驚き、また周囲も受け入れていた。



4 研究協議より

<参加者の意見>

- ・（新潟県の先生）レーダーチャートはきっかけとしては良い手段だったと思う。
サイコロワークショップは行わなかったのか。
→プレ授業では時間をとりすぎてしまった。
会場は展示物があつたため転がさず、おみくじ方式にて行った。
グループの編成方法は。→事前指導で選ばせた結果、指導上の配慮もあった。
指導案の学習形態を変更したのか。→研修での助言から。個に返す意図があつた。
- ・（栃木県の先生）授業者決定からお疲れ様でした。レーダーチャート、ツールの使い方は様々だ。「見方を深める」人生経験が少ないと深まらない。だから人と話し合う。深

めるためなどそれぞれの時間が必要。後日どのように深める？

→事後指導は「難民」「占領」など今回出てきた言葉の説明をしたり、チラシを配布したり、調べさせたりする予定である。

- ・（東京都の先生）美術科においては「戦争」について扱うことは非常にデリケートである。だから自分で調べさせる方がよい。
- ・（栃木県の先生）プレ授業の教室と美術館を比べての感想を聞かせてほしい。
→大変だった。毎回展示内容が異なった。本物の価値は大きい。実際に見ないとわからない。アートカードではわからないスケールであった。学芸員にも気軽に尋ねるとよい。大変と思わずに美術館を利用すると良い。

<助言>

- ・昨年まで県立美術館に9年間勤務していた。現在小学校。という視点でお話をします。
- ・美術部の生徒を連れてきた夏と違い、おとなしめだったか。資料集や図版ではわからない本物の大きさを感じ、美術館での授業をした価値はあった。
- ・問題点→公開授業には向かないのではないかな。
- ・今回の展覧会の内容は決まっていなかった。
- ・美術館ごとに授業にふさわしい展示を調べてみる。
- ・アートクルーズ（美術館送迎）など活用すれば教育現場に生かせる。
- ・戦争画については、作家の思いと言えど、従軍の意味もあり自由な絵では無い。
- ・グループは見えないところを見やすくする。他教科との接点を見つけ、関連付けると広がるのではないかな。
- ・レーダーチャートは導き出すためには良いツール。ただ見方を限定してしまう。入れる言葉を選ぶ必要があるのではないかな。

宇都宮市立横川中学校公開授業3年

身近なモノがカタル物語

—思いをこめたアニメーション—

■ 授業者 五月女 正明 宇都宮市立横川中学校

1 題材のねらい

ストップモーションアニメーションを共同で作り上げる過程では、伝えたいテーマや物語のシナリオづくりなど発想や構想をまとめる力が必要である。また、場面設定やカメラアングルなどの効果を生かして撮影する技能など、試行錯誤しながら協力して制作することで、互いに美術の見方や考え方、表現の価値意識などを学ぶことができるのではないだろうか。美術の基本を確実に身に付け、これからの創造活動や豊かな生き方につなげられる力を育みたい。

2 題材について

学習指導要領美術編第2・3学年のA表現(2)ア及び(3)ア、イの内容に基づいて設定した。美術ならではの「色」や「形」にさらに「動き」という観点を加えたコミュニケーションを通して、作品への思いから発想・構想へとつなげ、構想から表現の工夫を何度も練り直し制作していく過程を重視する課題とした。ストップモーションアニメーションの技法による制作であるが、デジタルカメラで使用できる機能に制限を設けたことにより、技法に流されることなく、生徒は無限の発想や工夫を見出すことができる題材となっている。

3 授業の様子から



授業者から、3年生になり、新たな発想から表現力を向上させた制作になったと、生徒に自信を持たせる投げかけから授業に入った。

デジタルカメラの再生機能を使って作品の投影発表を行い、班の代表者が作品のテーマや自分たちの思い、制作の概要などを中心に伝達した。大きなスクリーンで自分達の作品が流れる雰囲気生徒は緊張しながらも丁寧な説明を行

っていた。

鑑賞後、各自ワークシートに感想を記入し、班で話し合った意見をまとめ、ホワイトボードに掲示し共有した。鑑賞の観点を絞ることで、作品への視点を明確にしたコメントがなされていた。短い時間であったが、自分達の感想をよくまとめ、的確な話し合い活動がなされていた。

4 研究協議より

本研究会では、グループセッションの形式で授業研究会を実施した。参観者からは、「授業者の情熱を感じる授業であった。」「制作の様子を見てみたい内容であった。」「生徒の発表が書いているだけになっている印象があり、もう少し生徒自体が意見について述べる機会があると批評会として成立していくのではないだろうか。」などの意見をいただいた。

指導助言者から、アニメーションを扱う場合、絵画・彫刻、デザイン・工芸等の分野にとらわれることなく、A表現の指導事項を踏まえ、発想や構想の段階で(1)、(2)のどちらで扱うか、授業者のねらいを明確にすることが重要であること、また、役割分担を持たせた取組によって作品につなげていく今回の課題から、制作過程でグループによる言語活動を軸に「課題の発見」「工夫」

「解決」に主体的に取り組む活動は、課題の発見と解決に向けた主体的・協同的な学び、いわゆる「アクティブ・ラーニング」につながっていくなど、助言をいただいた。



高等学校公開授業・授業研究会

会場：栃木県立さくら清修高等学校

栃木県立さくら清修高等学校公開授業

公開授業 3年

映像インスタレーション returns!

■ 授業者 吉澤 順一 栃木県立さくら清修高等学校

1 授業内容

作成した映像作品を鑑賞し，グループで話し合いながら，作品についての理解を深める。



■授業者	吉澤 順一	(栃木県立さくら清修高等学校)
■助言者	林 香君	(文星芸術大学)
■司会者	島田 幹男	(栃木県立石橋高等学校)
■記録者	米澤 あずさ	(栃木県立黒磯高等学校)

2 参加者の意見

・どのようにグループを分けたのか。また，上映する作品はどのように選んだのか。

—くじ引きで，A B C Dの4グループに分けた。今回は4つの中から，特にテイストの違う2作品を上映した。

・移動等の時間節約のために，授業のすべてを工芸室でおこなえば良かったのではないかな。

—普段は工芸室で授業をしている。しかし，今回は参観者が多いので，工芸室では手狭だと考えた。また，作品を上映する場所が工芸室周辺で確定していなかったなので，美術室を拠点にすることにした。

・切り口の違う生徒作品が良かった。鑑賞後，グループごとの話し合いの場でのねらいは何か。

—作品が成立するために必要なものは何か，作品成立の契機は何なのか，時間・空間的な大きさ

はどれくらいか、作品が完成する時期はいつなのかなど、作品の特性について考えてほしかった。絵画や彫刻だと型にはまった考えが多いが、映像のようにとらえどころのない作品からは色々な考えが出るのではないかと思った。グループ内で1人1人の意見を出し合わせて整理し、様々な観点や価値観があることを生徒が噛みしめ理解することを期待した。

- ・評価はどのようにつけるのか。

—1学期におこなった際には、グループごとの企画書やインスタレーションについてのワークシートなどの提出物などから。作品完成後は、作品を全員で鑑賞し感想カードを記入して提出。今回の発表では、ワークシートと上映時の動き、話し合いの様子などで評価をする予定。

- ・導入の段階で示した作品はあるか。

—過去の生徒作品を見せた。ただし、今回は機器のトラブルで映像を見せることができず、映像のもとになった静止画と、作品制作中の写真のみ。

- ・上映された作品はどちらも静止画をつなげたスライドショー形式のものだったが、映像作品と言えるのか。

—作品制作の要素の内、映像については **picture** または **movie** と示した。教員としては動画でも静止画のスライドショー形式でも、どちらも映像作品であると考えている。生徒には、静止画の方が作成は容易であると話した。また、制作に使用したコンパクトデジタルカメラは、静止画は撮れるが、動画や音声を収録するのは得意ではない。過去の生徒作品で、コンパクトデジタルカメラで動画を撮った例はあったが、出来栄はあまり良くなかったので勧めていない。また、映像表現の科目があり、そちらで動画を扱っている。



3 助言

作品からは、高校生の可能性を感じた。とても新鮮だった。

起承転結のあるストーリーを展開していくように、もっと指導しても良いのではないか。作品に物語性があれば、何をやっているのか、どこに回帰すれば良いのか分かりやすい。ストーリーをつくっていく力は大切だ。

鑑賞後、作品についてグループ内で共通した意見を発表させたが、この場で発表されなかった“異なる意見”も美術の大切な部分になる。生徒は自分なりの意見を書けていて、そこから高校生の将来性を感じる。

校種種別分科会・ワークショップ

大会テーマ		分科会	分科会テーマ	提案・助言・司会担当（地区）	校種
つなげよう 自分らしく 生きる未来へ	あふれる思い	1	感動を、表したい思いの 高まりにつなげる	1a 新潟県	小
				1b 栃木県（那須・南那須・塩谷）	
		2		2a 群馬県	中
				2b 栃木県（那須）	
		3	人やものとのかかわりを、 発想のふくらみにつなげる	3 栃木県	幼
		4		4a 埼玉県	小
				4b 栃木県（芳賀）	
		5		5a 神奈川県	中
				5b 栃木県（上都賀）	
	うみだす楽しさ	6	素材や表現方法との 出会いを、 表現の発展につなげる	6a 茨城県	小
				6b 栃木県（下都賀）	
		7		7a 長野県	中 小
				7b 東京都	
		8		8a 千葉県	中
				8b 栃木県（芳賀）	
	つたえあう	9	自分なりの見方や表現を、 楽しさの再発見につなげる	9a 神奈川県	小
				9b 栃木県（上都賀）	
		10		10a 東京都	中
				10b 静岡県	
		11	互いの見方や感じ方のよ さを、 認め合う喜びにつなげる	11a 千葉県	小
				11b 栃木県（佐野・足利）	
		12		12a 山梨県	中
				12b 栃木県（佐野・足利）	
		13		13 栃木県	高

分科会		提 案	助 言	司 会	記 録
1	a	飯田 美輝夫 糸魚川市立青梅小学校	細井 一貞 上越市立八千浦小学校	白井 由美子 上越市立城北中学校	上 雅次 柏崎市立第三中学校
	b	仲西 伸人 大田原市立大田原小学校	山口 喜雄 宇都宮大学教育学部	橋本 彰 那須塩原市立三島小学校	大木 雅子・菊地 直子 那須烏山市立七合小学校 矢板市立西小学校
2	a	久保田 裕 邑楽町立邑楽中学校	森坂 実紀人 前橋市立第三中学校	布目 雄一郎 藤岡市立西中学校	萩原 憲一 高崎市立榛名中学校
	b	高橋 元彦 那須塩原市立西部須野中学校	青木 孝浩 栃木県教育委員会	藤田 光一 大田原市立大田原中学校	小林 栄子 那須塩原市立黒磯中学校
3	a	ワークショップ ① 桂木 奈巳 宇都宮共和大学子ども生活学部 ② 富川 千明 宇都宮大学教育学部附属幼稚園			
4	a	加藤 はる美 川越市立霧ヶ関南小学校	田中 晃 川越市立大東西中学校	嶋田 恵美子 川越市立霧ヶ関小学校	赤地 桜 川越市立霧ヶ関南中学校
	b	長棹 真実 真岡市立真岡小学校	小松崎 正訓 芳賀地区広域行政事務組合教育委員会	谷口 弘子 真岡市立西田井小学校	酒井 和香 真岡市立真岡西小学校
5	a	大橋 佳子 相模原市立相隣中学校	小林 正子 相模原市立大野台中学校	津田 淳人 相模原市立鳥屋中学校	中野 夢子 相模原市立上鶴岡中学校
	b	内海 信二 日光市立大沢中学校	田中 茂 鹿沼市立南押原中学校	小野 潔 鹿沼市立北中学校	青島 未歩 鹿沼市立北押原中学校
6	a	渡邊 真喜夫 鉢田市立上島西小学校	横田 次男 鉢田市立徳徳小学校	生井澤 良一 鉢田市立当間小学校	石上 幸毅 鉢田市立鉢田南中学校
	b	丸山 真弓 栃木市立国府北小学校	谷仲 俊彦 栃木県総合教育センター	海老沼 真弓 小山市立小山城南小学校	石上 友理 栃木市立栃木第五小学校
7	a	中平 紀子 小布施町立小布施中学校	田中 好文 安曇野市立豊科東小学校	沓掛 隆 松本市立会田中学校	久保田 充徳 長野市立犀陵中学校
	b	林 小和子 立川市立第一小学校	室 恵理子 杉並区立方南小学校	菅原 亮 世田谷区立山野小学校	高松 みき 調布市立飛田給小学校
8	a	石毛 千博 銚子市立第一中学校	平野 正春 千葉市立緑が丘中学校	齋藤 浩美 銚子市立銚子中学校	佐久間 宏子 旭市立第二中学校
	b	大木 尚人 真岡市立真岡中学校	稲葉 守 茂木町立茂木小学校	小池 浩行 市貝町立市貝中学校	秋山 幸子 真岡市立大内中学校
9	a	笠本 健太 横浜市立西寺尾小学校	瀧澤 優子 横浜市立西寺尾小学校	吉田 岳雄 横浜市立二俣川小学校	井田 善之 横浜市立小机小学校
	b	宮崎 直美 日光市立所野小学校	大貫 敏 上都賀教育事務所	久武 孝弘 鹿沼市立みなみ小学校	小林 いずみ 鹿沼市立中央小学校
10	a	福田 龍郎 杉並区立中瀬中学校	中村 一哉 府中市立府中第五中学校	中村 みどり 武蔵野市立武蔵野第六中学校	濱脇 みどり 西東京市立青嵐中学校
	b	後藤 亜規子 浜松市立中部中学校	内田 いず美 浜松市立鏡塚中学校	宮内 真実 浜松市立積志中学校	清水 真紀 浜松市立南都中学校
11	a	稲本 圭治 匝瑳市立樽海小学校	小高 玄一 千葉市立坂月小学校	飯島 裕章 匝瑳市立八日市場小学校	井無田 浩 旭市立曙鳴小学校
	b	関根 毅 足利市立筑波小学校	宇賀神 俊彦 宇都宮市教育委員会	久々宇 多美子 足利市立葉鹿小学校	清水 俊美 足利市立桜小学校
12	a	秋山 菜穂 都留市立都留第一中学校	鷹野 晃 中央市立田富北小学校	窪田 眞敏 甲府市立城南中学校	小俣 直喜 山梨大学教育人間科学部附属中学校
	b	松島 克江 足利市立西中学校	五十畑 透 小山市立乙女中学校	清水 孝江 佐野市立西中学校	岸 里美 佐野市立北中学校
13	a	野口 徳雄 栃木県立足利南高等学校	林 香君 文星芸術大学	船生 正興 栃木県立宇都宮高等学校	米澤 あずさ 栃木県立黒磯高等学校

校園種別分科会・ワークショップ記録

1a 分科会・新潟県・小学校

小学校分科会 1a

ふるさとを愛し誇りを育む感動体験

■提案者 飯田美輝夫（糸魚川市立青海小学校）

■助言者 細井 一貞（上越市立八千浦小学校）

■司会者 白井由美子（上越市立城北中学校）

■記録者 上 雅次（柏崎市立第三中学校）

1 提案内容

研究主任を務め図画工作教育についての研究を進める中、「児童に“生きる力”を育てることを目指し、本当に美しいもの・ことを不断に問い真善美を求める心、ふるさとや自然環境を大切に感動する体験、他者と協働しながら自らの課題を克服し新たな価値や生活・社会をたくましくつくりだす力を育みたい」と考えた。そのための主題として、『かかわり、つくりだす力を培う図画工作科授業の創造』を主題に掲げ、次の事柄を重点的に取り組む具体的手立てとした。

①教師・友だち・保護者・地域の人々とかかわる場の設定

②地域の素材・人材・場を活用する題材開発

③表現と鑑賞とを往還する授業づくり

④「かかわり、つくりだす力」を適切に評価するための工夫 これら4つの項目である。

主題に添った研究において、本分科会テーマに関連する内容として提案したものは、題材名『みるみるうちに一地域の作品を感じて一』という、鑑賞と表現の活動が合わさった実践である。（提案者は、）独自に鑑賞活動に関して力を入れ、研究と実践を進めてきた。そのなかで生じた、「子供たちが鑑賞で感じた感動は、表したいという子供の思いにつながるか」「鑑賞文を書くときよく書けているが、なにかすっきりしない」などといった、様々な疑問に対するアプローチとなる取組である。その発端には、「もっと心に残り、生涯にわたり、思いを高めつなげる感動体験ができないだろうか」という願いが込められている。

<学習活動の概要>

◇スライド鑑賞： 興味と関心を膨らませる。

◇表現ワーク： 野田秀樹演劇表現ワークを参考にした即興身体表現を行う。

◇実物・実の場での鑑賞： 地域の美術館で対話による鑑賞を行う。

◇デジタルカメラによる映像表現： 自らの感動・興味を他者に紹介するため映像表現をする。

◇児童による相互鑑賞： 紹介作品の見合い、よさの話し合いをする。

成果 （教師が）子供の鑑賞体験を迫体験できる。

（児童の）対話による鑑賞での感動体験を表したいという意欲の高まった。

地域の鑑賞作品の開発は、地域の見方を変え、新しい価値や意味を創造する態度を培うことができる。

課題 「撮ったものを見せたい」活動の発展形を考えていくこと。

動画撮影での表し方、鑑賞での造形要素への気付きなど、表されたものを振り返り、洗練していくこと。

2 参加者の意見 (小グループによる意見交換後、代表の先生より発表)

- ・<栃木宇都宮市立戸祭小 杉山先生> 本題材のように、地域の美術館を活用することはとても素晴らしいことだと思う。教科書など印刷物のみでの鑑賞では、感動は薄くなってしまう。
(本題材のように) 実際に、自ら表現することで鑑賞の感動がより明確なものになるだろう。ただし、このような活動において、その評価は難しいものになるのではないだろうか？

- ・<栃木矢板市立西小 菊地先生> 実物を見ることの大切さを日頃より考える。今回の題材では、同じ作者の作品を比べてみることもできるため、子供に作品のつながり等いろいろなことを感じさせながら見ることもできたのだろうと思う。それらの経験は、児童の相互鑑賞にも役立つものになっていくと思う。



- ・<栃木大田原市立羽田小 玉野先生> 提案者が10年近く鑑賞授業についての研究をしていることに感銘。表現と鑑賞は表裏一体とは思いつつ、なかなか実践することは難しいと考えていた。今回の発表題材には、そのことが汲まれておりとても驚いた。

Q (提案者への質問) 具体的に年間計画においてどのように鑑賞計画を配置しているのか、知りたい。

A (質問への回答) 年間計画には随時取り入れている。計画的とは言えないかも知れない。

学年に応じて手法を変えるというように、発達の段階を意識した鑑賞方法の広がりも考えている。

- ・<千葉敬愛短大 久保木先生> 鑑賞のまとめの手法として、活動する子供たちが楽しそうだったことが印象的。鑑賞において自由であることとある程度の知識が必要になることの兼ね合いは難しいところである。
- ・<栃木大田原市立西原小 和地先生> 実物に触れる機会は必要である。
しかし、それぞれの学校においては、学区内に適した環境もあればそうでないところもあるという課題がある。

3 助言

本実践における主張点は、『鑑賞』を中核とした図画工作科指導の工夫である。

平成25年に行われた小学校学習指導要領実施状況調査における結果から、『鑑賞の対象や鑑賞の方法を工夫した指導の充実』と『共に学び高め合う場としての指導の充実』が求められていることが分かる。実践者の所属している新潟県上越地域で行った調査結果においても、「様々な作品鑑賞をするような指導工夫」「地域美術館等と連携するような指導工夫」は、課題となっている。

表現と鑑賞の関係性の捉えは、「領域」としての表現と鑑賞（図 A）、「能力」としての表現と鑑賞（図 B），があり，



「『表現』と『鑑賞』は本来一体であり，それぞれ独立して働くものではなく，働きかけたり働きかけられたりしながら，一体的に補い合って高まっていく。」（教科調査官 岡田京子） 「（鑑賞と表現は）吸って吐いて呼吸しているのと同様に，見たり働きかけたりする中で，子どもたちは，日常をしっかりと生きていくのでしょうか。」（聖心女子大学教授 水島尚喜） と，述べられている。



上図 A

下図 B

これらを踏まえながら，本実践における授業デザインの工夫を，以下（１）～（３）の項目について見ることができる。

(1)本題材の意味について

①題材名の工夫 ◎「すてき みっけ！」に託された授業者の思いや願い

- ・対象との対話により，そのものの「よさ」を見い出すこと
- ・「すてき」…造形的な諸要素（色，形，質感，雰囲気など）をもとにした「美しさ」「不思議さ」「物語性」など

②育てたい資質，能力

ア「作品（対象）のよさやおもしろさを感じ取ること」＜鑑賞＞【感じ取る力】（感性）

→価値の押しつけではない。（名画だから価値がある，というのは間違い）

イ「自分なりのよさを言葉や画像などで表現（伝達）すること」＜表現＞【つくり出す力】

→自分らしさを作品を通じて他者に伝える。コミュニケーションツールとしての作品。

ウ「他者との関係性の中で，見方・感じ方を広げること」＜相互作用＞【かかわる力】

③素材の教材化

◎なぜ「谷村美術館」なのか。

- ・建築…村野 藤吾 ・庭園…中根 金作 ・彫刻作品…澤田 政廣
- ・「身近にある作品などから，よさや面白さを感じ取る」（中学年）
- ・近くにあっても知らない「もの」や「こと」との出会い→新たな発見

(2)授業のおさえどころ

◎「表現」と「鑑賞」の往還

- ・「感受」と「表出」の相互作用→子どもの造形能力の高まり

◎作品（対象）との出会い

- ・みんなで一つの作品を鑑賞する。
- ・グループでお気に入りの作品を見つける。
- ・自分自身のお気に入りの作品を見つける。

◎「対話」の重視

・「作品との対話」「自分自身との対話」「他者との対話」

◎「対話」から「表現」へ

・「感受（鑑賞）」→「自己内対話」→「他者対話」→表現意欲の高まり→
「表現」（身体表現，文章表現，言語表現，写真表現，造形表現 等）

◎ICTの活用

・タブレット端末（作品提示，写真撮影，モニター投影等）…コミュニケーションツール

(3)「対話による鑑賞」の導入

◎「対話による美術鑑賞」の基本的な授業構造

【教師】	【子ども】
①開かれた質問をする。	①作品をよく見る。
②根拠を問う。	②作品についてよく考える。
③受容的態度で意見を受け止める。	③自分の考えを話す。
④意見を交換しまとめる。	④友だちの発言を聞く。

◆対話による美術鑑賞は，集団による意味生成である。（帝京科学大学 上野行一）

「鑑賞」とは，「モノ（対象）」を「コト化」することであり，自分なりの見方・感じ方をもとに，「もの」に「意味」を与える行為＝「命」を与えること，である。つまり，「コト化」することが，「表現」につながる。分科会テーマ「感動を，表したい思いの高まりにつなげる」と一致するものである。

（参加者の意見の中で，）学習評価についての質問があったが，具体的な評価規準は必要である。（会場校であり，授業公開のあった）戸祭小学校の研究においては，評価規準が用意され資料にも示されていた。大変参考になるものである。実践者の学校では，ポートフォリオ評価が進められており，図画工作科の評価方法として有効なものとなっている。

1b 分科会・栃木県・小学校(那須・南那須・塩谷地区)

小学校分科会 1b

共創 ～広がる感動 つながる創造～

- 提案者 仲西 伸人 （大田原市立大田原小学校）
- 助言者 山口 喜雄 （宇都宮大学教育学部）
- 司会者 橋本 彰 （那須塩原市立三島小学校）
- 記録者 大木 雅子 （那須烏山市立七合小学校）
菊地 直子 （矢板市立西小学校）

1 提案内容

児童が行う造形活動においては、その途中で人と感動を述べ合ったり、友人の作品のよさを参考にしたりすることはごく当たり前に行われている。そこでは、友人のアイディアから造形的よさを学ぶ態度、他者の気持ちや造形表現の考えを理解する能力、自己と他者の考えを総合的に判断して自分の力とする思考力・判断力等が必要とされるであろう。学習指導の内容は多様であるが、これこそが携帯・テレビゲームの普及により他者との直接的な関わりが減少している子どもたちに必要な能力であり、図画工作科で求めるべき力ではないだろうか。

本分科会テーマは「感動を表したい思いの高まりにつなげる」である。このような考えから、本地区は「感動」を「仲間や人々と共感し合う感動」のことと捉えた。そして、「共感し合いながら新しいものをつくりあげていく行為＝共創」が「表したい思いの高まりにつなげる」ものと解釈し、本地区テーマを「共創 ～広がる感動 つながる創造～」に設定した。

日常生活で体験するかげの形を意識しながら、色画用紙で森を創り、光を当てながら面白いかげを工夫する実践や建築のプロ集団による大工仕事体験教室で、本物に触れる体験・木造校舎解体に伴う木工作品作りを行った。那須のかんなの会が7年前から県北の棟梁のもとに集まり、実施している。この感動は大きく意欲につながった。

成果は教育課程の編成題材導入の工夫。導入の工夫の大切さ。意図的な鑑賞タイムの設定。次の題材への意欲付け。友達や地域の人たちとの関わり合いを通じて「共創」の時間を具体的に設定した。そうすることにより、他者との関わりから他の考えや発想を参考にして、自分の作品自体にも効果的変容が見られた。

課題は、友達の意見に惑わされずに自分の作品を創ることである。サークルトークやギャラリートークを実施することも可能であり、学習カードより効果的である。日常の小さな感動も忘れてはいけない。いかに感動体験を次につなげるかが大切だ。



2 参加者の意見

- ・〈宇都宮大学 4年生 吉沢さん〉

(問) 埼玉県羽生市生まれ。埼玉には伝統工芸があまりない。木工を盛んにするなど地域の題材を生かせるのがすばらしい。日常の生活の中で地域や学校の特色を生かした題材作りは？

(答) 那須地区は牛が多いので、低学年は牛の乳搾り体験をしたり、牛を見に行ったりしている。藍染め体験もする。

・〈新潟県糸魚川市立青海小学校 飯田先生〉

(問) 近くに陶芸教室の先生がいるがなかなかできていない。唯一できたのが木彫の作家さんに来校してもらって、それを粘土に生かした。習ったことをそのままやるのでは、カルチャースクールようになってしまう。連絡などで苦労は何かなかったか？

(答) 図工の工作を教えるのではありません。職業体験を実施するのです。と、棟梁に言われてこちらが、足を運んだ。そして、授業や題材につなげた。

藍染めの時は立ち入ってはいけない場所もあり、いかに仲良くなるかが大切なこと。

・〈國學院短期大学 永井さん〉

(問) 小さな感動を大切に、ものを創ったり、色を塗ったりすることも感動体験であるということに感動した。地域な人材を生かすことに意味がある。しかし、人員や経費の問題で呼べなかったときどのような工夫があるかを教えて欲しい。

(答) 人材活用。ないように見えても、それを探するのが大切である。足を運ぶ。日々の小さな感動が大切。積み重ねがあつてこそその本物体験が生かされる。

・〈新潟柏崎市立東中学校 吉野先生〉

(感想) 地域の人材をいかすための笹団子作りから、創ることだけでなく食べることにもつなげられる。家庭科を美術に生かし、広げていくといいと思う。

・〈千葉県敬愛大学 黒木先生〉

(問) 地域の人材に恵まれていて素晴らしい。総合と図工をつなぐポイントは。

(答) 時期を一番気にして計画を立てている。

3 助言

1 今の時代をどう見るか

空間認識をどうみるか。

ガリ版をやった年齢。直接性の指導を受けた世代。

その次の世代はテレビの影響で間接性の時代。1983年ファミコンがはやった時代。

今 22 歳超間接性の時代。代理機能があるので何度でも生き返れると考えている。

そういうことを意識して授業をやるかどうかということ。かんなは実感を伴えるよい授業。実感をもてるかどうかが大切。

切迫感をもって教えて欲しい。1つは地球環境汚染。オゾンホール未来編のテレビを見ても地球がだめになる感じがする。

平和は何かについて考えることが相手のことを考えるということにつながり、それこそが思うように創るという図画工作の目的に繋がる。民主主義を教えなければいけない。18歳から選挙権を持つ。自分の信じることをもつこと。同じ自分でもよりよく作り替えられる。失敗でもよい作品に変えられる。

時代の状態をどう捉えているか。模倣をもっと重視して欲しい。図工で教えたいのは自己

決定できることが大切であること。

2 子どもの変化

経済格差は、学力格差と・気力の格差に繋がっている。困った人のためのコーナーを創ってあげるとよい。

3 なぜ、美術や図工をやらなければいけないか

人生が左右されると思える授業をやらなければいけない。

4 授業評価をどうしていくか

取り組めない子が C。取り組まないではなく取り組めない子。教師の使命は C の子をなくすこと。毎時間 3 回その子に声を掛ける。

5 人生をどう豊かにするか

短い適応

水彩画。教師がうまくかけるように教わってこなかったから。

長い適応

人間形成、創造力、イマジネーションを図画工作以外に使う。相手の立場に立って考える。そのことができるようになるのが図画工作の目標。



2a 分科会・群馬県・中学校

中学校分科会 2a

郷土の造形・文化のよさに気付き、生き生きと自分の思いを表現する生徒の育成

ー鑑賞と表現を関連させた題材の開発を通してー

■提案者	久保田 裕	(邑楽町立邑楽中学校)
■助言者	森坂 実紀人	(前橋市立第三中学校)
■司会者	布目 雄一郎	(藤岡市立西中学校)
■記録者	萩原 憲一	(高崎市立榛名中学校)

1 提案内容

主題設定の理由としては、現行の学習指導要領から「美術文化に対する関心を高めること」が第一学年の内容に加わったことと、鑑賞と表現の指導の相互の関連を図ることが示されている。また表現の題材や材料など地域の身近なものや伝統的なものを取り上げるように配慮することも示されている。同様に群馬県の学校教育の指針に、美術文化に対する学習の具体的な題材を開発していく必要があることや、表現との関連を考え、意図的・計画的に鑑賞活動を取り入れること、地域の実態に即して、より魅力のある題材設定に努めることが示されている。

それに照らし合わせて、本校生徒の実態を見てみると、①郷土の美術文化のよさや美しさを主体的に味わう機会が少ない。②鑑賞活動を表現活動に生かす機会が少ない。③郷土の美術文化のよさを生かした表現活動の機会が少ない。以上のような実態が露わになった。

研究のねらいは、郷土の美術作品の鑑賞活動と自分の作品の表現活動を関連させた題材を開発し、実践を通してその有効性やあり方を明らかにすることである。

指導計画の作成において、次の4つの過程を設定した。①美術作品の鑑賞。②発想・構想。③表現。④自他の作品の鑑賞。研究の特性から今回は特に①と②に焦点を当てて計画を作成した。

まず、美術作品の鑑賞であるが、教師の工夫として次の4点を考えた。①郷土の伝統工芸や郷土出身の美術・漫画家の作品から鑑賞資料を選定すること。②作品のよさを理解する鑑賞の視点を設定すること。③生徒の気付きや想像をもとに教師が問いかけを行うこと。④生徒の気付きや考えをグループで交流させること。

次に、発想・構想について、次の2点を考えた。①理解させたよさを生かし、自分の思いから主題を生み出すことができる表現課題を提示する。②理解させたよさを生かし、生徒の発想を広げ、構想を深めるための具体的な方法を段階に合わせ作例で提示する。

そのような考えで作成した指導計画は次の4つである。

「だるまに願いを」、「忘れたくない夕焼け空」、「自分を見守る鬼面」、「心が伝わる漫画」。今回は本分科会テーマに合わせて、代表的な実践二つを紹介する。

「だるまに願いを」の実践は、まず美術作品の鑑賞は郷土の伝統工芸である、「高崎だるま」の鑑賞から行う。だるまの、色、形、絵柄に注目し、気付いたことや疑問を出し合い、その答えを考える。最後にグループで考えを伝え合う活動を行う。次の発想・構想の段階では、自分の願いを考える。そして、だるまのお腹の部分に、自分の願いを、色、形、絵柄で表現する。

「忘れたくない夕焼け空」の実践は、群馬県ゆかりの切り絵作家、関口コウの作品鑑賞から始める。生徒達が作品の印象を出し合い、懐かしさや寂しさ、哀愁などを感じている点に注目し、それを表した作者の心情を考えさせ、そう感じさせる線や色づかい、構図の工夫を考えさせる。発想・構想の場面では、自分の心に刻まれた放課後の情景を表現する。切り絵と彩色された背景の組合せで、その情景を表現する。

成果としては、次の5つがあげられる。①表現活動と連携した鑑賞活動により、生徒のやっ



てみたいという意欲を引き出すことができた。②生徒の郷土の造形作品や美術文化への関心を深めることができた。③鑑賞の視点、鑑賞を深める発問、生徒同士の交流活動により、生徒が主体的に対象のよさを味わうことができた。④具体的な発想・構想の方法を作例で示したことにより、自分の思いを色や形で表す能力を伸ばすことができた。⑤美術活動が生活をより豊かにすることを実感させることができた。

課題としては、まず、鑑賞活動において、生徒主体の活動を活性化させる学習形態をさらに研究し、大きな感動を生み出す活動にしたい。本分科会の、「感動を、表したい思いの高まりにつなげる美術文化への理解」に照らし合わせると、感動という部分でまだ弱いと感じる。また、学習指導要領にある、「美術文化への理解」という部分が指導者としてまだ理解できていないので、さらなる研究を進め、理解を深めたい。

最後に、作ったあとの作品を大事にする生徒、美術が生活に必要なだと感じる生徒の育成をこれからも続けていきたい。

2 参加者の意見

司会：思いがあふれる鑑賞とはなにか、また美術文化への理解とはなにか、意見をください。

鍵田（群馬県・板倉町立板倉中学校）：

生徒は地域の文化にあまり興味がないのも事実である。だからこそよさを伝えていかなければならないと思う。題材選定をどのようにしたのか聞きたい。

提案者：

群馬県の美術の良さを伝えたい、理解させたいと思い探した。だるまはすぐ思いついた。作家作品としては、よく目にするものとして、地元の新聞で見かける関口コウの作品。生徒になじみやすいものとして、美術資料にもあった、あだち充の漫画。そして県のPRポスターにあった藤岡市の鬼面瓦を取りあげた。自分の県にある美術文化に誇りを持たせたい。県内にはいろいろな伝統工芸がある。題材化や実践を繰り返してきたが、だるまの実践は生徒に人気があり、指導者としても気に入っている。

戸塚（栃木県）：

数年の実践と聞いたが、指導の流れ、変遷を教えて欲しい。

提案者：

最近のだるまの顔の描画もさせてみた。筆、ペン、どちらでもよい。髭、眉の描き方の工夫を始める生徒が出てきた。模写を一生懸命頑張る生徒の姿が見られた。広がりのある可能性を感じた。

戸塚：

作品を持ち帰らない生徒がいるが、だるまなら喜んで持ち帰るのではないかな。形が同じでも色が違うので个性的である。

南（栃木県・幸福の科学学園中学校）：

思いを形にあらわす構想の工夫がされていた。自分も同様の実践をしている。だるまに耳な



どをつけてみた。だるまから少し離れてしまったかもしれない。久保田先生の生徒作品からは、生徒の学校生活への思いが強く感じられる。だるまのイメージは強いが最近は様々な色彩を施したモダンな表現のだるまも増えてきた。九谷焼、こけしなどでも同じようなものが見られる。伝統工芸でもモダンな表現にすることで可能性は広がると思う。

司会：提案者から郷土の造形を知りたいという意見が出ていますが、何かありますか。

小林（栃木県・那須塩原市立黒磯中学校）：

以前勤務していた学校がカゴメのトマト工場の近く。トマトジュースのパッケージのデザインを考える授業実践をしていた教師がいた。

戸塚：

宿泊学習での体験活動で、「自分のふくろうをつくろう」というものがある。ふくろうの形をしただるまに色を塗る。

上野（栃木県）：

栃木はかんぴょうの生産が盛んな地域。かんぴょうをくりぬいたランタン作り。アクセサリ、バレッタづくりをしたことがある。

提案者：

現地の物を材料にして、作品づくりを行うというアイデアですね。

中原（群馬県・群馬大学教育学部附属小学校）：

分科会テーマである「感動」という言葉は最初から大きなものなのか。だるまの鑑賞という小さな感動から持って帰りたいという大きな感動になったのではないかな。作品制作を通して感動は大きくなっていくのではないかな。地域と社会とのつながり、そして感動というものの捉え方を考えさせられた実践であった。

3 助言

1.教材について

本研究は、だるま、切り絵、漫画、瓦と4つの教材をあげており、郷土の造形文化を多岐にわたり網羅している。これらの教材は、学習指導要領に示されている、身近な地域における鑑賞の対象として、また郷土の造形文化のよさに気付かせるために、ふさわしい教材だと言える。

2.鑑賞活動について

群馬県はだるまに親しみのある文化をもっている。しかし、だるまのよさや美しさにあらためて気付かせるためには、今回の実践のような鑑賞活動が必要である。色、形、絵柄など学習指導要領に示されている共通事項を生かした鑑賞の視点でみたり、気付きを交流させ、考えたりすることで、生徒はその価値や良さに初めて気付けたと言える。日々慣れ親しんでいるものでも、鑑賞活動を行うことで、生徒は新たな見方や感じ方を獲得し、改めてそのよさや価値に気付くことができた。美術文化に関する学習の充実については、中学3年間で意図的、計画的に題材を構想していくとよい。美意識や価値観が理解できるようになり、発達の段階を考慮し複数の作品を用意したり、和風や洋風などの感じ方の違いを鑑賞の視点にしたりするとよいと思われる。

3.表現活動について

今題材「だるまに願いを」では、目を書き込むかわりに体に絵柄を表現し、願いを込めていた。

発想・構想の段階では、だるまへの願いをウェビングで広げ、どのような表現にするのか、一人ひとりが考えられるようになっていた。また配色計画の段階ではたくさんの配色例を提示し、発想を広げたことで構想を深めることでできていた。このような手立てを行ったことで、どの生徒も自分なりに願いを表現できており、鑑賞した感動が表現の高まりに結びついていた。その他の題材でも、鑑賞において自分なりに獲得した見方や感じ方をそれぞれの表現に結び付け、思いの高まりにつなげている様子が感じられた。

なお学習指導要領においては、発想や構想の能力と創造的な技能を明確に位置づけ、ア、イなどの指導事項に基づいた指導の充実を図ることが重要視されている。今回の提案では、A 表現の(2)「目的や機能を考えた発想や構想」になるため、ア「構成や装飾を考えた発想や構想」、イ「伝達を考えた発想や構想」、ウ「用途や機能などを考えた発想や構想」の指導事項を十分踏まえ、指導していくことが重要になる。「だるまに願いを」であれば、まずはイ「伝達を考えた発想や構想」として生徒達がだるまを使ってどんな願いを伝達するのかを明確にする必要がある。そしてウ「用途や機能などを考えた発想や構想」として、だるまの用途や機能を考慮した上で、どこに自分の願いを表現していくのかを決めさせる。なおその際、耳や角をつけてもいいのか、あくまでだるまの形であるのかは、教師の意図によって変わると思う。その上でア「構成や装飾を考えた発想や構想」として絵を単純化したり、強調したりする技法を指導していく、という流れを意識していけると良いと思われる。

4.今後の課題

提案者が課題としている、他の郷土の造形文化の魅力を生かした題材の開発と実践を検討し、研究を深めていくための実践例の紹介。①新潟県上越市の教師の実践例。地元ワイン工場のワインパンの販売促進を目的としたパッケージラベルのデザイン制作。地域の食材文化はさまざまある。そういったパッケージデザインはさまざまな題材開発が可能であると思われる。②群馬県太田市の教師の実践。小島ねふたまつりの山車を郷土の造形文化として取り上げ、和紙でランプシェードを制作するというもの。郷土の造形文化ということで、今回は群馬県の高崎市や藤岡市の西毛地区の工芸品や美術作品を提案していたが、今後は生徒のいる邑楽町や東毛地区の造形文化から教材を探し出し、そのよさに気付かせ表現に結び付けていけるとさらによいと思う。

2b 分科会・栃木県・中学校(那須地区)

中学校分科会 2 b

感動を表現につなげて ～傘ステンドグラス～

- 提案者 高橋 元彦 (那須塩原市立西那須野中学校)
- 助言者 青木 孝浩 (栃木県教育委員会学校教育課)
- 司会者 藤田 光一 (大田原市立大田原中学校)
- 記録者 小林 栄子 (那須塩原市立黒磯中学校)

1 提案内容

はじめに生徒の感動に関するアンケートを実施し、学校行事に関する内容を加味し、文化祭で

体育館の装飾に使うものとして、題材がステンドグラスに決定した。感動体験を思い出しやすくするために、モチベーションビデオを作成し導入時に活用した。また、ウェビングの活用、友人や教師との会話を通して、励まし合ったり刺激を受けたりして、表したい思いの高まりにつながるようにした。配色計画では、オノマトペを活用してイメージと色との関連を深めた。文化祭当日は光の入り具合を調整して展示。一人では味わえない感動、さらなる感動につなげることができた。文化祭後の晴れた日に作品と生徒との写真撮影をすると、生徒が楽しそうであった。感動が表現意欲の向上につながるように、発達段階に合わせて、計画的に感動できる心を育てる機会を繰り返し設定できるとよい。

2 参加者の意見

- ・質問：「題材に感動して」と「素材完成後に光を通しての感動」の2種類があったと思うが、実際に授業ではどうであったか。
→答：様々な感動の中で、いろいろな方向につながり感動していくことがわかった。
- ・質問：半立体の傘で、表現上の苦労や、傘の内外とどこから見るような指示を出していたのか。
→答：平面しかやっていたいなかった生徒に、当初抵抗はあったものの、素材が大きいためのびのびと制作でき、マジックは間違ってもすぐ消せるので安心して取り組んでいた。向きについては取っ手を外して制作させた。内外で混色する工夫をした生徒もいた。
- ・質問：傘の展示についてはどうしたのか。
→答：生徒が発想したものが多く、写真撮影も思い思いの場所で行った。
- ・意見：行事の感動・光の感動があり、一人の感動や全体での感動…と、人との関わりの中に生まれてくる感動もある。個人差のある感動をコラボして展示するのは難しいが、コラボによって友人との新しい感動が生まれていると思う。社会や他者との関わりが多くなる時代なので、このような体験で、一人にしない「集団意識」を育てられるので、よい題材だと思う。



3 助言

傘は身近な題材であり、子どもたちの生活の中（文化）から題材を見つけるのはよいことである。ウェビングも、言語活動をやるために意義のあることであり、小学校から書いて表現する経験をやってほしいと思う。A（1）に関わる表現、A（2）他者との関わりで、目的・条件、伝えたい内容について、題材を作る際の参考にしてほしい。また、絵画・彫刻・デザイン・工芸について必ず教えてほしいというのではないので、「題材→工夫→題材→工夫の繰り返し」によって作りたいものを子どもの思いで決めていくこともできる。題材も、子どもが見つけていくことができる。解決は、「アイデアスケッチ（発想）・技能・よさや美しさを感じ取る」この3つの内容が行ったり来たり繰り返されている状況（アクティブラーニング）の中で自己決定していく。



3ワークショップ・栃木県・幼稚園

幼稚園ワークショップ3

ワークショップ①「木の実で遊ぼう」

- 指導者 桂木 奈巳先生（宇都宮共和大学子ども生活学部）
■司会者 前川 美帆（宇都宮大学教育学部附属幼稚園）
■記録者 高根沢伸友（宇都宮大学教育学部附属幼稚園）

1 はじめに

- あいさつ、講師紹介
- 活動内容の説明



2 木の実で遊ぼう

(1) 織り染め

→ 白布を織り，ウコン等の染色液に浸して模様を付ける。

偶然にできた模様がどれも素敵ですね。



簡単に染色できて，保育にも取り入れられそうですね。

(2) 木の枝フレームの飾り付け／ドイツトウヒの飾り付け

→ 木の枝を組み合わせたフレームや，ドイツトウヒ（大きな松ぼっくり）に，様々な木の実等で装飾をして飾りを作る。（取り付けにはグルーガンや針金状のものを使用する）



シナモンやハッカクなどもあって，五感を使って遊べますね。



これは楽しい！！時間を忘れてしまいそうです。

何でも好きなように飾っていけるのがいいですね。



(3) それぞれの作品を見合う

どれも素晴らしいですね。どのように装飾しても，成功体験が味わえそうです！



他の人の作品を見て，新しい工夫に気が付きました。また改めて作ってみたいです。

3 謝辞

4 閉会

ワークショップ②「砂粘土で遊ぼう」

■指導者 富川 千明 (宇都宮大学教育学部附属幼稚園)

■司会者 坂本 修子 (宇都宮大学教育学部附属幼稚園)

■記録者 岩渕 千鶴子 (宇都宮大学教育学部附属幼稚園)

1 はじめに

○あいさつ

○今日の活動の流れについて



2 砂粘土作り

トイレットペーパーを細かくちぎり、水を入れてときほぐし、次にのりを入れて混ぜ合わせ、最後に砂を入れてよく混ぜ合わせる。



子供たちは砂粘土を作る過程も楽しめそうですね。



3 成形する

何も使わずに形作る。
自然物を使って形作る。
型抜きを使って形作る。



砂粘土を様々な形作りながら、こうしたという思いがふれてくる教材ですね。何度も作り直せることも幼児期に適していると思います。

4 塗る

バターナイフやコテを使って丸太や木製リール、板に塗ってみる。



砂粘土の粘り気を多くすると塗ることもできるのですね。砂粘土は多様な遊び方がありますね。

5 削る

乾燥させた砂粘土をおろし金やネジを使って削る。



子供たちは、削るという行為に夢中になると思います。遊びに没頭する経験ができる教材ですね。早速、園でも取り入れてみたいと思います。

6 閉会

4a 分科会・埼玉県・小学校

小学校分科会 4a

「いきいき表現 育てよう確かな学力」

～一人一人の願いや思いを大切にし、豊かな表現のできる児童の育成～

■提案者	加藤 はる美（川越市立霞ヶ関中学校）
■助言者	田中 晃（川越市立大東西中学校）
■司会者	嶋田 恵美子（川越市立霞ヶ関中学校）
■記録者	赤地 桜（川越市立霞ヶ関中学校）

1 提案内容



児童は、実際に地域の竹林に行き素材と出会い、たくさん竹と触れ合いながらイメージを広げて授業をスタートさせていた。そのため、豊かにふくらんだ物語を込めて製作をした。また本授業は同地区の中学校2年生との連携授業である。それぞれの学校で竹を素材として製作をおこない、完成作品を持ち寄って展示し、一緒に互いの作品に込められた物語やイメージを語り合う鑑賞会をおこなっていた。

小学校の作品は、クレヨンで色付けをしたり他の素材と組み合わせた飾りを施したりして、物語性の豊かな作品になった。中学生の作品は、素材の特徴を活かしてさいたりしなせたりしたオブジェや門などの環境アートとなり、照明やライトアップといった光を用いた展示になった。

一緒におこなった鑑賞会では、小学生と中学生がグループになり自分の作品を紹介し合った。ファシリテーターが質問するセリフを決めるなどの仕掛けをし、感じたおもいを沢山言葉にする対話鑑賞ができていた。また、お互いの感動やよさの違いを楽しく味わっていた。

成果としては、普段の生活環境の中から豊かな素材と出会う経験となったことや異年齢との授業ができたことで自他ともに互いのよさを発見し合えたことが大きい。また中学校では、母校との関わりを持てる喜びから不登校が改善された子もいた。今後の課題は、図工美術で身に付けた表現力を今後他教科に広げていく事としている。

2 参加者の意見

(1) 静岡県 浜松市立引佐北部小学校 高島博先生より

・質問…小中一貫校でもなかなか一緒に授業をすることは困難である。そのため今回の実践については大変興味深く勉強になった。どんな大変さがあったのかを教えてください。

→回答…授業研究や打ち合わせにおいては、それぞれの学校行事との関連もあるので、時間の都合をつけるのに苦労した。しかし、両学校の管理職の協力体制が強くてとても助かった。困難もあったが、互いに有意義な研修になったと感じる。本題材や図工美術にとどまらず、様々な教育活動に生かしていけそうな研修となった。

・質問…「竹」という素材の扱いにくさや難しさはなかったのか。また中学生にとっては、「(小学生との連携は)物足りない」ということはなかったのかを教えてください。

→回答…様々な共有する道具の扱い方を学べる機会にできた。また、中学生にそう感じさせないようにねらいを定めて授業を行った結果、中学生にとっても同じ空間に作品を展示してみると小学生の作品から自分たちにはない(忘れてしまっていた)豊かな物語性や感性を感じとっていて本物の鑑賞ができていたように感じる。

(2) 茨城県 結城市立城南小学校 太田千秋先生より

・図工美術の小中連携は初めて聞いて、大変驚いた。また、地域の材料をつかっていたことがどの地区でもできる授業提案なので広がりを感じる。材料を厳選していた面も良い。

(3) 埼玉県 三郷吹上小学校 守田純一先生より

・質問…竹という素材は、扱いづらさもあるし色々な不都合があったと思う。子どものおもいにどのように対応したのかを教えてください。

→回答…本校は、どの通学路にも竹林があり、よく目にしている風景である。しかし同時に、(おっしゃるように)扱いづらさから製作の素材として使うことはほとんど経験した子どもがいなかった。竹は我が国が古来から文化芸術の広い分野において用いられている素材でもある。ぜひその竹を子ども達の身近なものにしたいと考えた。また生活の中の美しさに気づくことのできる姿勢も育つのではないかと考えた。実際竹林に行って生えている竹の感触や竹林の雰囲気を楽しむことでイメージを広げ、「竹からイメージしたものをつくろう」と提案してイメージマップにして個々の物語を深めていった。

3 助言

・小中連携はとても良い取り組みです。図画工作・美術は、9年間を見通して創造的人間形成ができる力があります。ぜひ小中学校、高校、そして美術館とも広いつながりをもって指導することを進めて頂きたいと考えます。その連携の前提となるのが「互いが互いを認めること」です。今回の提案では、まずは先生方が互いの指導を認め合い授業をつくっていくことが出来ていたと思います。それが子ども達に広がっていったのではないのでしょうか。

・本分科会テーマである「人ともものとのかわりを、発想のふくらみにつなげる」という視点でも大変有意義であったと感じます。授業の工夫として「もの・空間・人」とのかわりを制作や鑑賞など全活動に活かしていたのではないのでしょうか。こういった子ども達の

感覚や関わりを開いていくきっかけをつくっていくのが我々の役割であると考えます。今回の授業ではこの役割をしっかりと担えていたからこそ、子ども達の豊かな学びとなったのだと思います。

- ・今回の連携では、小学3年生と中学2年生という異年齢であることが大きなポイントだったと感じます。この連携によって新しい出会いができ、作品を通じて関わり合うことで新しい発見ができたのだと思います。一緒に授業をする価値を、子どもたち自身が感じ取れる授業でした。また、連携をとるときには無理なくやることが大切です。だからこそ、今回のように2年間にわたって連携授業をおこなったような普段のつながりや相互理解の関係を築けたことが自然な連携になったのだと思います。
- ・美術館との連携は各地で進んでいると思いますが、ぜひ活用してください。(何点かの教育普及の取り組みを紹介)



4b 分科会・栃木県・小学校(芳賀地区)

小学校分科会 4 b

思いを広げて生み出す表現～五感を働かせて～

- 提案者 長棹 真美（真岡市立真岡小学校）
- 助言者 小松崎 正訓（芳賀地区広域行政事務組合教育委員会指導主事）
- 司会者 三尾谷 由希子（真岡市立真岡小学校）
- 記録者 酒井 和香（真岡市立真岡西小学校）

1 提案内容

今日的課題として、児童自身が感性を働かせていないまま授業に臨んでいること、感性が働くような体験の機会の不足、教師の指導過多、指導不足がある。そこで、児童自身に本来備わっている資質や能力を一層伸ばし、自ら創り出す喜びを味わわせたいと考え、本テーマを設定した。

教師が効果的な働きかけをすれば、児童の感覚や感じ方が敏感になり自分の思いを広げることができる考えた。どのような教師の働きかけをすれば、子どもの五感を敏感に働かせ、発想・構想の能力を伸ばし、思いを広げて表現を生み出すことができるかを明確にすることにした。教師の働きかけを「①導入時の働きかけ」「②多様な素材とのかかわり」「③造形要素の学びから」

「④発想の進展・変化に向けて」の4つの視点に大別し、芳賀地区小学校32校の図工部員全員で研究授業を実践した。成果としては、①～④の教師の働きかけを意識して行い、五感を働かせた体験や活動を多く取り入れたことで、児童の感覚や感じ方がより敏感になり児童の思いを広げることができた。児童の思いや考え、感じ方などの様子や変化を目に見える形にすることで、一人一人の発想や構想の過程が把握でき、児童の思いを広げる支援につながられた。

課題としては、発想にさらに深まりをもたせるために児童の思いを形に変える欲求に適切に応えるための支援のタイミングや、表現する楽しさの再発見につながるような教師の働きかけを研究していくことが必要である。本地区では、幼・小・中合同で研修を行い、地域の商工会の協力のもと、毎年芳賀教育美術展を開催している。このような風土の中で研究の成果をともに共有することは、児童の将来にわたる豊かな人間形成につながるものと考えている。



2 参加者の意見

- ・〈千葉県川越市立霞ヶ関中学校 赤地先生〉

芳賀地区全体での研究実践であり、子どもの心を動かそうという熱意と取組の幅の広さに感動。多様な素材との関わりとして、素材コーナー設置に注目させられた。においを通して感覚に働きかけられることが分かった。

- ・〈埼玉県三郷市立吹上小学校 森田先生〉

子どもたちのもつ課題に向き合い、様々な素材を通して感性を働かせられる子どもたちの育成に努める取組が見えた。指導過多や指導不足といった教師のもつ課題では、その後、そうした教師がどのように変化してきているのか興味深い。

- ・〈栃木県真岡市立亀山小学校 藁谷先生〉

子どもたちの思いがそのまま表現された芳賀教育美術展。子どもたちのありのままを評価する芳賀地区の図工に対する考え方に新鮮さを感じる。豊かな体験の機会の重要性を再確認できた。体験や遊びを表現につなげていく具体例に関心がもてた。

3 助言

この研究は、表現のもととなる「五感」に視点を当てたものである。普段の授業の「教師の働きかけ」を「五感」という視点で見直したことで、見えてきた部分がとても多かった。今後は、さらに五感を意識したより効果的な題材や教材教具を開発していけるとよい。学校教育においても多くの知識を暗記し技術をそのまま覚えるだけではなく、実際に体験したり、人や自然やものや行為と直接的に関わったりして活動しながら、感動や驚き、発見や気づき、喜びを実感するような教育活動が大切である。



図工科の中でそのような教育活動をしなが、他教科においても体験的な活動を積極的に取り入れ、関連を図ることで、さらに相乗効果をもたらす。この研究は、子どもの「五感」という人間の根本的なものを、教育活動の中で改めて捉え直すという意味でとても大きな意味があった。これからは先生方が授業を「五感」という視点で見直すことで、子どもたちがつくりだす喜びを味わいながら自分らしく製作している姿を願っている。

5a 分科会・神奈川県・中学校

中学校分科会 5a

育てたい力をつけるための授業レシピ

～神奈川県中学校美術科研究会相模原大会での取り組み～

- 提案者 大橋 佳子 (相模原市立相陽中学校)
- 助言者 小林 正子 (相模原市立大野台中学校)
- 司会者 津田 淳人 (相模原市立鳥屋中学校)
- 記録者 中野 夢子 (相模原市立上鶴間中学校)

1 提案内容

- ・「育てたい力をつけるための『授業レシピ』」

キット教材に頼るだけではなく、美術の授業で子どもたちの「どんな力を育てたいのか」を見極めることが重要である。教師も自分の発想力をフル活用して子どもたちが発想を広げられるような題材を考えることが必要だ。

- ・授業レシピとは。

相模原市内 37 名の美術科教員が自分のおすすめの授業をレシピカード形式でまとめたもので

ある。つけない力や授業の雰囲気が一目で分かるようになっているのがポイントである。

2 参加者の意見

- ・ レシピカードの「つけない力」の配分は、授業者によって変わるのでは。
→ その通りである。これは、レシピ作成者の思いであって、実際に授業をする授業者によってアレンジを加えて実践をしていただきたい。
- ・ 自分の地域では、美術の正規教員が少なく、講師と正規教員の間で交流も少ない。題材への取り組み方に差が出てしまっていて、美術の未来に不安を感じる。
- ・ 具体的に、レシピの中の発想が広がる手立てとは。
→ ねらいに向かって、仕掛けがあるところ。
- ・ レシピの中に、良い授業の「コツ」や「ポイント」があるとよい。
- ・ 「つけられる力」の表示がまだわかりにくいので、さらに分かりやすくした方がよい。また、授業を受けて「子どもがどう変わったか」の記述があるとよい。



3 助言

美術の今日における状況は非常に厳しい。時数が減った上に、正規教員の割合も少なくなっている。キット教材に頼るだけの現状をなんとかしたいと、相模原市の美術科教員で今回アクションを起こした。まずねらいを題材名に込めるところからはじめた。相模原市には、造形さがみ風っ子展という野外造形展があり、小中学校の図工美術で情報交換をすることができ、小学校の造形遊びを中学校の美術につなげることができる。発想とはそれまでの経験から生み出されるもので、教員にもそれが必要である。教員がよい題材を生み出すためにも、このような研究会などで情報を共有するようになっていきたい。教員も発想を培っていかねばならないと考える。

5b 分科会・栃木県・中学校(上都賀地区)

中学校分科会 5b

人やものとのかわりを、発想のふくらみにつなげる

- | | | |
|------|-------|--------------|
| ■提案者 | 内海 信二 | (日光市立大沢中学校) |
| ■助言者 | 田中 茂 | (鹿沼市立南押原中学校) |
| ■司会者 | 小野 潔 | (鹿沼市立北中学校) |
| ■記録者 | 青島 未歩 | (鹿沼市立北押原中学校) |

1 提案内容

関東ブロック栃木大会のテーマを受けて、上都賀地区では「あふれる思い」の中の「人やものとのかわり」を、発想のふくらみにつなげる」を分科会のテーマとし、生徒たちの発想力の低下の研究に塩谷・南那須地区と共に取り組んできた。

上都賀地区は栃木県の北西部に位置する。世界遺産の日光東照宮と本校は日光市にある。本校は中規模校で、雰囲気は全体的に落ち着いており、部活動に熱心に取り組む生徒が多い。

今回の研究推進の柱である「授業を通して、どう発想させ、ふくらませていくか」の指導の手立てを研究した。まず、生徒が発想することを次のような段階で捉えた。

ア 外部及び内部から刺激を受ける。

イ 触発され、自分で考える。

ウ 考えを膨らませる。

エ 生み出し表現する。

研究推進の大きな前提として、教師の指導はあくまでも、生徒たちが自ら考え、自ら発想をふくらませていくために行う指導の手立てとし、研究の視点を5つ考えた。

1 導入の工夫 外部人材の活用 内発的な動機付けを取り入れる。

2 深く考えさせる視点 素材を絞るなど条件を制限することでより深く考えさせる。

3 刺激の与え方の工夫 場所を変えたり、作業工程を変えたり、エスキースを作ることで発想をふくらませる。

4 生活空間を意識した題材 完成したらどこに飾るかなど、自分の生活空間を意識させる。

5 グループ活動の工夫 制作中にも、お互いに意見交換をする環境を作る。

今回実践した授業は、題材名「ホッとする灯り」と設定した。この取り組みは、ランプシェードの制作であり、2年生を対象としている。現在の生徒たちに、少しでもホッと落ち着ける時間を感じて欲しいと思い、この題材を考えた。色々教師が試行錯誤をする中で、素材は紙のみに絞り限定した。ファイバーアート工作紙の特性を探ることで、より深く考えることができるのではないかと考えた。研究の視点2・3の効果が出るのではないと思う。

成果として、エスキースを制作しながら発想を膨らませる試みは、アイディアスケッチの感覚で、発想を膨らませることができたのではないかと考える。素材を紙に絞ったことについては、考える条件の枠を制限することで、中途半端な考えを一段深いレベルに導くことができたのではないと思う。5つの研究視点については、生徒の実態と美術科の目標を考慮して、授業における様々な手立てと工夫が必要であると認識した。



2 参加者の意見

意見1 生徒が生き生きと活動する姿が映像から窺えた。子供たちからの発想からの「終わりが見えない」等の質問が出たときの先生の答え方は。

内海先生 「こちら側はそう思えても、こっちから(違う方向から)見てごらん素敵だよ」等の答え方をする。

意見2 題材が魅力的。前調査官の奥村さんが、主に小学校の図工に関して言っていたこと「できたら

楽しい」では図工はいけない。「とにかく楽しく」それで身についていくことが根本的な考え方。今回の授業ではそれらが見られたのではないかと思う。豊かな生活のための授業、そのための発想ということであったが、例えば、目的として「誰のための灯り」という具体的なことはあったのか、目的があれば、発想が更に出たのではないか。色を付ける等の発想が広がったのではないか。その辺の手立てはいかがか。

内海先生 誰かのためにということも考えたのですが、テーマが「ホッとする」に絞りがかったので、自分のために、それ以上のテーマは考えなかった。色を付けなかった点、紙のみに絞った点は、切る、折る、丸める等、紙の特性を最大に生かしたかったから。上都賀地区の5つの視点の中の2に絞った。

意見2 生徒たちの身に付いた力として、「和の灯り(日本の文化)」や「イサムノグチ」にも広げていくとよいのではないか。

意見3 最初の県、市の説明で、自分の土地柄から見れば、非日常的であり、文化的なイメージが感じられた。素材自体には和風の発想はなかったが、土地柄なのか、和の雰囲気・感性が感じられた。土地の見直しなどがとてもよく感じられた。

3 助言

参加者の意見として出た、土地柄、培ってきたものは必要だと感じた。発想することを全部自分の言葉で説明するのは難しい。目的の前提を崩してしまうと、何でも自由になってしまう。何をもとに考えるのかが大切。結果ありきではなく、考えるのが楽しいという目的を、ある程度中学校では絞っていくことが必要。視点をどうする、生徒に示す、それを絞ることが必要なのではないか。考える部分を狭くして、深くいくことが必要。教師側で、広げたり狭めたりすることが現状、環境、素材等でさじ加減できる。それが発想力を膨らませるのではないか。「一段階深い」が美しさを求める。なんとなく作るのではなく、一段階深く作ることがグッと美しさを極められる。それを教師側でやらないといけない。そのためには教師側でしっかり把握していけないと、刺激できない。

生活空間を生かす取り組み→生活させられてる感が今の子どもは強い。生活をする武器は美術なのではないか。センスの良いものを選ぶ。美術科において生活と密着するものを植え付けていかないと生活空間を生かすことにならないのではないか。美術を通して人間作りをしていかないといけない。

6a 分科会・茨城県・小学校

小学校分科会 6a

素材や表現方法との出会いを、表現の発展につなげる

- 提案者 渡邊真喜夫 (銚田市立上島西小学校)
- 助言者 生井澤良一 (銚田市立当間小学校)
- 司会者 横田次男 (銚田市立徳宿小学校)
- 記録者 石上宰毅 (銚田市立銚田南中学校)

1 提案内容

学びたい対象との出会いによって、児童の造形活動への思いが生まれる。十分なその

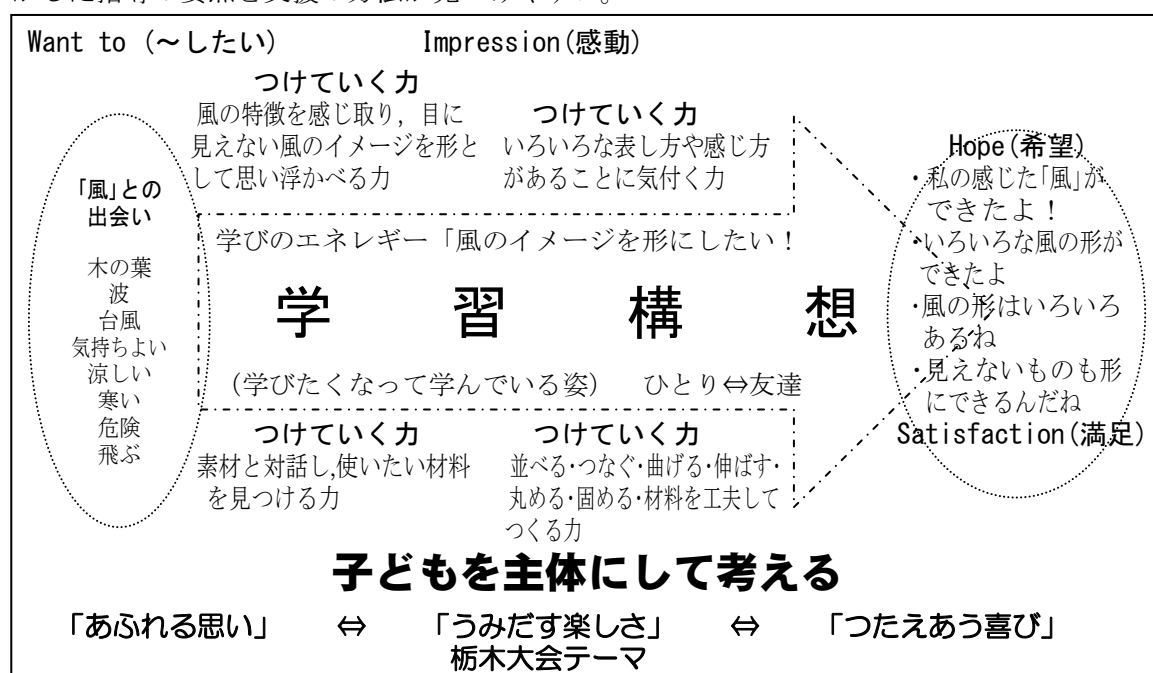
対象と主体的にふれあうことで、自己の表現イメージを広げ、意欲的に造形活動に取り組んでいく。また、その活動の過程で発想や構想の能力、創造的な表現の技能が育成されていくと考えられる。そこで、一人一人の感じたことや考えたことを形にできるような学習構想のもと、児童の自分なりのイメージを共感的に受け止め、表現意図に応じた指導・支援が大切である。

2 参加者の意見

- 立体的でバランスが取れている作品だが、持ち帰るまで保管はどうしているのか？
 - ・学級で展示し、天気に応じて持ち帰らせている。全校で 55 人の小規模校のため、全学級とも教室内等に十分なスペースがあり、同じように展示している。また、廊下などにも積極的に展示をしている。無理に展示させてはいないが、展示しない子はいない。また作品を見て「おかしい」とか「変」とか言う子はみられず、お互いに認められている。
- 少人数のよさを生かしている。
- シリコン、コンクリート等、普段使わない材料だが、どのように手に入れ、どれくらいの価格か。
 - ・シリコン、コンクリートともにホームセンターで購入。シリコンは風呂場の目地を止めるようなもので、1 本 200 円ぐらいで 10 人分は使える。色はクリア・白・灰等いろいろある。画用紙に塗り、切り貼りして版画にもできる。下にアクリル絵の具を塗ってクリアを表面に塗るような使い方もできる。有害ではないが、付着すると後片づけが大変なので、ゴム手袋をし、眼鏡をつけ、汚れてもいい服装で作業させている。セメントは水だけ入れればよいものもあり、簡単に扱える。
- 形にすることが難しい風を表現するにあたり、子どもが集めた材料は、先生が指示したものなのか。また、イメージを形にするにあたり、素材・表現方法はどう広がっていったのか。試していくことで広がったのか。
 - ・材料は、昨年度先輩が作品づくりで使用している様子子どもたちは見ている。このようなものがつくられていたという積み重なった経験があり、子どもとの相談でその中から選択できるようにしている。別の題材においては、塗料によって発泡スチロールが溶けた経験をもとに、溶かして形づくったり、セメントの重さを覚えていて安定させるために利用したり等の姿も見られている。
- 材料の経験は、鑑賞の経験からも心の中に残っている。
- 風をどうイメージしたか、地域性、周りの環境とのかかわりが作品に表れてきている。普通、教師は「アドバイス」というところを、先生の場合は「相談している」とある。相談とはどのようなことを心掛けているのか。
 - ・13 人という少人数なので、どのようなことを考えられるのかはだいたい分かる。しかし一人一人違うので、どうしたいの？どうしたいの？と確認して話すようにしている。
- 個別指導のあり方は、直接話すということが大切である。

3 助言

- (1) 渡邊先生の実践から参考にしたい点として、次の6点があげられる。
- ・児童の実態を分析し題材の設定をしている。
 - ・乗り越えさせたい壁として自分なりのイメージをもとに材料を集め表現する力を伸ばしたいという教師の願いがある。
 - ・表現方法を限定せずに一人一人の感じたことや考えたことを形にできるような学習構想がある。
 - ・素材とのかかわりを深め、表現に生かせるような学習過程の工夫がある。
 - ・好きな場所に飾り、話し合う等、鑑賞の場の設定のよさがある。
 - ・児童を主体にして考えている。児童のあふれる思いから生み出す喜びを感じさせ、伝え合う喜びを感じさせている。児童の表現意図に応じた支援を可能にする教師の感性と専門性がすばらしい。
- (2) 「素材や表現方法との出会いを、表現の発展につなげる」ための渡邊先生の題材の構想を図に表してみた。題材の構想の段階で、このように図で考えてみると子どもの思いを生かした指導の要点と支援の方法が見つけやすい。



- (3) 指導要領(5・6年)の改訂から強調されている部分を意識して、授業実践がされていた。
- ・目標 「つくりだす喜び」「造形的な能力を高める」
 - ・内容 「感じたこと」→「表したいことを見付けて表す」「適した方法を組み合わせる」
- (4) 図画工作科で大切にしたいこととして
- ・材料との出会いを工夫し、学びたくなって学んだからこそ生まれてくる子どもの豊かな学びを生み出したい。
 - ・活動場所や材料・用具から授業を考えることができる。
 - ・外に現れるものとしての知識・理解・技能のみを求めず子どもの思いを大切にしたい。
 - ・子どもの内側には、発見や驚き、感動、乗り越える難しさも含んだ学ぶことのよさが獲

得され、それを見出すには教師に感性や対話する力が求められる。

- ・子どもの内側に生まれる造形活動を通した学ぶことのよさは思考・判断・表現力であり、生きる力につながるエネルギーである。また、今回のテーマである「つなげよう 自分らしく生きる未来へ」で育てたいエネルギーであると考ええる。



6b 分科会・栃木県・小学校(下都賀地区)

小学校分科会6b

素材や表現方法との出会いを 表現の発展につなげる

■起案者 丸山 真弓（栃木市立国府北小学校）

■助言者 谷仲 俊彦（栃木県総合教育センター）

■司会者 海老沼 真弓（小山市立小山城南小学校）

■記録者 石上 友理（栃木市立栃木第五小学校）

1 提案内容

児童が行う造形活動において、1年生「あわあわ いっぱい」という題材を取り上げた。目標としては、児童が満足感や達成感を得られるようにすること、想像力を活性化することを挙げた。2時間単元のうち、1時間目は用意しておいた泡を分け、子どもたちに実際に泡を触らせた。2時間目は導入で教師が泡のわたあめや雪を作って見せ、自分もやりたいという気持ちをかき立てた後、あわあわランドに入らせる。そこで、それぞれの異なった思いを表現できそうな素材(ストローやビニール傘など)を事前に考えて用意しておき、物と泡で具体物をつくるといった作業を行った。また、安全指導は時機を捉えてしっかり行い、作業に取りかかるよう配慮した。さらに作業の途中で鑑賞を入れることで発想に広がりをもたせることを意識した。そして、同じ素材を使っても子どもの思いはそれぞれなので、互いに尊重できるよう教師が褒め、全体に広げていった。

その結果、変形しやすい素材を使うことで自分の思いを試すことができ、導入を工夫することで子どもの意欲が高まった。さらに鑑賞を途中で入れることで刺激となり、さらに豊かな造形活動へと広がっていった。しかし、課題としては製作に夢中になり、記録用のトイカメラを使えなかったため、今後トイカメラ以外にも思いを伝えられる記録の残し方を考えていきたい。



2 参加者の意見

心が解放された題材だと感じた。幼いころ泥ダンゴを作っていたように、心を満たす時間を大切にしたい。さらに教師の肯定的な言葉かけがよかった。しかし、迷っている子への投げかけの仕方も工夫する必要がある。何がしたいのかを考えて、近くの子の作品を紹介してあげてもよい。

過去の実践では、トイカメラを使ったことがなかったので、使い方や利点を教えてほしいとのことだった。トイカメラは首にかけられ持ち運びしやすい。使えなかったのが残念だった。

3 助言

図画工作におけるねらいは、特性を理解し素材を生かした活動をすることで豊かな心を育むことである。今回の実践では、素材について教師自身が特徴を把握し実践してから選んでいて、よい素材を用意することができていた。また、そうすることで見通しをもって授業を行うことができた。さらに「あわとなかよくなる」という1年生にわかりやすいテーマで、たくさんあわに触れることができた。低学年のうちには物に出会うこと自体が学びになるので、触れたり見たりする時間を十分に確保できていてよかった。また、子どもたちがありのままであったこともよく、教師のリアクションや共感の仕方が上手で安心感と意欲をもたせる授業展開になっていた。

課題としては、食べ物だけでなく、さらに多くの発想をさせるためにストローなどの物は使わない方法もとってみるとよかった。1年生にとっては、泡を別のものと組み合わせるということは少し難しかったのかもしれない。



7a 分科会・長野県・中学校

小中学校分科会7a

素材や表現方法との出会いを 表現の発展につなげる

- 提案者 中平 紀子（小布施町立小布施中学校）
- 助言者 田中 好文（安曇野市立豊科東小学校）
- 司会者 沓掛 隆 （松本市立会田中学校）
- 記録者 久保田 充徳 （長野市立犀陵中学校）

1 提案内容

中学3年生では義務教育9年間の図画工作・美術で学んだことを生かして、最後の題材として卒業制作「夢」を行っている。素材選びから表現方法もすべて自分で考え決めるということをやっている。

遊び的な題材からスキル題材へ、そして最後に自分が表したいことに取り組んでいる。3年生はグラデーションマジックという題材で遊び的な題材、スキルの題材でグラデーションの作り方を習得、そして自分をテーマにして主題は自分で決めて作品作りを行っている。材料もすべて自分で用意するので、完成した作品はすべて一人一人違う。中学では学んでいないことも使いながら制作している姿を見ていると、造形遊びなど小さい時の経験が表現につながっていると感じる。

教師が生徒一人一人と相談会を実施し主題を明確にしている。生徒が考えていることを教師が知るということは大事だと思う。相談会の実施により、「表現したい主題がない」「表現したいことがわからない」と表現活動に入りにくい生徒も主題が明確になり、こだわりをもちながら表現できるようになった。また学年が上がるにつれ、既習の表現を使う題材を入れながら、学んだことを生かせる生徒を育てている。

ただ描きなさい、つくりなさいではなく、主体的に動ける生徒を育てたい。中学校3年間だけではできないことである。小学校で実践したことも生かしていくことを中学校でもやっていく必要がある。



2 参加者の意見

Q：卒業制作「夢」は、外に見せていく取り組みはあるのか。

A：学校内で展示している。

Q：相談しながら進めているということで、何時間かけて行っているのか。

A：30～40人を2時間くらいかけてやっている。3年生には十分自分の思いを話せる力はある。

Q：できたものが全部違うというのは、今までの積み重ねがないとできないと思う。一人一人違うと、支援が大変なのではないか。いい支援方法があったら教えてほしい。また様々な作品をどう評価しているのか。また生徒たちにどのような力をつけたいと願ったのか。

A：材料を用意するのは大変だが、ただ自分がやりたいことをやっているの、「どうしたらいいのか」「どうすればいいのか」という質問はない。評価については発想構想についてはもちろんだが、いろいろな面から評価できる。生徒自身でも評価できる。自分で課題を見つけ、自分で課題を解決するという課題解決の力をつけさせたいと思っている。

- ・9年間を視野に入れて授業を組み立てることがすばらしい。中学校の少ない授業時間の中で、挑戦されていることがすばらしい。小さい時の経験を生かしながら自分の思いに迫る学習がすごい。このような学習が広がっていくといいなあと感じた。
- ・このような自己決定できる自由というのは大切だと感じた。この年代でないとできない学習であって、深い意味合いがある。子どもたちが自分で決めて自分で制作を進める題材をぜひ続けてほしい。この実践は全国に紹介して欲しい。

Q：どこで子どもたちが今までの学びを振り返ったり、それを自覚したりしながら最終的に自分の夢を自己決定しているのか。そのもとになっているものは何なのか。

A：こう表現したいという願いからこの表現を選択するというのは、今までの学習の中で培ってきているものだと思う。

3 助言

素材や表現方法との出会わせ方、関わらせ方の部分によって我々の役目があると考え。

「場」について、与えられた環境であったり、用意されたりしたものの中から、子どもたちが気付いたり発見したり、さらには中から選択したりする力も含め、それが出会いの部分であるのかなと考える。それを用意するのが我々の仕事。関わりながら、活動しながら出会いが生まれてくる。

表現の発展につなげるには、素材から表現方法から気持ちや感情から自分自身のこだわりが出てくる。そして関わりの部分もある。表現をしていく部分は自己決定や自己実現につながる。

相談会については、発達の段階に応じてかわり方がある。個、集団、グループ、生徒同士の関わりもある。こだわりについては、自己決定である。

題材についても最終的に自分の中にあるテーマに合ったものにしていきたい。

課題解決の力についてであるが、解決していくためにどんな素材が必要か。表すためには何を表現していったらいいのか。「夢」といったときに自分の中でどんなものを持ってくればいいのか自分で決定していける教科ではないか。つけたい力もそこではないかと思う。自分の既習

を生かしながら新たなものをつくり出す。単なるくり返しではなく、それを生かして新たなものを生み出す。

幼保のときの素材を直接手を使いながら感触を確かめながらいじっている。そのような経験の部分が小学校中学校に生きてくる。つながってくる。

カリキュラムについては、つける力があってその力がどのように発展していくのか考えながら、単に題材を並べた配列ではないカリキュラムを作っていくべきだろう。

7b 分科会・東京都・小学校

小学校分科会 7 b

わたしをつくる

■提案者 林 小和子（立川市立第一小学校）

■助言者 室 恵理子（杉並区立方南小学校）

■司会者 菅原 亮（世田谷区立山野小学校）

■記録者 高松みき（調布市立飛田給小学校）

1 提案内容

平成 26 年度 12 月に行われた都図研大会北多摩大会より提案。北多摩大会では「わたしをつくる」をテーマとした。これは本大会テーマ「つなげよう自分らしく生きる未来へ」と同様の課題意識がある。造形活動は材料やつくり方の選択などの過程にこそ学びがある。そのことは自己決定や価値形成にほかならない。そのため、結果の作品ではなく活動から授業を見ていくこと、自己決定できる題材設定や主体的に取り組める環境づくりができるよう授業改善に取り組んだ。

成果として、授業の中で児童が繰り返し試す姿、材料を選択し発想を広げる姿、また鑑賞から自分なりの意味や価値を見出す姿が見られた。そこから、図画工作の学習活動によって生まれる自己決定・価値形成により「わたしをつくる」ことを確信することが出来た。今後の課題としては、児童の活動を見取り能力を捉える力を教師が培っていくこと、児童が発揮している力をいかに伝えていくかの 2 点が見えた。



2 参加者の意見

Q 表したいものを見つける力が大切だが、見つけさせるための工夫は？（長野県会田中学校 沓

掛先生)

A 投げかけ方は学年によって違うが、まずは子どもが興味をもちイメージをもてるような題材名。

次に材料の色や形を刺激にして発想を引き出すようにしている。

Q 活動の見取り方の工夫は？（神奈川県寺尾小学校 宮元先生）

A こどもと同じ目線で見ることが心がける。子どもと同じ目線でものを見るのと高いところから見下ろすのでは違うことを実感した。

Q ゲストティーチャーは一年にどれくらいの頻度で招いているのか？（栃木県戸祭小学校 斉藤先生）

A 地域の方や施設を活用している。特に地域に美術的な活動をしている方を見つけてお手伝いをお願いしている。そのパイプを市内に広げ人材を活用している。

3. 助言

実践発表の成果である、「主体的な学びを保障する授業設定」では子供の能力を十分に働かせるように準備すること、「子どもに寄り添う視点」では児童の能力を捉える視点を教師がもつこと、この2点は図画工作を教える上で大事なこと。図画工作科のねらいは、結果としての作品をつくることではなく、造形活動の中でどのような人間形成をしていくかということ。そのためには、教師のねらいに沿って子どもが能力を発揮しているか、育てたい力を伸ばしているかを見取ることが大事。児童にアンケートをとると子供自身が図画工作の学びを自覚していることがわかる。図画工作の学びを明確にしながら、わかりやすく保護者や地域、学校の外に発信していく必要がある。



8a 分科会・千葉県・中学校

中学校分科会 8a

「個の表現から協同制作へ」 ～自分らしい色と形の表現の工夫～

■提案者	石毛 千博	(銚子市立第一中学校)
■助言者	平野 正春	(千葉市立緑が丘中学校)
■司会者	齊藤 浩美	(銚子市立銚子中学校)
■記録者	佐久間宏子	(旭市立第二中学校)

1 提案内容 題材名「ドローイング100 7cm×7cmの世界」(中2)

楽しく美術の活動に取り組みながら、個々の持つ本質的な感性を働かせ、目に見えない感情やイメージを、色彩や形のもつ性質を理解しながら表現する力を育てることを目的とした。美術の制作過程の中で、自由な発想力と対話を通じた言語活動が期待できる場面はいつか、と考えた時、それはアイデアと具体的な表現活動が同時に行われる場面ではないかと仮説が成り立った。1時間の中で「発想と表現と評価」が繰り返され、新しい発想と思ひもよらない色彩の広がりが展開されたとき、生徒は驚き、自分らしい表現を生み出そうと主体的に授業に参加する。画面は極力小さくし、主題は広く大きなものを設定する。小さな画面に簡単に表現でき、失敗や間違いが無いことで、安心して表現しようとする事ができた。この題材の大きな特徴として、作品を持ち寄ることで表現を深めることができた。

＜ 実 践 ＞

①材料・用具 7cm×7cmのケント紙

ポスターカラー、ボールペン、
ネームペン、クレヨン、スポンジ

②テーマ 「私の心」

制作に入る前に、自分の心の状態を
右の表に書き出してみた。
その中から3つのイメージを表現した。

動		
		ポジティブ
静		

②テーマから発したイメージを3～4枚制作する。

あらかじめ7cm×7cmに切られた白いケント紙に、イメージを直感的に色と形で表現する。1年生で学んだ混色による色作りや色の構成、グラデーションを用いる。モダンテクニックと呼ばれるドリップングやバチックなども効果的に取り入れる。

④用意された100マスに入れる。

四つに区切られた表と同じ位置にできあがった作品を並べる。すぐに大きな画面の一コマとな

り、新しい存在感と価値を生み出す。1つの作品を通して他者との共感が生まれる。

⑤100マスが埋まり完成する。クラス全員で鑑賞する。



2 参加者の意見

Q：小さな画面に抽象表現をしているが、この題材に入る前に何かイメージトレーニングを行ったのか。

A：1年生での平面構成で、「しっかり系」（真っ直ぐな線やコンパスの線）と「ぐにゃ系」（自由な線）の2つの線による画面構成を行った。ポスターカラーによる彩色では好きな色を選ばせ、「仲のよい色」でぬるようにした。完成した作品にタイトルを付けて鑑賞した。自由にぬった色からイメージする授業を行っていた。

Q：下描きをしないで描いていたなど、とてもいいと思う。この制作が3年生にどのように生かされ、つながっていくのか、今後の計画は。

A：3年生の最初に「自分の心」という題材で、心を抽象的に表現しようとする取り組み。
立体で、ぶら下げる作品にしている。

Q：一人3枚～4枚制作するが、100マスに置くときに他の人と位置が重なってしまった場合はどうするのか。

A：その場合はお互いに話し合うように伝えている。その結果置いた作品をチェンジしてもかまわない。そういう場面が言語活動なのかなと思う。

3 助言

この提案を聞き終わった後で、たいへんさわやかな気持ちになった。美術っていいなあと思えた。

〈 授業づくり4つのポイント 〉

- ①生徒が失敗を恐れずに自信をもって表そうとしている授業。
- ②写実性だけにとらわれずに、自分なりの価値を求めて楽しく自己表現している授業。
- ③表現することが何よりも楽しいと感じ、そういう姿勢が見える授業。
- ④教師の価値観と生徒の思いが食い違っていない授業。

今回の提案の中には、すべて盛り込まれているように思う。学習指導要領の共通事項や言語活動について、それらをクローズアップした取り組みというより、授業の中に自然に含まれていた。生徒のつぶやきの中に思いが見えてきて、教師が「そうだよね」と言葉をかけていて、（授業の動画を観て）ざわざわした教室だがそれは無駄におしゃべりしたり違うことをしてざわざわしているのではなく、質のよいざわつき感であった。リラックスしたムードで手が動き活動できている。授業の中にいくつかのキーワードが見えてくる。言語活動、表現と鑑賞と評価、共同制作、抽象表現。幼児期のなぐりがきを経て、○まる△さんかく□しかくを組み合わせで何かに表すことが、抽象表現の入り口を開けている。

7×7の小さな画面に先生と生徒の思いのやりとりが垣間見えている。だから生徒は生き生きと創作活動ができている。そして、「知らぬ間に共同制作」。最初からみんなで共同制作するぞ！で

なく、集まってみたら、「いいじゃん！すごいね！不思議な感じだね！」となる。クラスの間でつくっていく。他の題材では悩んでしまうこともあるが、大きな魅力をもった題材であった。

8b 分科会・栃木県・中学校(芳賀地区)

中学校分科会 8 b

つながり・広がる思いと創造的な技能

- 提案者 大木 尚人 (真岡市立真岡中学校)
- 助言者 稲葉 守 (茂木町立茂木小学校)
- 司会者 小池 浩行 (市貝町立市貝中学校)
- 記録者 秋山 幸子 (真岡市立大内中学校)

1 提案内容

机上で考えた、はじめての構想やスケッチが、様々な素材に出会い、姿や性質を変えていく。創造的な技能は、生徒の制作への「思い」があってこそ「発想」がふくらみ、創造的な技能の高まりや広がりにつながると考える。「思い」を奮い立たせる題材があり、その題材への「思い」が生徒のおもしろい「発想」を生みだし、その「発想」でいっぱいになった体をはじけるように様々な試行錯誤を繰り返し「創造的な技能」を高めたり広げたりしていくと考えた。



2 参加者の意見

- ・3年目のトライということで、来年はどのように考えているか。
- ・3年間を継続して取り組んだ教材で、1年目の「ゆるキャラ」は伝わりやすいものあり、2年目では何を作ろうとしているのか伝わりにくくなったとある。そこで、3年目はどちらを大事にするかの判断の根拠(決めて)となったことはどんなことだったのか。

- ・「8のついたキャラクター」について、何を伝えようとしているのか分からない作品も、思いが書かれた文章が添えられていれば、思いが伝わってくる。万人に伝わらなくても自分が「こういうふうにした」と思っているのならば価値があるので、とても好きな作品である。

3 助言

芳賀地区では、各学校様々な素材を用いた作品づくりや表現方法を工夫した作品づくりに取り組んだ。紙粘土や木材、金属、焼き物など立体造形を中心とした様々な題材の工夫や開発が見られた。また、鑑賞の授業の中で素材に焦点を当てた授業や美術室の環境整備の充実にも取り組んだ。

キャラクター制作の題材を3カ年継続して取り組んだ発表では、テーマや扱う素材の提供の仕方を工夫改善しながら取り組んだ。生徒たちにとって、キャラクターデザインは興味関心が

高く、意欲的に取り組める題材であると思われる。扱う素材を紙粘土や針金などを中心とすることにより、特に作品の量感や動勢に焦点を当てた作品作りとなったのではないかと。また、完成作品を校内の様々な場所に置き、写真撮影するという取り組みも、周囲の空間と立体作品の関係性を考えることになり、面白い取り組みであったと思う。

現在、様々な素材が手軽に手に入れることができるようになり、また描画材や用具の進歩により、様々な表現方法が見られるようになってきた。新たな素材や表現方法との出会いが、生徒の表現の発展につながるので今後とも一層研究を深めてほしい。

9a 分科会・神奈川県・小学校

小学校分科会 9a

高学年児童が絵に表すことの魅力を再発見できる題材をめざして ～表したいことを見付けるための効果的な指導と評価～

- 提案者 笠本 健太 (横浜市立西寺尾小学校)
- 助言者 瀧澤 優子 (横浜市立西寺尾小学校)
- 司会者 吉田 岳雄 (横浜市立二俣川小学校)
- 記録者 井田 善之 (横浜市立小机小学校)

1 提案内容

6年生の子どもの「絵に表す」活動における表したいことを見付ける指導と評価の工夫

本提案では、絵に表す指導において、発達段階により、自分の表現に対する自信を失っていく傾向のある6年生の実態を取り上げ、指導と評価の工夫を行った。そして、授業実践から「表したいことを見付ける指導と評価」についてその有効性を検証した。その結果、97%の子どもが、表したいことを見付けることができていた。さらに、効果的な指導の方法を分析したところ、表したいことを見付けるためには、友達や教師、保護者との対話、言語活動が役に立つと答える子どもが多く、有効な手立てであることが分かった。さらには、表したいことを見付けることは、子どもにとって表現する喜びや楽しさを味わうことにつながっていくことが分かった。



2 参加者の意見

- ・参加者：子どもをみとるときに工夫している点は？
- ・参加者：「考えを寝かせる」ということはどういうことか。
- ・提案者：みとるタイミングを最初から考えて授業を設定している。教師が子どもの姿をみとる時間(タイミング)を保障することが大切であると思っている。評価規準でできるだけ具体的な言葉で表し、子どもの姿をイメージして授業をつくるようにしている。「寝かせる」ということに関しては、アイデアは何か別のことをしているときにふっと思ひ浮かぶ時があると自分自身が日々感じている。ウェアラス(Wallas,G)が何かを思い付くとき「孵化期」というものがあると言っている。子どもも、いきなり画用紙を渡されてかいてみようと言われても難しいところがある。少し時間を空けて、イメージできる時間をつくるといったことからじわじわ表したいことを見付けられるようにしていくことが大切であると思う。
- ・参加者：学年が上がるにつれて表現も豊かになるだろうと思ってしまいがちであるが、実は精神的に発達すると同時に逆に表現が停滞することがある。これを知っていることがとても大切だなと思う。表したいことを見付けられるようにする、子どもたちが表現しやすい材を選ぶといった指導の工夫が大事である。実態に合わせた指導がとても大事であることを改めて感じた。
- ・参加者：「子どもが気付くことは教えすぎない」とあったが、逆に言えば、子どもが気付かないことはしっかり教えることかなと思う。どの辺が「子どもが気付くこと」なのか、どの辺が「教えどころ」なのか、子どもに「気付かせたいこと」、「教えること」はどういうところにポイントを置き、題材を設定していけばよいのか。そして、「指導と評価の引き算」とあったがそこももう少し教えていただきたい。



- ・提案者：校内の研究の中で、子どもが色板を並べる活動をした。導入で「並べる」ということを教師が示すべきかどうかということが話題になった。私も「これは教えないと授業ではない」という思いがあって伝えていたが、そこで示してしまうということでは、子どもが自分で見付けたという瞬間を奪ってしまうということにつながるのではという話が出た。そうしたことから、そこは言わないようにしようと本校(西寺尾小)では話された。しかし、それではねらいを達成できないということから引き算と

いう考え方につながった。できなかった子に対してどうしたらいいかということで、個に合わせて指導していくようにした方がいいのではないかとということで学校としては取り組んでいる。できない子に対する指導は、全体指導にはしないということ。全体に本当に必要なところだけを残そうというのが引き算ということです。

- ・参加者：横浜市は、図工は学級担任が指導するということもあり、指導に苦手意識をもっている先生が多い。図工は一人ではできないなと感じる。子どもたちに豊かな表現活動を実現するためには、教師同士のチームワークが必要で、学年で教材研究をして子どもの活動を想定することが必要だと思う。それを子どもにすべて教えてしまうのではなく引き算していく。子どもに伝えるのはその中のエッセンスだけにしておこうというのが大事だと思う。その実現にはチームワークが重要だと思う。栃木の皆さんのチームワークある研究がとても参考になった。横浜でも来年そのようになればいいと思った。

3 助言

分科会のテーマを、子どもたちが表したいことを見付ける、その見付けたことを大事にしながら自分の思いを表現していく、そこに楽しさの再発見につながっていくことが見え隠れしているのではと、笠本先生が自分なりに捉え直している。日々の教育活動の中では、様々なことを巻き込んだ中で子どもたちを見ている。そこで、図工を通してどんな子どもに育てていきたいのかということをお大事にして日々取り組んでいることと思う。今日の戸祭小学校の授業の公開に関しても、公開する一時間をつくるために日々がどれだけであったか、ということに価値が沢山あるのだと思う。授業を見ると「ここをこうした方がいいのでは・・・」と気付くことは山ほどある。しかし、今日の授業をつくるためにどんな話合いや工夫をして、子どもに語りかけてきたか、そして、学習を子どもたちが学習として成立するように教師が働きかけていたかということをお大事にしていきたいと思う。

表したいことを見付けるといったことの中に、例えば題材名一つとってみてもいろいろある。笠本先生は6年生の授業で「やった！ついにできた！」という題材名を提示している。時として「運動会の絵」、「遠足に行った絵」といった題材名で投げかけることもある。しかし、「やった！」という思いを表そうとしていることと内容は変わってくる。子どもたちに投げかけるとき、説明的なものはあまり必要なく、題材名一つでも、子どもが見付けられるような投げかけをどこまで吹き込んでいくことができるかということが大事な点であると思う。この題材で大事にしたいことを教師自身が思っていると、投げかける言葉一つ一つが大きく変わってくると思う。

評価規準の話があった。図工は、子どもの活動している具体的な姿の中でみとっていく教科である。具体的な内容を想定できなければ、教師は何をみとっているのかという漠然とした授業になる。「この題材ではこんな力を身に付けさせたい」ということを教師がしっかりもっていないといけない。

「ねらいを明確にする」、「教えすぎない」ということ。そこは注意していきたい。授業の中で考えられることを想起し、まずはたくさん出しておかなければ引くことはできない。な

ぜ今、目の前の子どもにこの材料かを問う中で、子どもたちに提示することがすっきり見えてくる。ねらいもおのずとはっきりしてくる。この授業校の様子を学ばせていただいて来年は神奈川も頑張っていきたいと思っている。

9b 分科会・栃木県・小学校(上都賀地区)

小学校分科会 9 b

一人一人のよさやおもしろいがひびき合う造形活動

- 提案者 宮崎 直美 (日光市立所野小学校)
- 助言者 大貫 敏 (上都賀教育事務所)
- 司会者 久武 孝弘 (鹿沼市立みなみ小学校)
- 記録者 小林いずみ (鹿沼市立中央小学校)

1 提案内容

造形活動とは、体全体を使って表現することによって、表現しようとする一人一人のおもしろい形や色となる活動であると考え。授業の中で、自分のおもしろいを主体的に表現し、そのよさやおもしろいがひびき合う造形活動をどのように展開すればよいかを、「学び合いを重視した授業展開」と「再発見につなげる鑑賞」の2つの仮説を立て、検証した。

仮説1 学び合いを重視した授業展開

(1) 題材について話し合い、自分のイメージを広げる

- ・ 題材に対する自分のおもしろいを具現化する「発想」を大切にするために、自分のイメージを形と色で表現することへの支援として、対象にアプローチするための鑑賞の時間をとった。子どもたちが対象を見つめ、自分のおもしろいや考えを交流し合うことで、題材に対しての「発想」が膨らみ、広がりや深まりが見られた。
- ・ 子どもたちの言葉を大切にしながら、教師の意図する題材のねらいにつなげていく話し合いを行った。イメージを広げたり見方を変えたりするための有効な手立てとなり、児童は自分の表現したいものに合った材料を選び、色や表現の仕方を決めてのびのびと作業をすることができた。
- ・ 一人一人が自分の感じたおもしろいを表現した作品について、制作途中で鑑賞し合う時間をとった。

友だちの様々な表現方法に出会い、自分が気付かなかったことに気付くことで表現の幅が広がった。

(2) 試行錯誤と刺激の場を取り入れる。

- ・ ペアやグループでの活動を取り入れた。自分の表現に加え、友だちの表現を間近で見ることで、さらに自分の作品について試行錯誤し、いろいろな表現を楽しむことができた。

- ・ 試行錯誤する手立てとして、話し合いや材料の提示、鑑賞を行った。その結果、自分の表現したいイメージとそれを支える創造的な技能に刺激が与えられ、より質の高い表現が可能となった。
- ・ 版画では、各学年で版画の新しい技法を学んでいくが、どの学年においても色を変えて何回か刷ることを行った。色の違いによって作品のイメージが変わることに気付くことができた。
- ・ 校内に児童の作品を一堂に展示することで、さらに新しい作品が生まれた。また、展示された自分の作品や友だちの作品から受けた刺激が、次の造形活動につながっていった。

仮説2 再発見につながる鑑賞

～見方を深める手立てを工夫する～

- ・ 意図的に鑑賞の場を設け、五感を通して、お互いの作品について話し合う時間を確保したことで感じ方や見方が深まった。
- ・ 美術館を利用した鑑賞の授業を行ったことで、鑑賞の力が養われ、次の造形活動に生かせる力を育むことができた。



2 参加者の意見

○横浜市立小机小学校 井田先生

- ・ 「木々をみつめて」の実践例の中で、教師から道具や色を指定して描かせている様子が見られた。教師からの投げかけもあっていいのだろうが、やはり児童が自分で試し、自分で見つけていくことが大切なのではないか。

(提案者) この実践例では、教師が、まだ経験したことのない物と児童とをつなぐ役割をした。

○横浜の小学校の先生

- ・ 自分の表したいことを表現することが図画工作の特徴であると思うが、図画工作科の中で、特に学び合いが有効な場面とはどんなときだと考えるか。また、学び合いが適した学年というものはあるか。

(提案者) 試行錯誤する場面で、有効である。また、どの学年においても大切な活動だと考える。

○宇都宮市立瑞穂台小学校 秋山先生

- ・ 特に低学年では、見せ合ったり話し合ったりする学び合いの時間を取ることは大切だと思う。
- ・ 紙版画で色を変えて何度か刷る場合、やはり刷りに使う色は明るい色から暗い色（黒など）の順にする方がよいのだろうか。

(提案者) 刷りの順番について一般的にはそうだが、黒で刷り拭き取った後、別の色で刷っても味わいのある作品になる。

○宇都宮市立戸祭小 渡辺先生

- ・今回、6年生の提案授業では、浮世絵鑑賞の場で学び合いを取り入れた。自分のおもいを友だちに伝えることでさらに作品を楽しむことができたり、友だちのおもいを聞いたことでいろいろなものの見方・感じ方があることに気付いたりすることができたと思う。



3 助言

(1) 仮説について

①イメージを広げる話合いについて

- ・言語活動の意義を理解し、効果的な話合いや交流の場が設けられていた。
- ・共通事項を意識させ、資質や能力を具体的に育成するような言語活動の充実が見られた。

②試行錯誤の時間について

- ・表現の過程において、試行錯誤することは自分のおもいをふくらませる大切な時間である。
- ・ペアやグループなどでの活動の場や時間の設定がされており、友だちからの刺激を受けながら十分に試行錯誤しながら表現活動を行うことができていた。

③表現と鑑賞について

- ・表現する（つくる・かく）ためには、鑑賞する（みる）ことが大切であり、制作途中や完成した作品の鑑賞を意図的に入れたことで、一人一人のおもいの広がりが見られていた。

④美術館との事業連携について

- ・学校と美術館の特徴を理解し、それぞれの持ち味を生かした活用をすることが大切である。
- ・授業の中で鑑賞する活動を十分に行っておくことや、事前や事後の扱いも大切である。
- ・有意義な鑑賞活動ができるように、学芸員と十分な打ち合わせを行うことも必要である。

(2) 課題について

①一斉指導の難しさについて

- ・児童の実態をよく理解し、題材のねらいに照らし合わせて適切な指導形態を取り入れることが大切である。

②教師側の個人差について

- ・教師側からの押しつけにならず、児童一人一人のおもいを考えに寄り添いながら支援していくことが大切である。
- ・子どものおもいに寄り添った具体的かつ適切な声かけを行っていくためには、共通事項の確認と教材研究が大切である。
- ・教師は、児童にどのような支援が必要になるかを理解するために、事前に作品を作ってみるとよい。
- ・情報や意見の交換をチームで行うことがとても大切である。学年やブロックで教材研究を行うことが効果的である。

10a 分科会・東京都・中学校

中学校分科会 10a

発見と気づきから新たな見方を生み出す鑑賞



- 提案者 福田 龍郎 (東京都杉並区立中瀬中学校)
- 助言者 中村 一哉 (東京都府中市立府中第五学校)
- 司会者 中村 みどり (東京都武蔵野市立第六中学校)
- 記録者 濱脇 みどり (東京都西東京市立青嵐中学校)

1 提案内容

提案は、実際に行った鑑賞授業を再現して、写真作品（杉本博司『劇場』）をスクリーンに投影し、参加者が生徒と同様に画面を静かに鑑賞することから始められた。内容は【研究の経緯、提案内容と分科会テーマとの関連、題材の内容と題材設定の理由、成果と課題】について。

（研究紀要P. 74 参照）

2 参加者の意見

Q. 写真の鑑賞実践は珍しい。2×2mよりもっと大きいスクリーンで、部屋も広くしては？
この後（表現活動への）展開は？

A. 体験という意味では大きい画面だとさらに効果的となるかもしれない。次の展開としては、モノクロで光と影への意識を生かした表現題材を行いたい。

Q. 付箋「発見」「意見」という言葉の違いの意図は？ また、シェアの仕方は？

A. 「発見」＝「何かを見つけた」、「意見」＝「それをどう位置付けたのか」ということ。
全体で、指導者が取り上げる形でシェア。席は変えず、グループワークではない。

Q. 作品や作者の意図について、説明したのか？

A. 一切していない。しかし、作者の意図については、同じシリーズの写真を複数見せることによって気付かせたかった。感想から意図に気付いた生徒がいたことが分かる。

司会. 具体的にはどのように気付いたか？ 時間の経過については？

A. 明暗を意識した。「白い光が主役」という発言。時間についても意識していた生徒がいた。時間とか空間のとらえ方がポイントだと思う。

Q. この作品を選んだところが良い。事実と考えを書き分けることが苦手な子供の実態に対し、書き分けさせるための工夫はあったか？

A. 特にない。実際に張られた付箋を見ることによって、生徒の感じたことや考えたことが整理され、違いが明確に意識できたのではないかな。

司会. 2, 3年の感じ取り方の違いについては？

Q. 対象作品は、発達段階から3年生がふさわしいとあったが、3年間のうち、どのくらいを設定しているか？ 能力がどのように変化してきたと考えるか？

A. まさに研究途上です。1, 2年は、見えたものそのものに反応。3年はそこから発展させ、自分の感じ方に深められる。このことに注意して深めていきたい。

3 助言

提案者の本題材の実践および発表は、これが3回目であり、1回目時の「作者の意図に触れずに表現主題に迫れるのか」との問いに対し、直接、意図に触れずに行う鑑賞授業の在り方に挑み続けている。本日の提案は、そのまとめととらえている。本題材は、過去に写真家としての経歴がある授業者の写真とのかかわりの中でできているものである。



本日の提案にどのようなヒントがあるか。2つの仕掛けと1つの視点について述べたい。

①作品をスクリーンに投影し、鑑賞者を劇場の中の一人として作品に向かわせている。これは対象としての「作品」との距離を意識させず、直接、鑑賞者に作品の表現主題に入り込ませるという仕掛けである。導入の工夫は重要であり、一つの作品との出会いの工夫例である。

②「発見・気づき→新たな見方」という展開が明確に位置付けられた授業だった。一人一人の自由な見方から始まり、交流することによって見方を広げ、そこから新たな自分自身の見方の構築がなされている。同類の作品を見ることで類似点や相違点の比較を感じさせた仕掛けにターニングポイントがあり、その過程で鑑賞の能力の深まりが得られたことが、ワークシートの記述から感じ取れる。

③2年, 3年の異学年で同一授業をしたことで、発達段階による鑑賞の能力の違いが明らかとなっている。特に、3年生が共通事項から価値を生み出している点が顕著な点で、今後、時期や鑑賞作品などを変えながら、このような比較を続け、分析していくことで鑑賞の能力の深まりについて研究していくとよい。そのような研究の視点を示す点で、貴重な発表だっ

た。

10b 分科会・静岡県・中学校

中学校分科会 10b

鑑賞から表現へ 表現から鑑賞へ ～自らつくりだす喜び～



■提案者	後藤亜規子	(浜松市立中部中学校)
■助言者	内田いず美	(浜松市立蛸塚中学校)
■司会者	宮内 真実	(浜松市立積志中学校)
■記録者	清水 真紀	(浜松市立南部中学校)

1 提案内容

浜松市立中部中学校は浜松市美術館と隣接しており、その立地条件を生かして教育活動の中で美術館を訪問し、多くの鑑賞活動を行っている。鑑賞教育の充実により、作家の作品およびその技法や自分の思いを語り合う活動へと関心の高まりがみられ、教育効果の手ごたえを感じている。今回は、校内美術館を開催する活動である。鑑賞者と表現者の両面で美術を学んできた生徒に企画・演出する視点を新たに与え、鑑賞と表現をつなげ、①鑑賞から学んだ色彩や形、思いを自らの作品に生かす楽しさ②自らが生み出した作品を他者に理解してもらう喜びを提案した。

ローランサン展を鑑賞した後、自画像の制作に取り組み、次のエリック・サティ展では、学芸員から企画について学んだ。作品をより魅力的に企画・演出・展示する体験型鑑賞を行った。作品を他者に見てもらうことで、それまでの作品アピールや感想を伝え合う一方的な鑑賞にとどまらず、互いの作品のテーマについての鑑賞がより深まり、作品の色・形・技法の点から制作者の思いを味わい、他者に理解してもらええる満足感や自己肯定感などの高まりがみられた。

今後も中部中ならではの鑑賞活動の実践を深めるとともに、どのような地域でも本物に触れることのできる鑑賞活動を考え、実践していきたい。

2 参加者の意見

・ 見せる展覧会の選定や、生徒につけさせたい力はどのようにしているのか。

→ 選定はしていない。企画展はかなり先まで決まっているので学校の自由にはならないが、学芸員と連携し、企画展ごとに各学年の視点を与えて鑑賞をさせている。本物に触れ、作品と巡りあい感じることを大切にしている。

・ 鑑賞授業を増やすことで表現の時間の確保はどのように考えているか。

→ 中部中は立地条件を生かし、学級活動や総合的な学習の時間を使い、美術教員以外も生徒とともに美術館を鑑賞しているため大幅な表現の時間が削減されているとは感じていない。また、

地域の水墨画・篆刻の先生など人材を積極的に活用し、本物に触れる機会を大切にしていきたい。

- ・生徒作品からは技能以上に、自分の「思い」が表現されていると感じた。そういう指導をするにあたり難しいと感じている部分はどこか。

→描写力は3年生までにつけさせたい。今回の6時間では自画像の描写や描き込みはやり切れないので目標を「思いの表現」に絞って行った。

- ・校内展や校外展は大切な取り組みだと思う。今後は主体的に美術館にアプローチする視点を持ち、本物の体験をする素晴らしさを内外に提案して欲しい。鑑賞によって発達段階に応じて、楽しむだけで終わらない鑑賞教育が情操の発達に大きな役割を果たすことを、先陣を切って示して欲しい。頑張ってください。

3 助言

中学校と美術館の距離は、発表した宇都宮大学附属中の教室から正門までよりも近い立地。3年間継続して美術館とかかわれることで1年では楽しみながら、2年では目的意識を持ち、3年で表現に生かしたり違う見方を知ったりなど3年間で育てることができる。



29年度にはこの中学校は小中一貫校となる予定である。現在もその準備として小学校にも指導に行っている。今後はもっと長いスパンでの実践も可能になってくる。また、市美術館は館長をはじめ複数の教員が指導主事・学芸員として勤務しているので、学校との連携が取りやすくなっている。学校と美術館の連携がより身近にできていくと良いと思う。

本教諭は教員6年目である。生徒にとって今までの集大成の題材であるとともに、教師にとっても指導の集大成である。そのため、発表内容として盛りだくさんの実践になり、細部の指導が今後の課題となっている。今後は、生徒につけさせたい力を精査し、意図的な鑑賞を深めていく必要がある。今回の研究は、中学校が工事中だったこともあり、環境面で適切な展示場所の確保が難しく苦しい面があった。様々な課題もあるが、実践を進める中で生徒の大きな成長を実感することができ、教師として指導を楽しむことができている。生徒も作品をつくり、協働して企画していく中で今までと違う見方の満足感を得ることができたことが、提案資料に表れている。教師・生徒の両方が楽しく充実した実践となっていることが一番である。今回の実践発表に向け、市内のいろいろな先生方から協力や助言を受けた。個人の発表であっても、浜松市の美術科として、一緒に授業を作っていく、地域としてもやりがいのある研究だったと思う。このような研究の機会を与えていただいたことに感謝し、今後も地域としてさらに研修に励んでいきたい。

11a 分科会・千葉県・小学校

小学校分科会 11a

自分なりの思いを追求し、つくりだす喜びを味わう造形教育 —児童が主体的に活動できる題材の開発を通して—

- 提案者 稲本 圭治 (千葉県匝瑳市立椿海小学校)
- 助言者 小高 玄一 (千葉県千葉市立坂月小学校)
- 司会者 飯島 裕章 (千葉県匝瑳市立八日市場小学校)
- 記録者 井無田 浩 (千葉県旭市立嚶鳴小学校)

1 提案内容

平成25年度から校内研究として取り組み、児童が主体となって活動し誰もが取り組める幅の広さと個々の思いや願い、技能に応じて深めることのできる題材の開発を中心に研究を進めてきた。平成26年度には第65回千葉県教育研究会造形教育部会研究発表大会の会場校として授業を展開した。2年生の授業実践「まほうのおかしランド」では「どのように表現するか」に焦点を絞り、色水をつくり吸水性樹脂を加えゼリー状に固めたものでお菓子をつくる活動を行った。友だちと交流できる場を意図的に設定し、自然な形で互いのよさに気付かせることができた。事前のアンケートで何をつくったらよいか思い浮かないと答えた児童が、球状のゼリーをつくることができた。



2 参加者の意見

子ども同士の関わりについて再度説明してください。(司会者) 1本1本のペットボトル毎に色々な色をつくらせました。混ざり過ぎて灰色になっても「新しい色ができた」と感激して名前をつけていました。ペットボトルの置き場と活動の場を分ける等子ども同士が自然に関われる場作りをしました。(提案者)

色水遊びで終わらないところが面白いと思います。樹脂にたどり着いた過程を教えてください。(宇都宮市教育委員会 宇賀神) 色つき容器にカラフルパフェをつくる活動をベースにしています。(提案者)

宝箱の大きさを教えてください。また、児童へのアンケートで「発想」と「思い」の違いを教えてください。(宇都宮市立上河内中央小学校 岩崎) 宝箱はプールに入れる塩素をまとめ買いする時の段ボールです。「発想」は思いつくこと、「思い」はこんな風にしたいと思うこととしています。(提案者)



3 助言

題材開発に重点を置いた研究だが、本大会に合わせて題材との関わりに焦点を当てて発表していた。灰色の色水を見て大人は「濁る」と思うけれど子どもたちは「新しい色」として名前までつけてしまう。子どもの発見であり、色味について自然に学んだということである。

子ども同士が自然に関わったり一人で集中して取り組んだりできる場を設定してあった。一人の独り言が広まっていくことも関わりであり、教師が見取るポイントである。30名全員を見取るのは難しいのであれば、関連する箇所に絞ってもよい。よい発言を繰り返したりわざと小さい声で認めたりしてもよい。

5名の苦手な児童が変容したことでよいクラスになっていくであろう。教師は学習の目標を追っていくが、児童の手で進めて行かれるとより広がりを持てるようになる。子どもは友だちの横を通っただけで技やアイデアを盗むものである。「真似される程よい作品なんだよ。」等と声かけをしたい。

次期指導要領の目玉の一つは「アクティブラーニング」である。課題を発見して個人や共同で解決していくのは美術教育の得意分野なのでここで力を発揮させ、教科としての存在をアピールしたい。

11b 分科会・栃木県・小学校(佐野・足利地区)

小学校分科会 11b

自分の思いや考えを豊かに表現できる子の育成 ～見て、感じて、伝え合う活動を通して～

- 提案者 関根 毅 (足利市立筑波小学校)
- 助言者 宇賀神 俊彦 (宇都宮市教育委員会)
- 司会者 久々宇 多美子 (足利市立葉鹿小学校)
- 記録者 清水 俊美 (足利市立桜小学校)

1 提案内容

図工は、好きで喜んで活動する反面、イメージできなくてどう表現してよいかわからないという児童の実態から、目指す子ども像を「(1) 自分や友だちの作品のよさを感じながら、自分の思いや考えをもって鑑賞の活動を楽しむことができる子(2) 表現する喜びを味わう活動を通して、基礎的な能力を培いながら主体的に取り組むことができる子(3)

感性を働かせながら、自分の思いや考えを豊かに表現することができる子」とし、研究主題「自分の思いや考えを豊かに表現できる子の育成～見て、感じて、伝え合う活動を通して～」を設定していった。そして、研究の視点を3つに絞り、研究をしていった。

視点1「表現と鑑賞のつながりを重視した授業構成の工夫」では、表現の制作途中で意図的に話し合いを持ったり、「みてみてタイム」をつくって、自分の作品に入っていた。

視点2「表現に必要な基礎的な能力の獲得を促す授業の展開」では、教師の師範をもとに児童が見て学び、自分もできたという自信を持たせていった。

視点3「感性を深めさせるための多様なアプローチの方法」では、クラス全体・ペア・グループなどで、伝え合う活動を行ってきた。視聴覚教材などを使って工夫したり、思いや考えを書きとめたりすることができるワークシートの活用も行ってきた。

幼・小・中の関連も行ってきた。幼稚園教育要領内容「表現」は、小学校の研究の視点(1)とつながっており、それは、中学校指導要領解説「B鑑賞」につながっていく。

研究の成果としては、視点(1)では、話し合う場や時間を意図的に設定したことで、自分の思いや考えを広げることができ、鑑賞する喜びを味わえた。視点(2)では、教師の師範・指導で、児童は見てまねて学んだことで、自信をもって取り組めた。活動の中で、基礎的なことを習得できた。視点(3)では、教師からのアプローチや友だちからの伝え合いで感性を深めさせられた。

課題としては、①児童の思考をより高めていくための鑑賞の取り入れ方②表現に必要な基礎基本の習得、定着を図るための題材の見直し③感性をより深めるための表現様式、技法との出会いや、学習カードのさらなる工夫があげられる。



2 参加者の意見

(1) 神奈川県横浜市立町田小 河田先生

・自分のつくった作品を鑑賞しあっているが、作家さんの作品はみたのか。

→校庭の風景や、地元出身の方の作品や地域や市の美術館に行って、鑑賞する時間をとっている。

(2) 千葉県八日市場小 飯島先生

・表現のための基礎基本の能力とは、こういった能力ととらえているのか。

→題材によって、かわってくると思うが、3年生で行った「長い紙を使って」では、ハサミの使い方や、どうやったら長い紙を作れるのか長い紙をどう組み合わせるとどういう形になるかを考えるための力と考える。授業をする際に、かわってくると思う。

(3) 千葉県椿梅小 稲本先生

・「師範」という言葉の意味は。たとえば、トイレットペーパーのしんの切り方は、師範であろうか。子どもが自分で考えてあみ出していくのではないか。安全面については、教えるが、あえて、師範としているのは、どうしてなのか。

→一方的な教え込みではない。子どもから出る物をいかして、思いつかない子には支援といった意味で、話し合いをしていく中でいいものを紹介して広げていった。

・「表現と鑑賞」とは、どういう認識をもっているのか。新たな認識・価値の獲得ととらえた場合どういうふうにしみこんで行っていくのか。

→表現のとまってしまった子を考えて場合、自分の作品で言葉をもらうことで、つなげていけるために入れていった。



3 助言

思いつかない子をなくす・できない子をなくす、といったことで、研究が進められてきた。今、思いつかない子が増えてきたように思われる。その理由に、ご家庭がとても熱心であることで、子どもが自分で決めることがなくなってしまうてきていることがあげられる。では、思いつかせるためにはどうすればよいか。鑑賞でインプットしていこうとなつて、今があると思う。低学年では、身近な材料までも鑑賞作品になっている。発想豊かなものが鑑賞になっている。中学年では、美術作品の鑑賞がある。活動のまとまりよりも、計画的な鑑賞を行っている。例えば、版画では、下絵の段階で見せ合うことが、自然な鑑賞になっている。導入・作品作りのきれ目・作品完成…と、意図的な実践の切れ目に児童の実態や題材も考えて、鑑賞を入れていってほしい。

「師範」という言葉ですが、演示・参考、という意味であろう。つまずきをするであろう子の援助をするためのものであろう。児童には、試行錯誤させながら見つけさせていきたい。失敗もあることだろう。怪我もあるかもしれないが、子どもに任せることが、図工の醍醐味ではないだろうか。じっくり任せていきたいものである。

美術作品を意図的に鑑賞させることは、子どもにインプットさせることである。感じ取る力をつくっていくことが、鑑賞では大切であろう。思いついても深められない子には、先生の問いか

け・ほめ言葉を言っていくことが大切であろう。形・色・質感、などで具体的にほめていってほしい。

12a 分科会・山梨県・中学校

中学校分科会 12a

「鑑賞って楽しい！」を生むために

～鑑賞活動の導入としての授業を考える～

- 提案者 秋山 菜穂 （都留市立都留第一中学校）
- 助言者 鷹野 晃 （中央市立田富北小学校）
- 司会者 窪田 真敏 （甲府市立城南中学校）
- 記録者 小俣 直喜 （山梨大学教育人間科学部附属中学校）

1 提案内容

本大会のテーマを受けて、主体的な鑑賞の授業を考えた。山梨にちなみ、葛飾北斎の「富嶽三十六景」を取り上げ、生徒同士の対話による鑑賞で授業を行った。自分たちが選んだ作品を紹介するために、ICTも活用した。「作品を見ることを楽しもう」「自分なりの発見をしよう」など、生徒にわかりやすく目標を示した。

1次では、主体的な学習にするため「発見のための三種の神器」（主体的な発見を促すため）を使い、主体的な発見に入れない生徒には、「みつけ」という鑑賞を促すヒント（視点の提示）を使い、班での話し合いなどを取り入れた。

2次では、見方を広げるため、各班が選んだ作品のプレゼンテーションを行った。プロジェクターを使ったことにより、部分を拡大するなどして示せたのでクラスで共有できた。

成果としては、生徒がさまざまな視点でたくさんの発見をしていたこと。意欲が高まり、感じたことを発言できたこと。ICTの活用により、情報の共有に加え、さらに発展が広がったこと。楽しく鑑賞ができていたことなどが挙げられる。課題としては、生徒同士の話し合いが盛り上がり、作品から離れてしまった場面があったことである。

考察として、三種の神器は、新たな見方、感じ方を発見する上で有効であったといえる。「主体的な発見」を促すための関連知識の提示については、要検討すべきである。

再考すべきことは、鑑賞における関連知識の提示、系統性を考えた鑑賞教材の検討、鑑賞における評価のありかた等であり、ここで議論していただきたい。

2 参加者の意見

*次の3つの視点について、グループ討議を行い、意見を発表した。



(1) 鑑賞における関連知識の提示

子供たちが作品を見て、自分なりの思いや考え、イメージを広げ価値意識を持つことが大切。場合によっては、関連知識は授業のあとの方で示した方がよい。最初にもってくると、子供たちの深まりが少なくなってしまう。また、知識ではなく、作品を見る視点を与えることが大事である。

いろいろな作品に関心を持っている生徒は、自分で調べるであろう。

作品によって伝えるべき内容、考えさせたいことが違う。重要なことは、どのタイミングで伝えるかということ。作品や作者について知識を持っている生徒もいるので、そのような生徒とうまくキャッチボールすることや、自分たちで調べること、社会科の授業などとの関連から深めることもできる。

作品をしっかりと感じ取ってから、作品の知識などを得ることがある。

(2) 系統性を考えた鑑賞教材

学年の段階を踏むという系統性であれば、1年生は具象的な絵画を、2年生は自由な見方ができる作品を、3年生は抽象的ななど、いろいろなことが受け入れられる作品が考えられる。

鑑賞の対象としては、浮世絵、ジャポニズム、印象派などの流れが考えられ、鑑賞から、表現の関連であれば、多色摺り版画の表現へと発展できるであろう。

(3) 鑑賞における評価の具体例

ワークシートの中に、友達のことを評価する項目を入れたり、活動の中で気付いた友達のよいところやメッセージなどを付箋紙に示すようにしたりするなどすれば、教師が気付かなかったことも見とれるのではないかな。

3 助言

若手の悩みに応えていただきありがたかった。鑑賞のあり方についてだが、われわれの目は本当に見えているか？ 実は見えていないという現実がないか？ 見るという能力は、現実を見てそれを解釈することであり、経験の中でつくり上げられるものであり、遠近法などの一点透視図法などで描いた絵も立体的に見えていないという生徒もいるようである。

見るということを考えたときに、見えるようにすること、見方や感じ方を深めるということが大事な学習である。美術の鑑賞の能力を育てる学習は、形、色、イメージでとらえる〔共通事項〕を視点として行わなければならない。授業を終えて、見ることが深まったときに、生徒は喜びを感じる。見たことによって、新しい価値が生まれたことが、「鑑賞って楽しい」、「創造活動の喜び」につながるであろう。見るという目と心をつくることが、美術の大切な時間であり、見えるという能力をつくり上げることも、美術の大切な役割である。

12b 分科会・栃木県・中学校(佐野・足利地区)

中学校分科会 12b

感じるままに あらわそう



■提案者	松島 克江	(足利市立西中学校)
■助言者	五十畑 透	(小山市立乙女中学校)
■司会者	清水 孝江	(佐野市立西中学校)
■記録者	岸 里美	(佐野市立北中学校)

1 提案内容

足利市立西中学校では学校を挙げて、言語活動を意識した授業に取り組んでいる。美術科としては、各学年に応じた「人と人との対話」「人と作品との対話」「自分自身との対話」を意識した鑑賞の授業を行うようにしている。

1年の「感じるままに あらわそう」と題された「アルルの部屋」の色塗りは、「どんな人が住んでいるのか？」を想像しながら行う。そのため、作品の細部まで観察しながら自己との対話を行うことができた。最後にゴッホの作品群を鑑賞する中で、初めてそれがゴッホの作品であることを知ることになる。その時生徒たちはほかの作品以上に関心を示し、部屋の配色だけでなくゴッホの人物像についても活発に意見が交わされていた。また、同じ絵でありながら違う印象になった作品を見ることで、友人の発表を聞き、認め合うことができていた。

各学年において、作品を模写するなどの「描く」作業を鑑賞に取り入れることで、作品に対する親近感を持ち、細部まで観察するということがわかった。しかし、作者の深い思いまで触れることができた生徒は少なかった。より深く作者の思いに迫る鑑賞にしていくことが課題である。

2 参加者の意見

色はインパクトが大きいものである。そのため、本取り組みにおける、モノクロの画面に色を塗るという行為は興味深いものである。モノクロの鑑賞を自画像の作品制作の導入として、鑑賞に取り入れてみようという別の課題へ発展させる意見が出た。

また、同じ課題でも、色を塗らせるときに「自分がここに住むとしたら？」というテーマで行った後に「ゴッホはどうだったか？」というテーマで取り組んでみると、違った切り口で自分との対話ができるのではないかという、課題に対する改善案が出された。

3 助言

1年の本題材から、2年の鳥獣戯画、3年の名画模写と成長段階に応じて鑑賞の計画を立て、工夫された鑑賞の授業を展開していると感じた。

美術科における学習指導要領の改善の基本方針の中にも、「自分の価値意識を持って批評し合

ったりするなど、鑑賞指導を重視する。」とある。本取り組みは、色を塗るという活動を通して自分との対話により、自分の価値意識を育てるものである。

教科のみならず、言語活動を意識した取り組みにより、一人一人感じ方が違ってよいのだということや、他者の表現や感想に共感できる雰囲気や認め合える土壌ができているということが活動報告からよくわかった。

13分科会・講演会・栃木県・高等学校

高校分科会 13

社会との関わりに着目した実践例

ーアートマネジメントの視点を取り入れてー

■提案者	野口 徳雄	(栃木県立足利南高等学校)
■助言者	林 香君	(文星芸術大学)
■司会者	船生 正興	(栃木県立宇都宮高等学校)
■記録者	米澤 あずさ	(栃木県立黒磯高等学校)

1 提案内容

社会との関わりを意識したアートマネジメントの視点を取り入れた取り組みについて



2 参加者の意見

大きな視点から美術教育をとらえなおす良い提案だった。アクティブラーニングの充実が必要とされているが、授業に対して消極的な生徒に、アートマネジメントの視点から働きかけることで、どう変わっていくのか。

一消極的な生徒に対しては、とにかく話をする。プライベートな話をしたり、造形要素の話をしたりする。生徒の身近なものであるファッションや文具のことや、将来のことなどを話していくうちに、美術のことを話せるようになる。そうしてお互いに共有するものが増えていくことが良い。アートマネジメントを意識することで、生徒と良い関わり方ができるようになったのではないと思う。生徒は、美術に対してだけではなく、美術の授業の中で自分の生活に対する考えが深まっていくようだ。

アートマネジメントについて様々な観点からまとめられていて、勉強になった。「美術を通して社会への出口を示す」「美術を通して社会と関わる使命感を持つ」とはどのようなことか。

一様々な校種で勤務していくなかで、小学・中学・高校それぞれとの違いは何かということを問われてきた。社会に対しての関わり方が違うのではないかと考えた。社会に近い教育の場である高校の役割が、出口を示すことだと考えた。使命感を持つということが、アートマネジメントの中では重要。日本では形態が先にあり、使命感が無くても動き出してしまふ。

3 助言

美術教育が学校の中だけで終わってしまうと、社会との溝ができたまま広がっていかない。社会との境界線を取り払っていくことが美術科教員の役割であり、美術教育の中でどうやって遂行していくかを考えていきたい。社会との関わりを意識したアートマネジメントだからこそ、その課題を考える時に、教室の中だけの話にせず視野を広げてほしい。美術が社会をけん引しているという意識を強く持ち、教育全体を変えていこうとしなければ、現状を改善できない。

編集後記

第55回関東甲信越静地区造形教育研究栃木県大会報告書を作成するにあたり、記録・編集等の関係者の皆様に、大変なご苦労ご協力をいただきましたこと、まずもって感謝申し上げます。

「つなげよう自分らしく生きる未来へ」をテーマに行われた栃木大会は、関係者と参加者と幼児、児童、生徒の力が結集されることによって、本当に素晴らしい大会にすることができました。予想を遥かに上回る人数の参加者を得て盛況の内に終えることができました。本大会の成果が生かされ、造形教育がますます発展し、次の大会へとつながっていくことを祈念しております。ありがとうございました。

(栃木大会編集局)